名古屋市文化財調査報告54

埋蔵文化財調査報告書41

正 木 町 遺 跡（第14・15次）
伊勢山中学校遺跡（第９次）
竪 三 蔵 通 遺 跡（第16次）
千 音 寺 遺 跡（第４次）

2002

名古屋市教育委員会

例言

1、本書は、平成13年に名古屋市教育委員会が実施した、市内４遺跡５地点の発掘調査の報告である。

2、本書に収録したのは、正木町遺跡、伊勢山中学校遺跡、竪三蔵通遺跡、千音寺遺跡の発掘調査報告であり、各調査の概要は下記の通りである。

正木町遺跡（第14次）

調査地点　中区正木二丁目1108番-1

調査面積　約70㎡

調査期間　平成13年２月26日～平成13年３月23日

調査原因　個人住宅建設

担 当 者　野澤則幸　　村木誠

伊勢山中学校遺跡（第９次）

調査地点　中区正木三丁目２番

調査面積　約80㎡

調査期間　平成13年１月９日～平成13年２月９日

調査原因　中学校擁壁工事

担 当 者　伊藤厚史　　藤井康隆

千音寺遺跡（第４次）

調査地点　中川区富田町千音寺地内

調査面積　約72㎡

調査期間　平成13年７月２日～平成13年７月31日

調査原因　下水道工事（「中川区富田町千音寺地内下水道築造工事」）

担 当 者　野澤則幸　　村木誠

正木町遺跡（第15次）

調査地点　中区正木二丁目1107番１、２

調査面積　約110㎡

調査期間　平成13年４月２日～平成13年４月27日

調査原因　個人住宅建設

担 当 者　藤井康隆　　村木誠

竪三蔵通遺跡（第16次）

調査地点　中区栄一丁目2219

調査面積　150㎡

調査期間　平成13年７月23日～平成13年８月31日

調査原因　マンション建設

担 当 者　伊藤正人　　木村有作

3、本書で用いる水準値はT.P.(東京湾の平均海面)を、方位は国土座標第Ⅶ系による座標北を用いている。

4、調査の記録、出土遺物等は見晴台考古資料館で保管している。

5、本書の執筆はそれぞれの調査担当者が行い、執筆者名は目次に示した。全体の編集は村木が行った。

目次

正木町遺跡第14・15次発掘調査報告　…1

第14次発掘調査（村木）　…5

第15次発掘調査（藤井）　…13

伊勢山中学校遺跡第９次発掘調査報告（藤井）　…35

竪三蔵通遺跡第16次発掘調査報告（伊藤）　…49

千音寺遺跡第４次発掘調査報告（村木）　…73

『埋蔵文化財調査報告書41』　正誤表

頁	行	誤	正
16	28	（５）（６）は器種	（５）は灰釉陶器である。（６）は器種
16	31・32	（９）は須恵器坏蓋で、（１０）は須恵器坏蓋で、	（９）・（１０）は須恵器坏蓋、
18	図５キャプション	須恵器坏蓋	須恵器坏身
18	11	（２）は高坏（３）	（２）は高坏、（３）
20	9	復元直径　　cmで、	復元直径32cmで、
20	30	（２）は須恵器ハソウ	（２）は須恵器甕
20	34	縄タタキがほどこされている（８）	縄タタキがほどこされている。（８）
21	第15図	右最上段の須恵器坏蓋に番号無し	7
22	20	須恵器の高台付？	須恵器の高台付埦
23	第２０図（スケール下）	（２のみ）	（２のみＳ＝1/1）
24	写真８	須恵器（第10図-10）	須恵器（第10図-18）
41	10	住宅建設局	住宅都市局
48	写真21	中世常滑甕（第11図-13）	中世常滑甕（第11図-11）
52	27	図３	図２
52	31	図６-33層	図５-33層
56	表１Ｐ４底高	8.95	8.25
56	表１Ｐ５底高	8.25	8.35
56	表１Ｐ６底高	8.35	8.10
56	表１Ｐ51底高	8.65	8.10
56	表１Ｐ52肩高	8.45	8.65
56	表１Ｐ52底高	8.25	8.60
57	表１Ｐ154肩高	8.35	8.70
57	表１Ｐ154底高	8.50	8.35
61	35	北西隅	北東隅
63	11	図７	図６
65	写真４説明	M　SB3の焼土とSE3（後半区南東隅、西から） N　SK10とこれを覆う礎石（南から）	M　SK10とこれを覆う礎石（南から） N　SB3の焼土とSE3（後半区南東隅、西から）
75	7	[野口・山田2000]	[山田・野口2000]
79	4	斎藤氏の編年では	斎藤氏の編年[斎藤1988]では
80	第９図	断面模式図上端が切れている	78頁第4図参照

正木町遺跡第14・15次発掘調査報告

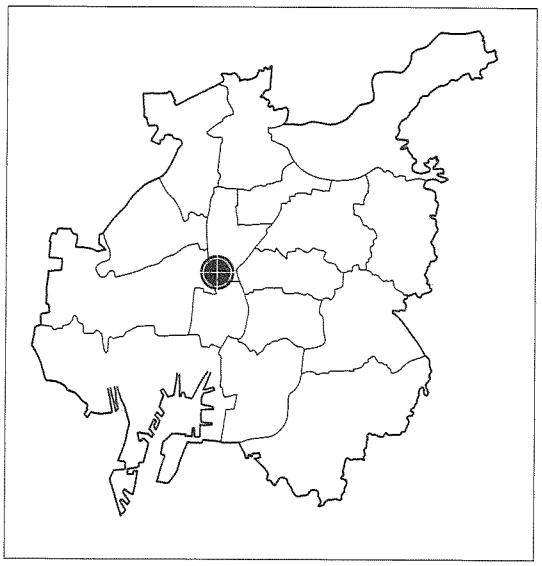
目次

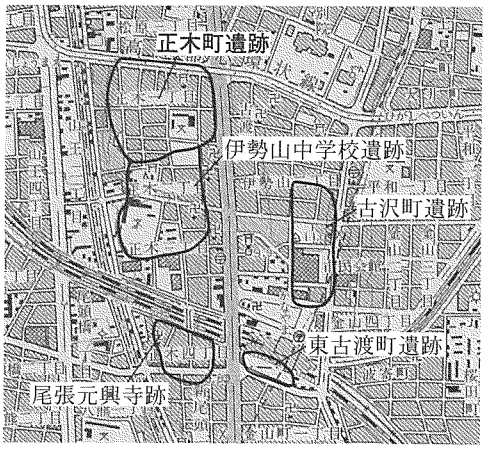
一、遺跡の概要…… 3頁
二、第14次調査…… 5頁
三、第15次調査……13頁
四、まとめ……23頁
付編　名古屋台地古墳時代の基礎資料(4)
　－正木町遺跡第4次調査出土鉄器の調査－…… 27頁

一、　遺跡の概要

位置と環境

正木町遺跡の南方には、おおくの重要な遺跡が近在している。古墳時代中期・後期の住居址を多数検出し初期須恵器や鉄鋌などをも出土する伊勢山中学校遺跡、それと一連の古墳時代中・後期の集落および東海地方最古期の寺院として著名な尾張元興寺跡、古墳時代中・後期の小型方墳・円墳群とそれにともなう埴輪や須恵器、古代の住居址を検出した東古渡町遺跡などがその代表例である。正木町遺跡は、それらと一体で古墳時代中期から古代にいたるまでの大規模集落をなす。とくに古墳時代後期末から古代においては、その中心地であったと考えられ、当該期における名古屋台地の中枢的集落として、その重要性が注目されている。





第１図　正木町遺跡の位置

既往の調査

正木町遺跡では、これまでに13次にわたる調査を経ている。古墳時代から古代については、古墳時代中期の竈をもつ住居址や、古代のものかと考えられる大型掘立柱建物群など、重要な遺構が検出されている。遺物としては、古墳時代中期から古代にいたるまでの須恵器や土師器が多量に出土している。とくに、初期須恵器や鉄鋌、「黒見田」の文字を刻む古代の須恵器、古代の羊形硯、陶馬など、特殊な遺物を出土している点が注目できる。

そのほかの遺構・遺物としては、少数ではあるが、縄文時代、弥生時代の遺物の存在も知られている。また、中世の大溝や井戸、中世の陶器などを検出している。中世城館関係のものと考えられ、古墳時代以来中世にいたるまで、名古屋台地の中心的な場所であったことを推定できる。

第２図　正木町遺跡・伊勢山中学校遺跡と既往調査地点（数字は調査次数）

二、第14次発掘調査

1、調査の経過

調査は、個人住宅の建築に伴って実施した。排土置場の関係などから調査範囲を3分割して実施した。調査範囲の南側半分を1回目の調査区とし、2月26日から表土除去を開始した。遺物を包含する層を掘削し、熱田層からなる地山面で遺構検出を行ったが、ほとんど検出されなかった。2月28日には写真撮影、平面及び断面の実測図を作成し、1回目の調査区の調査を終了した。残りの北側半分のうちの、西半を2回目の調査区とし、3月1日から掘削をはじめた。この調査区についても同様な状況であったが、後述するように、1回目の調査区で遺物包含層と考えた土が「整地土」である可能性も考えられたため、この上面でも遺構検出を行った。更にそれを掘り下げ、熱田層の上面でも遺構検出を実施した。その後、写真撮影、実測図を作成し、2回目の調査を終了した。3回目の調査区である南東部分についても同様な状況であったため、2回目と同様な調査を行い、予定よりやや早く現地での調査を終えた。

その後、見晴台考古資料館において図面、出土遺物等の整理作業を実施した。遺構番号などは現地作業のときのままである。

写真1　調査風景

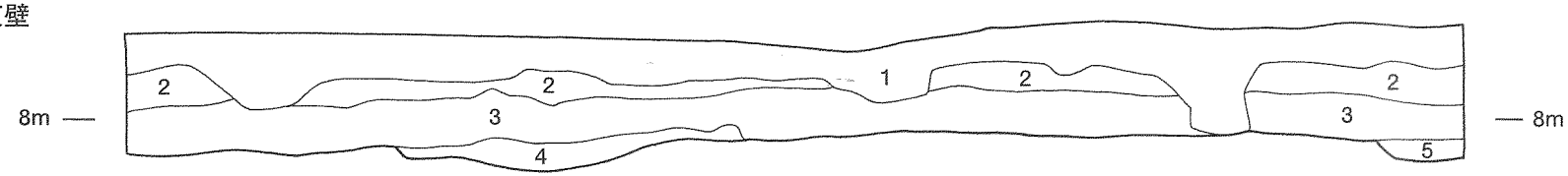
2、基本層序（第3図）

調査区の層序は壁面で確認しながら掘削した。その内、北壁を除く壁の断面図を図化した。

調査区の基本的な層序は表土を別にすると大きく2層に区分することができる。すなわち、図で2とした褐色砂質土と、その下位の暗褐色ないしは黒褐色土（第3図の3及び12)である。3層と12層は、ごくわずかな色調の違いで分層したものであり、基本的には同じ土である。その下位では地山である砂質の熱田層が認められた。本来この上に堆積していたと思われる粘質の熱田層は見られず、削平されたものと思われる。今回の調査区とは道を挟んで隣接する7次調査では、粘質の地山土が残存していたことから見て、本来はこの地点にも粘質の熱田層が存在したものと考えてよい。

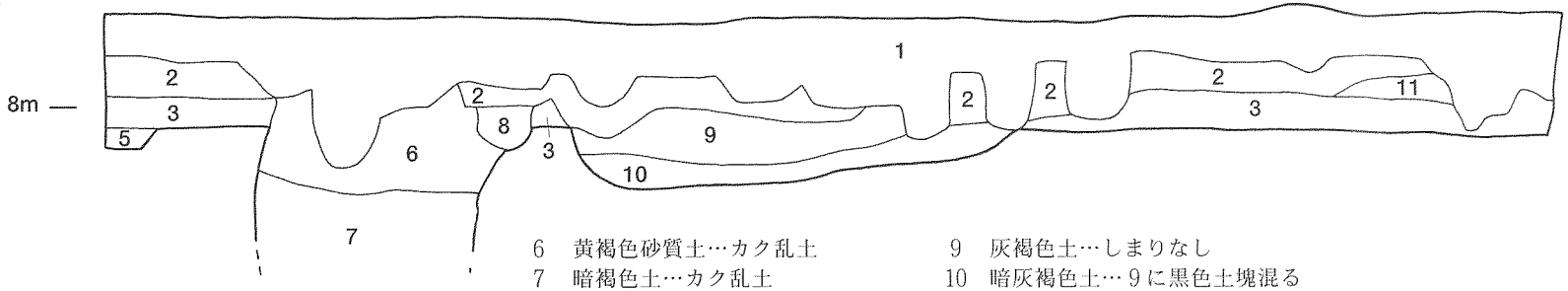
暗褐色ないし黒褐色土中には、直径数センチ程度の粘質熱田層の塊が極めて大量に含まれていた。また、この土層中からは古墳時代から中世までの遺物が混在して出土している。調査地点では、粘質熱田層が堆積していなかったことあわせて考えると、中世以降に、粘質の熱田層までを削った上で、その粘質土とそれまで存在した黒色ないしは暗褐色の遺物包含層とをあわせて整地をするといった大規模な造成が行われたのではないかと推測する。

調査区東壁



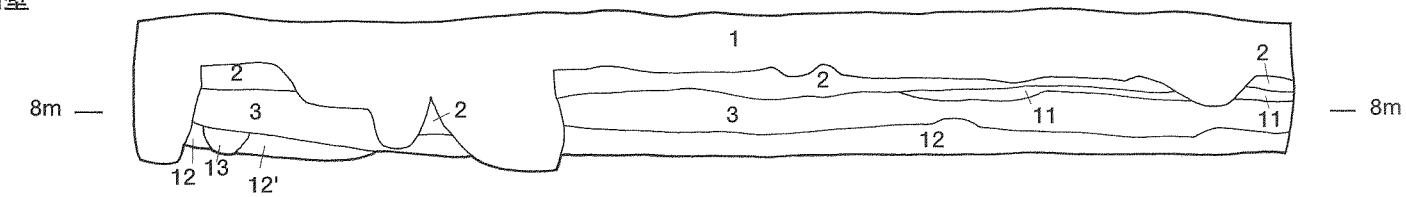
1　表土・カク乱土
2　褐色砂質土…しまりなし
3　暗褐色土…地山土を多く含む、
　　しまりあり、粘質
4　暗黄褐色土…地山土中に少量の黒褐色混る
5　暗黄褐色土…地山土と黒褐色混る

調査区南壁

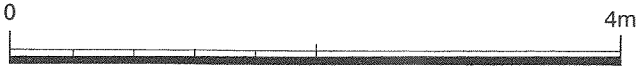


6　黄褐色砂質土…カク乱土
7　暗褐色土…カク乱土
8　褐色砂質土…黒色土塊含む
9　灰褐色土…しまりなし
10　暗灰褐色土…9に黒色土塊混る
11　褐色砂質土…2と同様だが5㎝の
　　黒色土塊を含む

調査区西壁



12　黒褐色土…3と同様、やや黒味強い
12′　黒褐色土…12に似るが黒味強い、SK01
13　黒褐色土…P.2埋土、地山土をあまり含まず



第3図　調査区壁面実測図

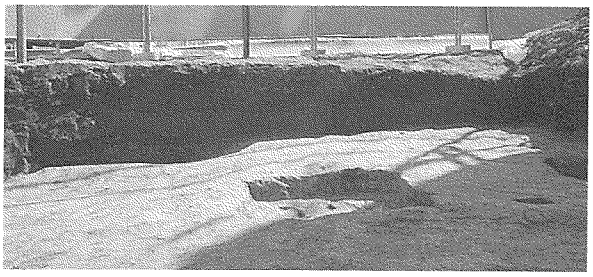


写真２　調査区東壁（北半）

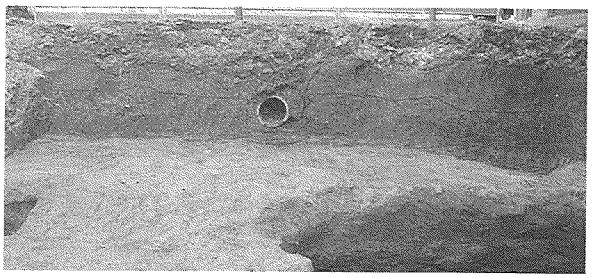


写真３　調査区東壁（南半）

写真４　調査区西壁（北半）

写真５　調査区西壁（南半）

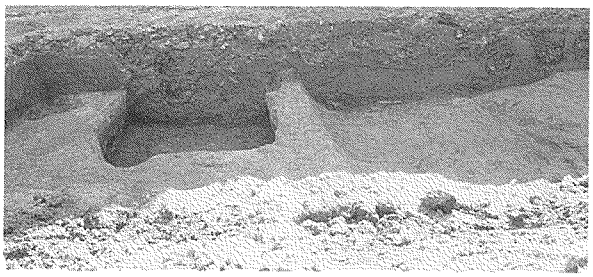


写真６　調査区南壁

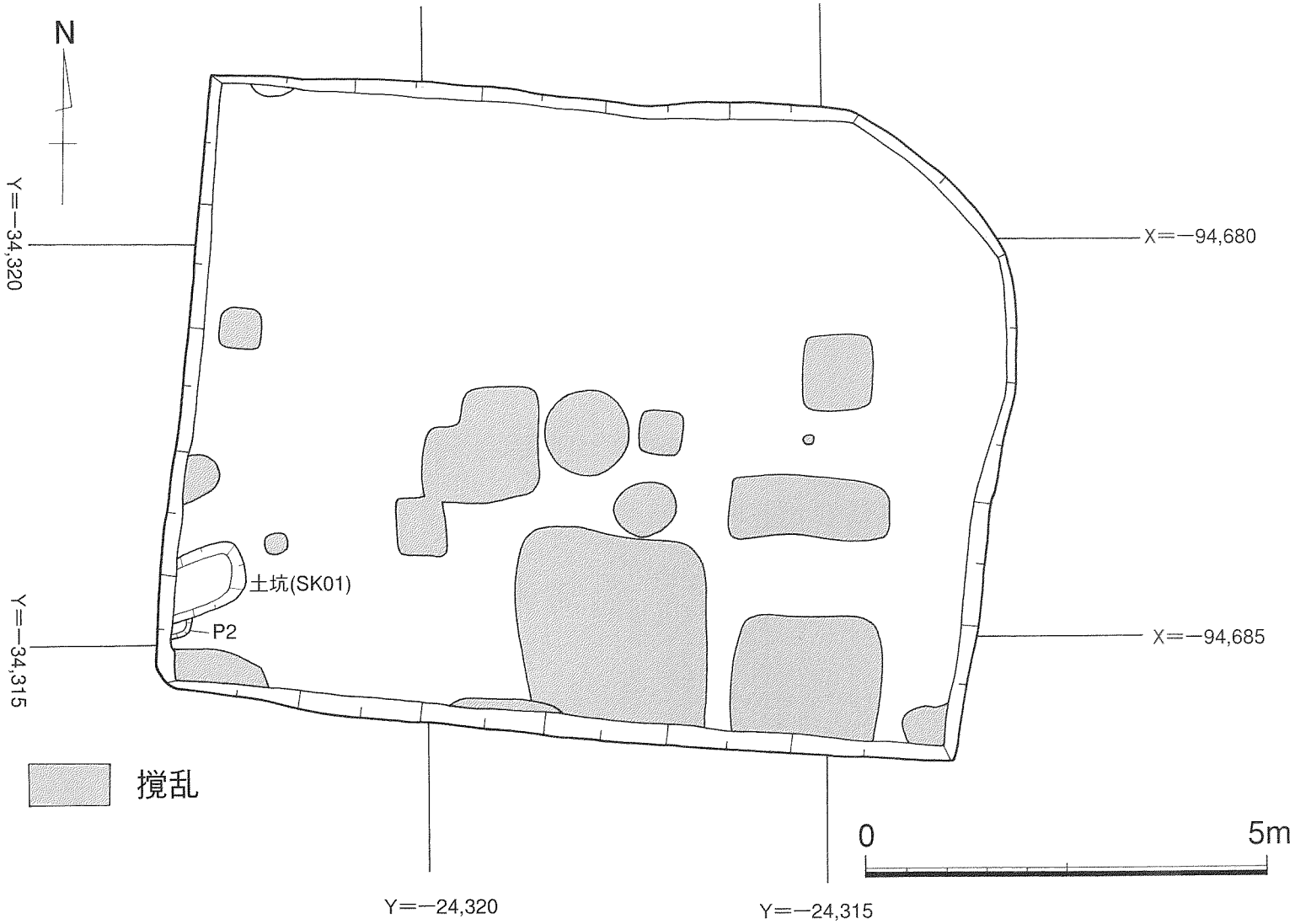
３、遺構と遺物

今回遺構として報告するのは、基本層序で述べた「整地土」と、熱田層上面で検出した土坑１、ピット１である。「整地土」とする判断が正しいとすると、その上面には何らかの遺構があるはずであり、調査区の北半については検出作業を行ったが、明瞭な遺構は検出できなかった。

「整地土」

基本層序でも述べたとおり、調査区の全域にわたって、粘土質の熱田層の塊を多く含む黒褐色土が認められた。地山土の量や塊の大きさから見て、意図的に混入されたものと考えたほうが良いと思われ、一般的な包含層と考えるよりは、整地などの人為の加わった土層であると判断した。この土は、特に締め固められたような様子は認められなかった。

この土層中からは、古墳時代の土師器、古代の須恵器、灰釉陶器等が比較的多く見られた。図化できなかったが常滑の甕など中世陶器も確実に含まれている。この土から出土した遺物は、整地に伴って削平された包含層である黒褐色土に含まれていたものである。この土が整地以前にはどこに堆積していたのかは確実にはわからないが、それほど大きく移動していないと考えるならば、中世以前には古墳時代、古代な


N
Y=−34,320
Y=−34,315
X=−94,680
X=−94,685
土坑(SK01)
P2
撹乱
0
5m
Y=−24,320
Y=−24,315

第４図 調査区平面図

どの包含層や遺構が良好に残っていたものと思われる。遺物は20点図化できた（第５図１～20）。

１は、S字状口縁台付甕の口縁部の小片である。口縁端部に幅広い面を持つ。２も小片だが、パレススタイル壷の口縁部である。口縁端部外面には、凹線は確認できないが、棒状浮文が残っている。赤彩が施されている。口縁部の内面は、かすかな稜をなし、稜の上位には３段の斜位刺突が施されている。３は、古墳時代中期の土師器高杯である。脚柱状部の外面は縦方向にヘラナデがなされており、内面は横方向にヘラケズリが施されている。４から18は須恵器である。４は杯蓋。口縁端部付近が段をなしている。５は、つまみを持つ蓋である。６から８は杯である。６は、椀状の器形を呈し、口縁端部は丸い。８は高台がつく。９は、甑あるいは鍋の牛角状の把手の破片である。11から13は甕の口縁部である。14から18は甕の胴部小片であるが、14は縄蓆文タタキメが見られ、15から17には格子タタキメが残されている。18は格子が粗い。

19、20は灰釉陶器の椀である。

先述の通り、地山土を極めて多く含むという土の特徴と、長期間にわたる遺物を包含することから、この土を「整地土」と判断した。ただし、この上面で遺構は見つかっていない。

その他の遺構

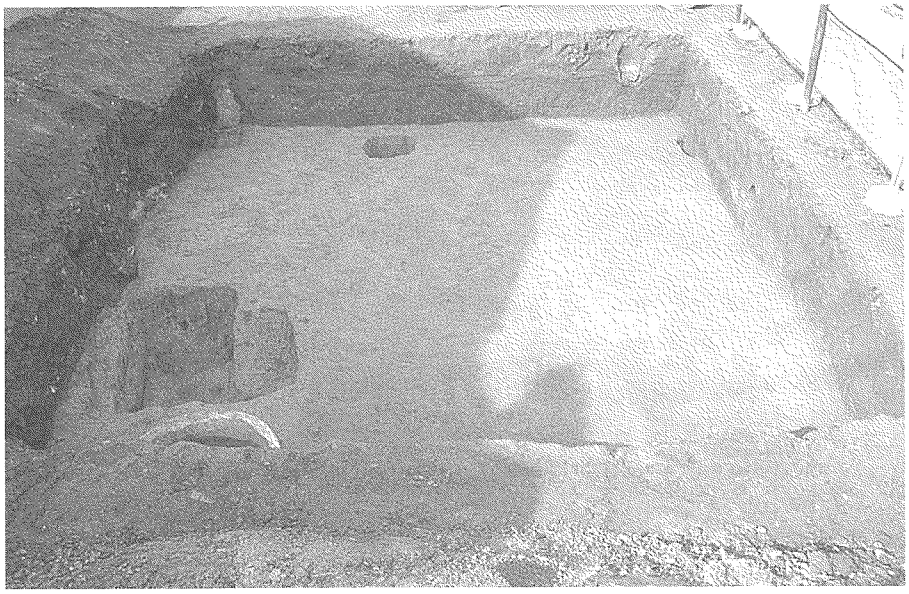
「整地土」の下位の熱田層で、土坑およびピット（Ｐ２、Ｐ１は欠番）を１つずつ検出したが、それぞれ浅いもので遺構であるのか、地山の凹凸に過ぎないのかわからない。

その他の出土遺物

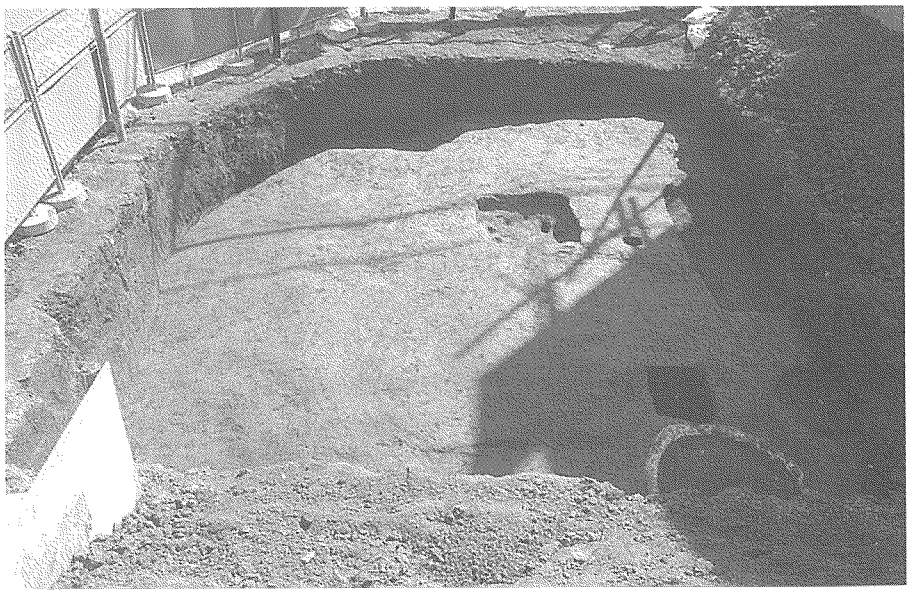
表土除去中などに出土した遺物を図化した（第５図21～25）。１回目の調査区では、「整地土」についての認識が乏しく、表土除去の際にこの土の一部も掘削してしまった。そのため、ここで図化した遺物の多くは整地土に由来する遺物の可能性が高い。21は土師器甕の台部である。22は、須恵器高杯の脚部である。小片のため、数はわからないが多くの方形の透孔があけられている。23は須恵器高杯の脚部。24は鉢の底部である。25は、須恵質の甕の底部である。明瞭な平底であり、図化部はすべて残存している。

「整地土」上面
（調査区北東部）

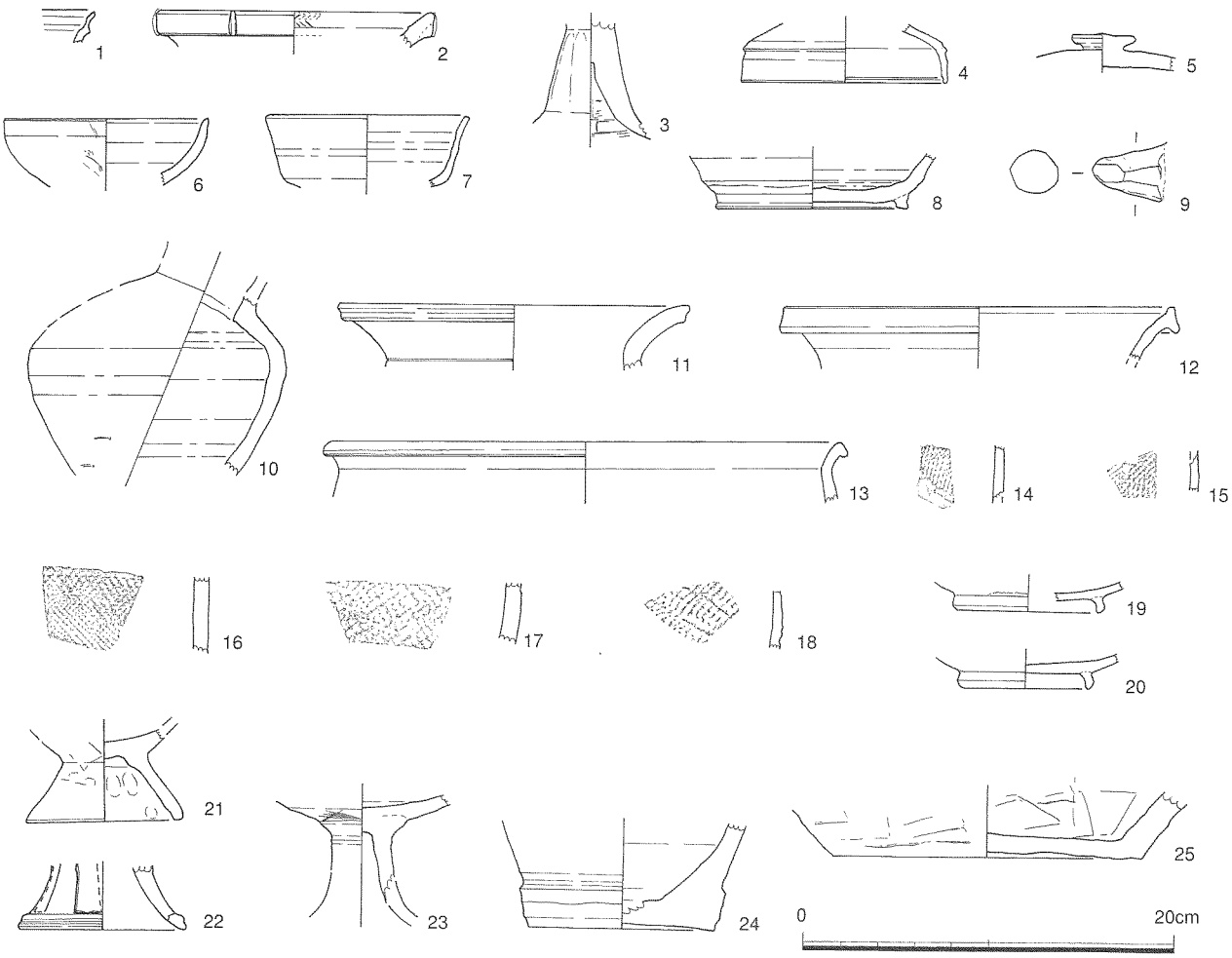
調査区全景
（南半部）



調査区全景
（北西部）



調査区全景
（北東部）

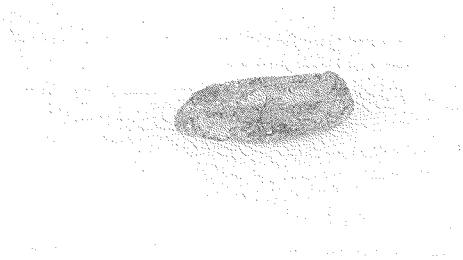


第５図　出土遺物（1～20：「整地土」、21～25：表土除去中）

4、小結

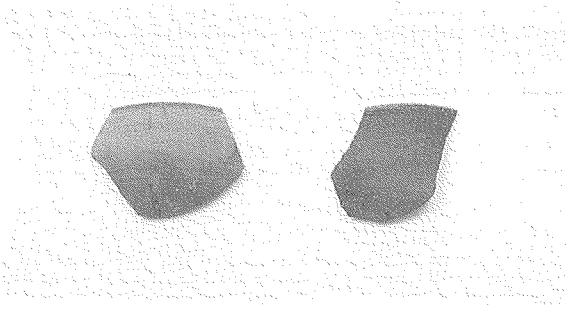
今回の調査では、調査区全体にわたって、中世以降の「整地土」を確認した。この土の中には古墳時代、古代などの遺物の比較的大きな破片が含まれており、この造成以前には良好な包含層が存在したであろうことが推測される。

今回の調査地点に道路を挟んで東に隣接する７次調査の地点ではこうした状況は認められないため、この整地の範囲は東には広がらないことは確かである。また、今回の調査では、「整地土」上で遺構は見られず、その目的はわからない。更なる調査の積み重ねが必要である。



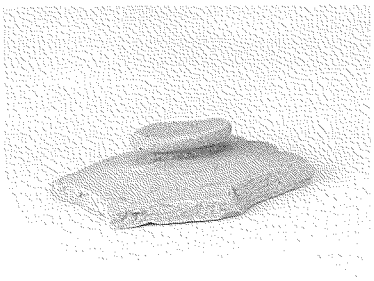
「整地土」出土縄文土器

「整地土」出土遺物

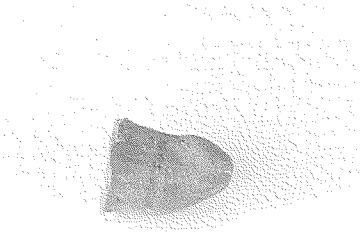


「整地土」出土遺物

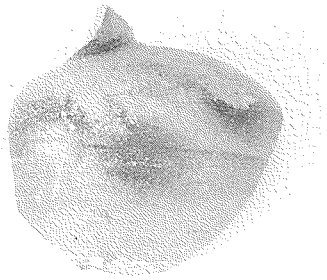
「整地土」出土遺物



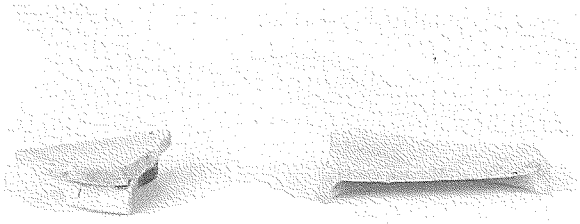
「整地土」出土遺物



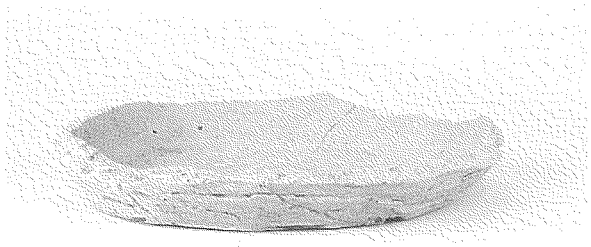
「整地土」出土遺物



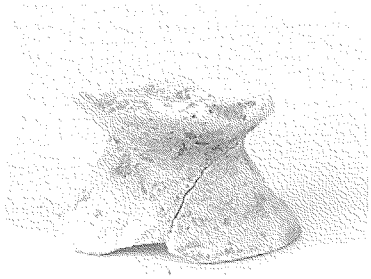
「整地土」出土遺物



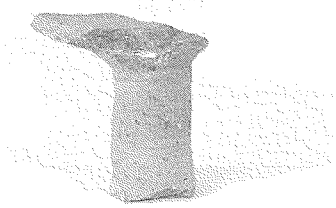
「整地土」出土遺物



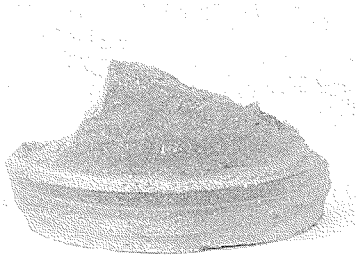
表土除去中　出土遺物



表土除去中　出土遺物



表土除去中　出土遺物

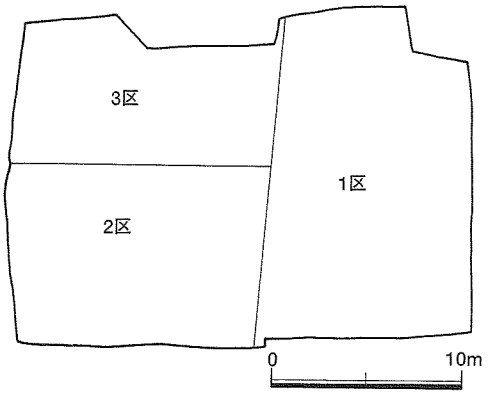


表土除去中　出土遺物

三、第15次発掘調査

調査の経過

個人住宅の建築にともない、約110㎡が調査の対象となった。発掘にあたり、排土の積み置き場所を確保するために調査区を東西に二分したが、後半部分の掘削にいたって、排土置き場が充分でない状況となったため、後半部分をさらに南北に二分した。したがって、結局調査区を３区に分けて調査したかたちとなった。



第６図　調査区小区分概略図

調査日誌抄

４月２日～３日　調査準備。

４日　前半区（１区）の表土掘削。

５日～６日　前半区の包含層を掘削。

９日　整地土とおもわれる層を遺構として掘削。地山面を検出。清掃。

10日　前半区の壁面・地山面を清掃後、壁面と平面の写真撮影と実測図を作成。

11日　前半区を埋め戻した。

12日　雨のため休工。

13日　後半区の表土掘削。排土を置ききれないことがわかり、後半区をさらに南北２分割することにした。後半区南半を２区、後半区北半を３区とした。

16日　２区の包含層を掘削。途中、精査・検出をおこなった。

17日　２区を完掘。壁面の清掃と実測をおこなった。

18日　壁面および平面の清掃、写真撮影、実測を完了。２区を埋め戻した。

19日　３区の包含層上位までを掘削。

20日　包含層上位までの掘削を完了。東側については、防空壕とおもわれる大きな撹乱があったため、地山面まで掘削した。

23日　整地土に相当する包含層下位を完掘し、清掃をおこなった。

24日　壁面および平面の写真撮影、実測を完了した。昼から雨が降ったため、埋め戻し作業のみを残した。

25日　３区を埋め戻した。

26日～27日　器材撤収、調査終了。

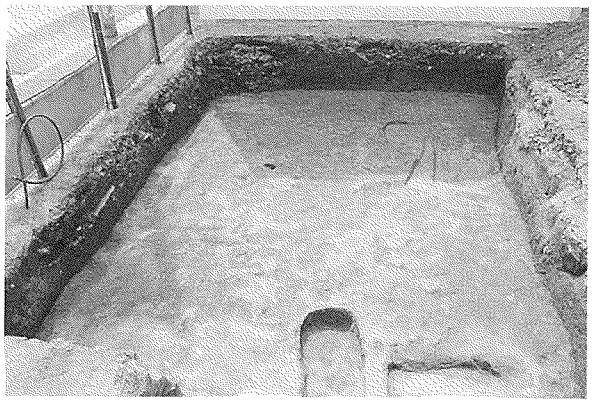
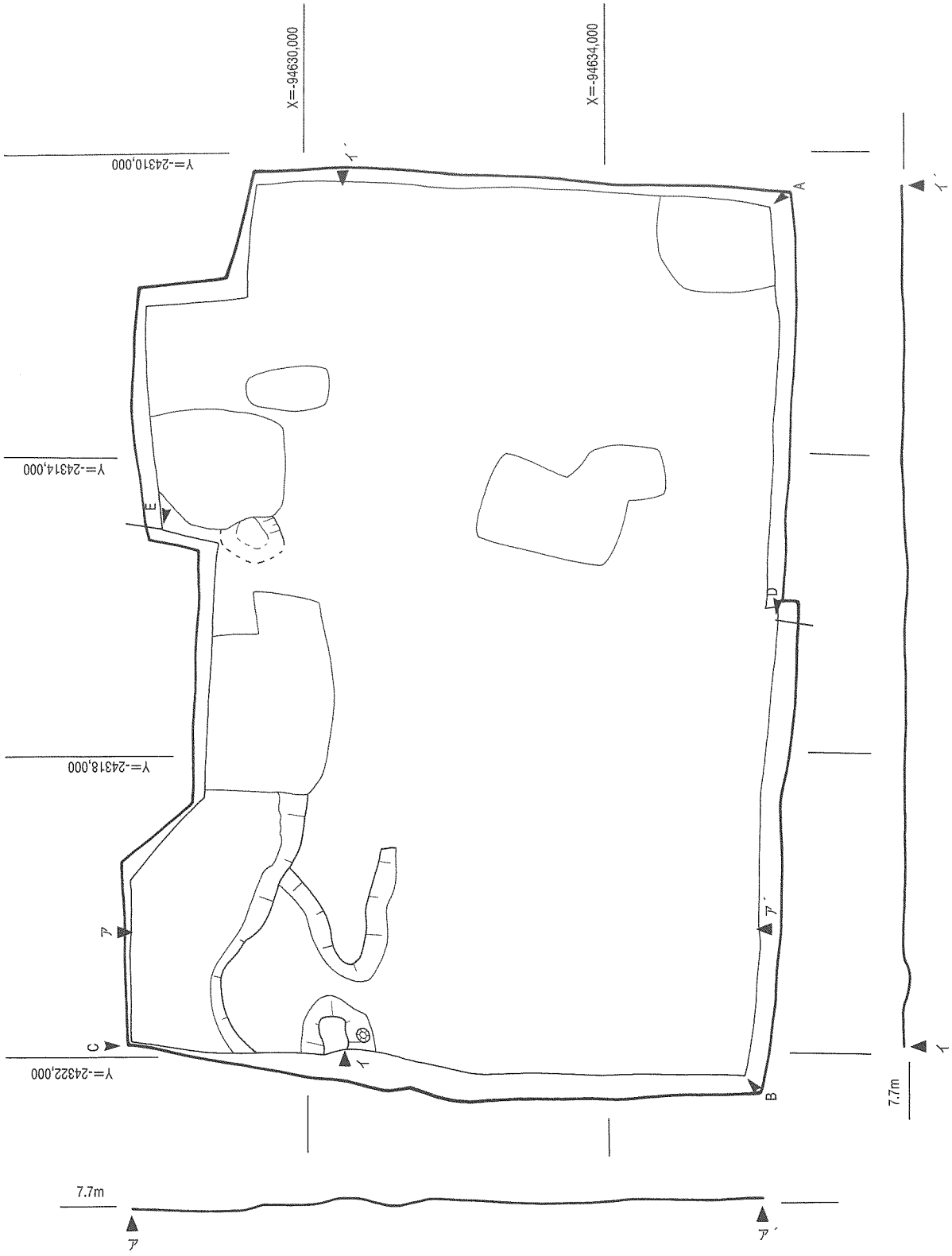


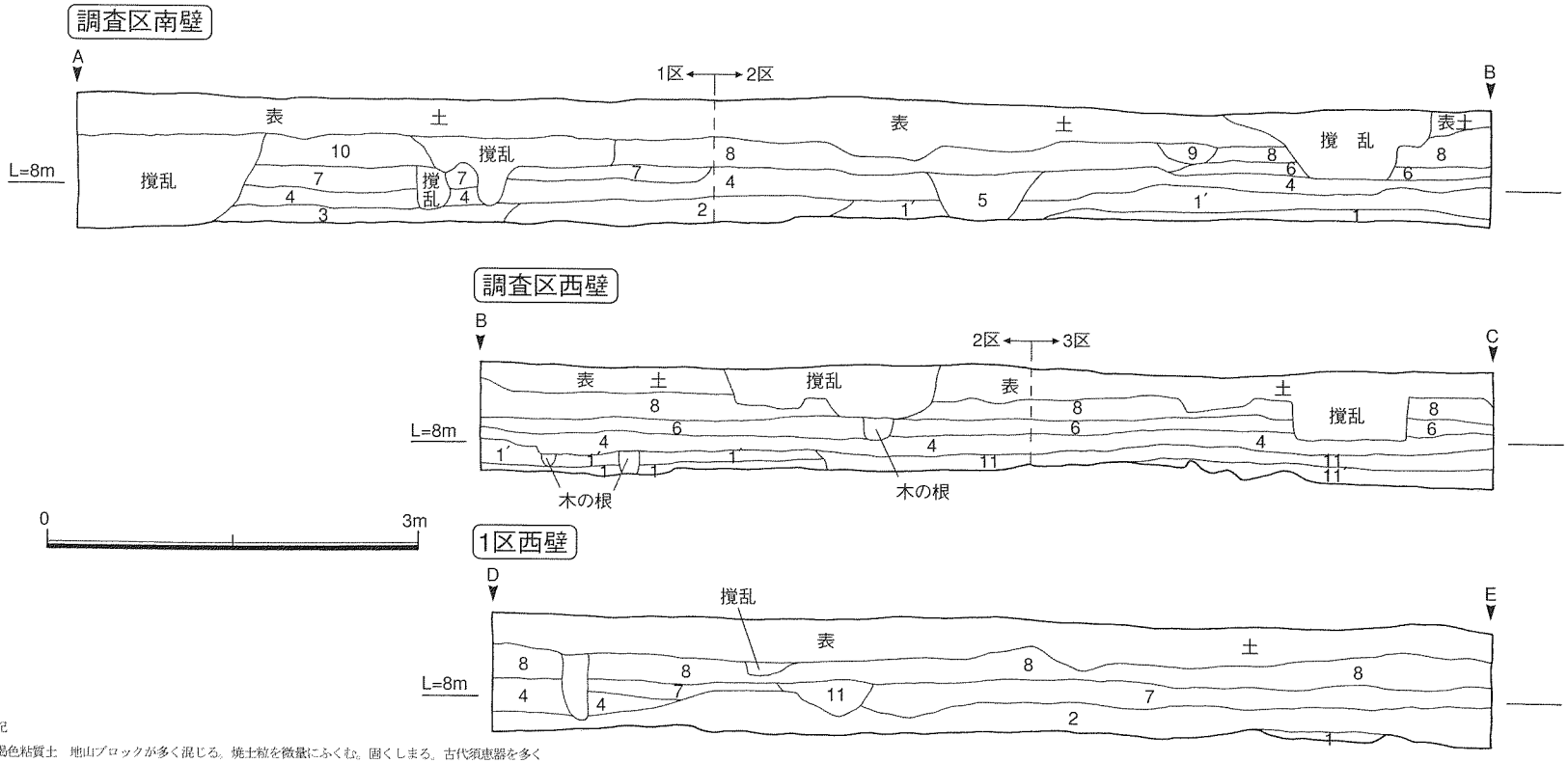
図１　１区完掘状況

図２　２区完掘状況

図３　３区完掘状況



第７図　第15次調査区平面図（S＝1/80）



第8図　土層断面図

土層注記

1　黒褐色粘質土　地山ブロックが多く混じる。焼土粒を微量にふくむ。固くしまる。古代須恵器を多くふくむ。

1′　1と同様の土だが、1にくらべやや砂質で、しまり弱い。

2　黒褐色粘質土　1よりもやや黒みが強く、地山粒と少量の暗褐色砂が混じる。

2′　2と同様の土だが、地山ブロックがより多く混じる。しまりやや弱い。

3　黒褐色粘質砂土　地山細粒が多く混じる。

4　黒褐色粘質砂土　暗褐色砂が多く混じる。やや茶色みをおびる。

5　黒褐色粘質土　微量の地山粒、少量の暗褐色砂が混じる。やや茶色みをおびる。

6　暗褐色粘質砂土　地山ブロックおよび3層に似る土が多く混じる。

7　暗灰色粘質砂土　地山ブロック、暗褐色粘質砂土が多く混じる。

7′　7に似るが黒色粘質砂土が多く混じる。

8　暗褐色砂質土　遺物をほとんどふくまない。しまり弱い。

9　暗灰色砂質土

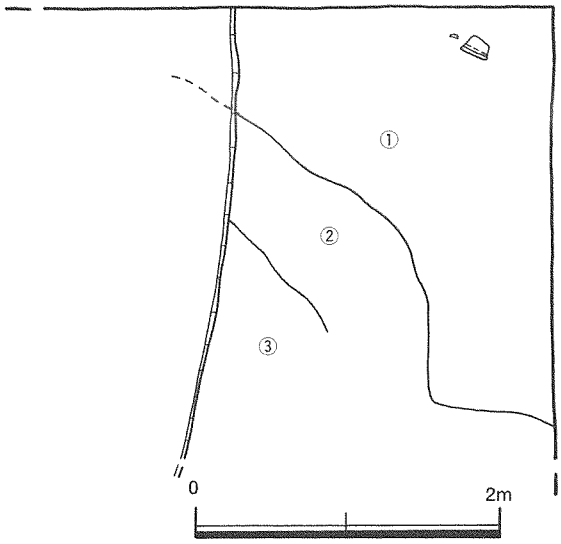
10　暗灰色粘質砂土　暗褐色粘質砂土が混じる。

11　7に似るが地山ブロックをふくまない。やや黒みをおびる。

12　黒色粘質土　微量の地山細粒が混じる。しまりやや強い。SK2埋土。

基本層序と遺構

第15次調査では、明確な遺構を確認することはほとんどできなかった。地山面については、遺構として認めることができたものはP1のみで、ほとんど凹凸をもたない平坦面であった。地山面よりも上には、遺物包含層様の土層が水平に堆積していた。基本的には、地山直上に地山ブロックを多量にふくむ黒褐色粘質土層（1′層および2層）が堆積している。それより上位に黒褐色ないし暗褐色のやや砂気をふくむ粘質土（4層・6層）があり、さらにそれらにくらべてやや色の淡い、暗灰色ないし暗褐色の砂気の多い土が最上位にみとめられる。これらの包含層様の土は、堆積状況および既往の調査での知見から、地山までも削りこむような大規模な整地行為がおこなわれた際の「整地土」であると考えた。この「整地土」上で検出できた遺構は、第11′層上面で確認した、SK3のみである。土色、土質によって、ある程度分けることは可能ではあるものの、ピットや土坑状の掘り込みは明確ではなかった。なお、「撹乱」として掘削したもののなかに、「整地土」に掘りこまれた近代の小土坑があった。この小土坑には、子供がままごとに使っていたとおもわれる玩具類のみが埋められていた（注1）。



① 黒褐色粘質土…地山ブロックが多く混じる。非常に固くしまる。
② 黒褐色土…砂気がある。地山粒が混じる。鉄分粒を多く含む。しまり弱い。
③ 暗褐色粘質土…砂気がある。地山ブロックがまじる。しまりやや弱い。

第９図　２区南西隅周辺平面分層略図

遺物

「整地土」上層（1区～3区）

（第10図-1）は、須恵器甑の基部である。外面には縦方向のケズリ調整が顕著で、内面は指オサエ、ナデによって調整している。(2)～(4)は、須恵器甕である。すべて別個体であるが、(2)は口縁から頸部で、焼成はややあまい。(3)・(4)は胴部片で、いづれも平行タタキをほどこしている。(5)(6)は器種・器形不明の紫泥ないし朱泥陶器の類である。中国宜興産あるいは常滑産とおもわれるが、正確なところは不明である。(7)は陶錘である。(8)は須恵器平瓶の胴部である。(9)は須恵器坏蓋で、(10)は須恵器坏蓋で、(11)は須恵器甕の口縁部である。(12)は須恵器の口縁部であるが、器種は不明である。(13)は、蓋坏の身である。外面は光沢のある黒色を呈し、複波状文が施文されている。丸みをもち深い器形からも、東山H111号窯式期ごろの初期須恵器と考えられる。(14)は須恵器甕の頸部から肩部で、平行タタキをほどこす。(15)は須恵器甑の胴部片とおもわれる。(16)・(17)は須恵器で、平行

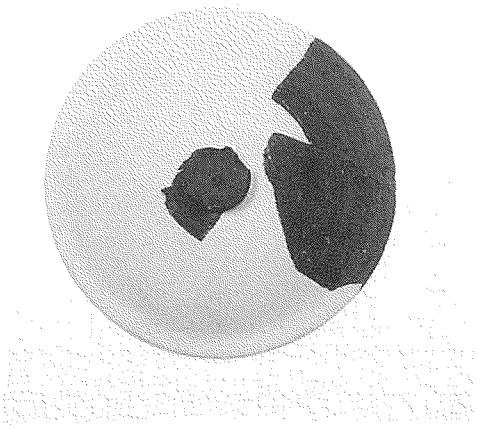
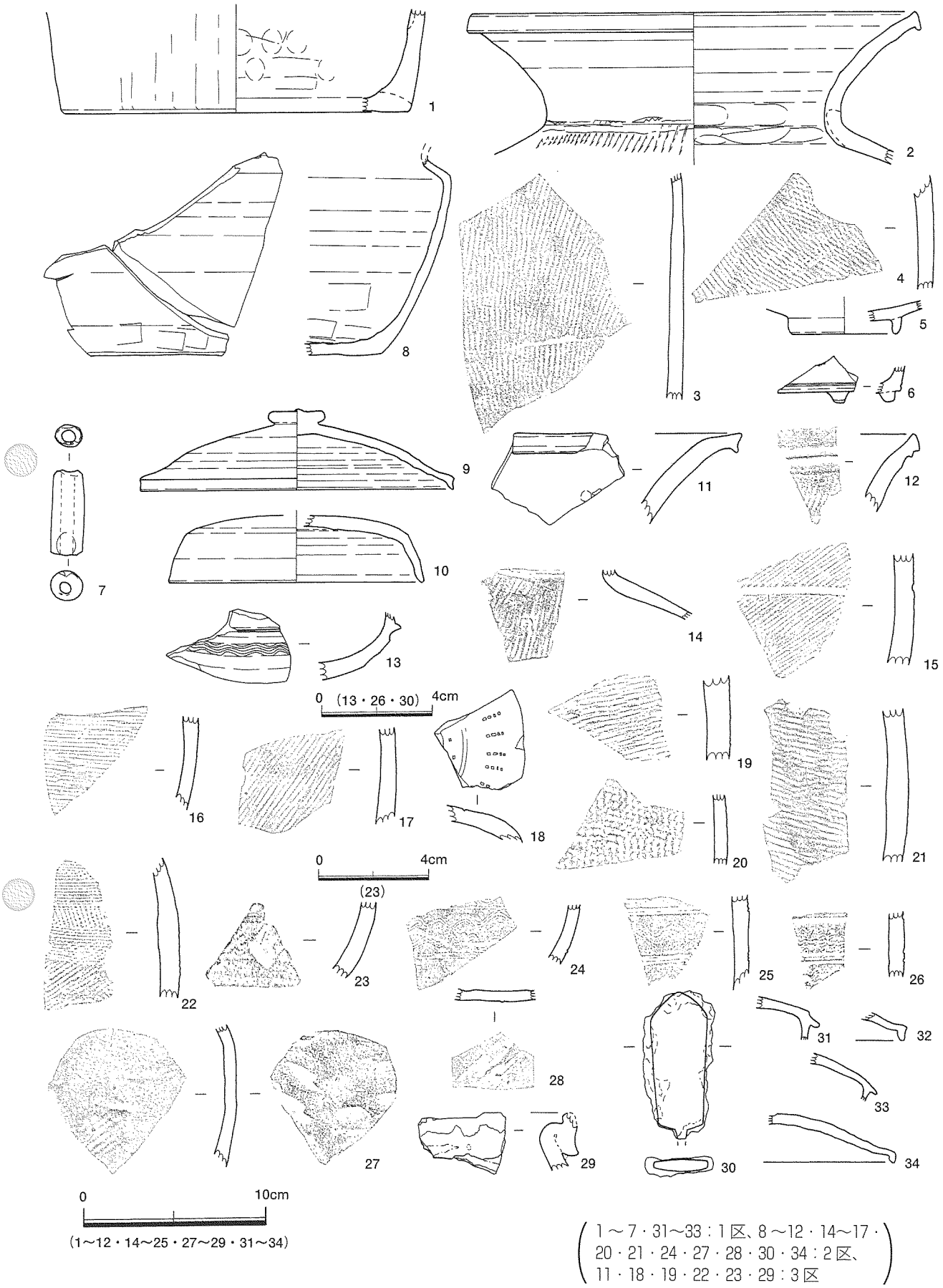


図４　須恵器坏蓋（第10図-9）



第10図　包含層上層（6・7・8層相当）出土遺物(1)

タタキがほどこされている。甕であろう。(18)は須恵器長頸瓶の肩部である。焼成はあまい。(19)～(22)は須恵器甕の胴部片とおもわれる。(20)には格子タタキがほどこされている。(23)～(26)は須恵器片で、波状文を施すものである。(27)は須恵器片だが、きわめて堅緻に焼きしまっている。外面には自然釉がかかり、内面はつよいナデを顕著にほどこしている。(28)は須恵器底部片で、外面には幅細の板状工具をさしこんだような痕跡がある。(29)は常滑焼大甕の口縁である。(30)は鉄鏃である。鏃身部のわりに茎が細い。鎬などはみられず、板状にちかい。(31)～(34)は須恵器坏蓋片である。

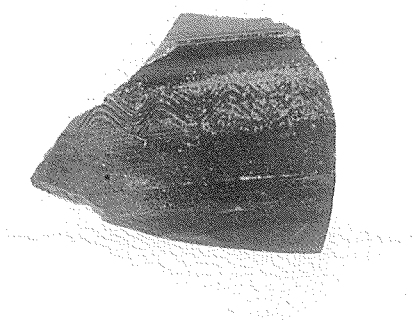
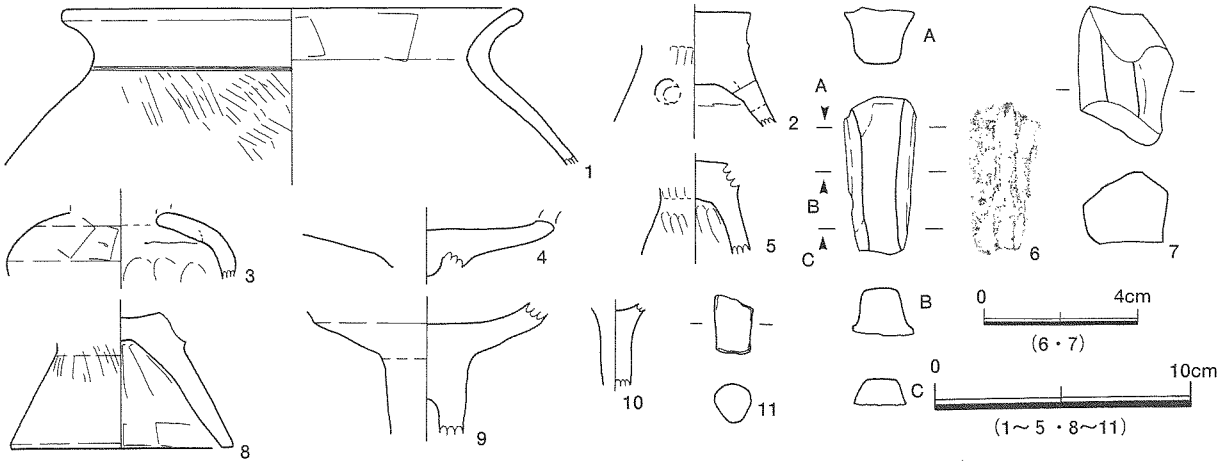


図5　須恵器坏蓋（第10図-13）

（第11図－1）は、土師器甕である。口縁は「く」の字状に外反し、端部は丸い。口縁内面に板ナデをほどこす。外面はハケ調整である。(2) は高坏 (3) は土師器の小型壺である。内面は指オサエとナデで調整し、外面にはケズリをほどこしている。(4) は高坏の坏底部であるが、脚部を欠失している。(5) は高坏脚部である。(6)・(7) は移動式竈の突帯である。(6) の剥離面には、接合用の線刻がほどこされている。(8) は台付甕脚部である。(9) は高坏の坏部から脚部にかけてである。(10)・(11) は知多式製塩土器の脚部である。

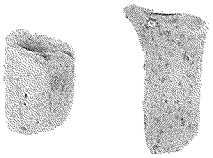
図6　鉄鏃（第10図-30）



第11図　包含層上層（6・7・8層相当）出土遺物(2)（1・2・10：1区、3～7・11：2区、8・9：3区）

「整地土」下層上位（4層相当）

（第12図-1）は須恵器短頸壺の口縁から肩部にかけてである。口径25.2㎝の大型の器形である。Ⅰ25窯式期ごろとおもわれる。(2)は須恵器の口縁であるが、器種器形は不明である。口縁付近に2条、胴部に1条の沈線



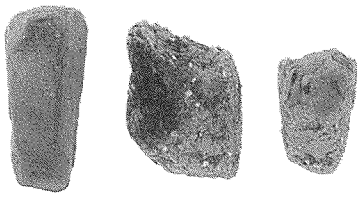
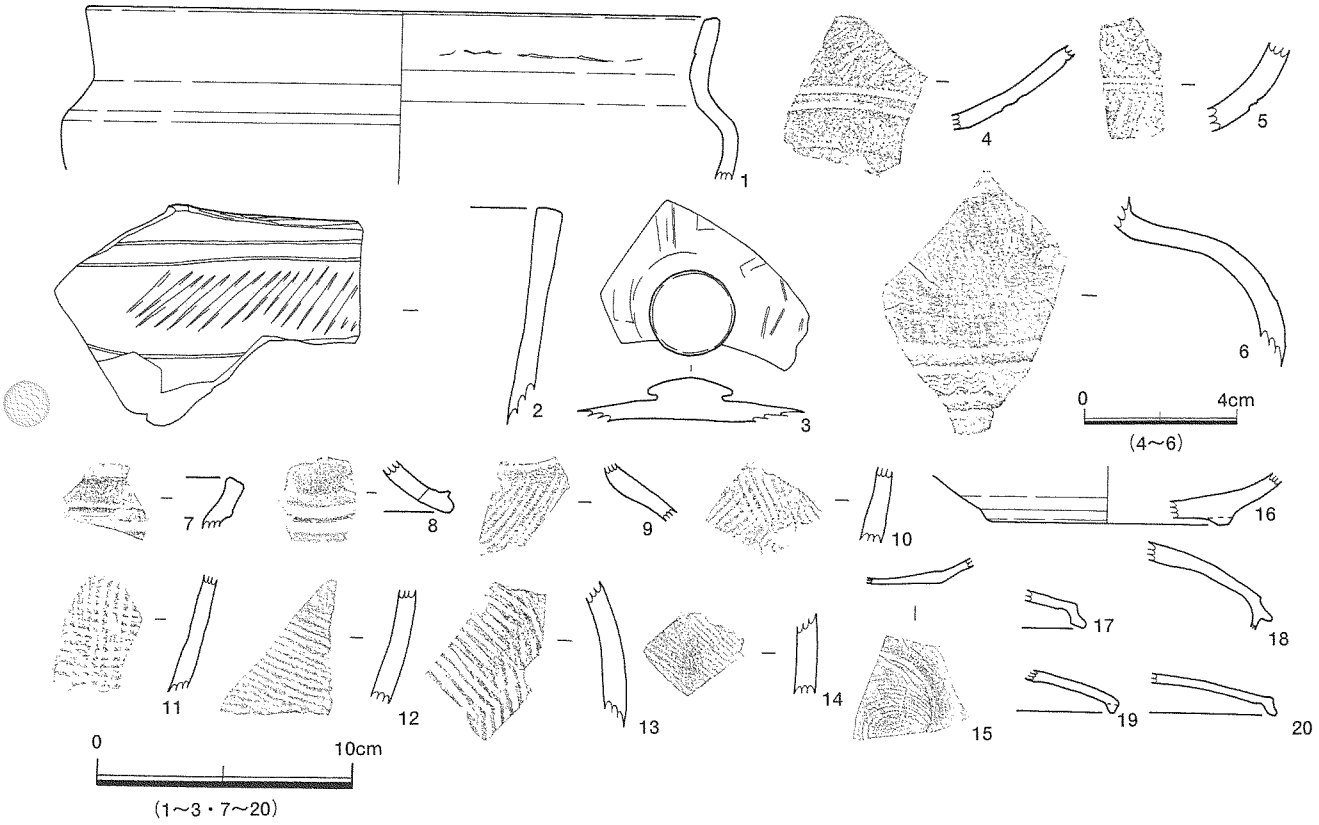


図7　製塩土器（第11図-10·11）　図8　移動式竈

があり、その間には平行タタキがみられる。口縁は直線的でなく、いちじるしくケズリがほどこされて緩く弧状をえがく部分があるいっぽう、平坦な部分がわづかに残っている。ケズリがほどこされた部分が注口状になるのか、あるいは波状口縁をなすのか、よくわからない。(3)は須恵器の坏蓋である。鈕の周辺に回転調整でないケズリがほどこされている。(4)・(5)は波状文をほどこす須恵器である。(6)は須恵器の甕な



第12図　1区包含層下層上位（4層相当）出土遺物

いしは小型の壺形の器形である。胴部に平行沈線と複波状文を施文する。色調は淡い灰色である。東山H111号窯式期のものとおもわれる。(7)は須恵器口縁である。(8)は須恵器高坏の脚部である。方形透孔の一辺が残存している。器表面は黒色の光沢をもつ。H11～H10号窯式期のものであろう。(9)は須恵器甕の肩部で、頸部から上を欠損している。(10)～(14)は須恵器の胴部片である。いづれも平行タタキがみられる。(11)は平行タタキを縦横にほどこして格子タタキ目状にみせている。(15)は須恵器の底部である。回転糸切痕がみとめられる。(16)は山茶碗である。(17)～(20)は須恵器坏蓋片である。

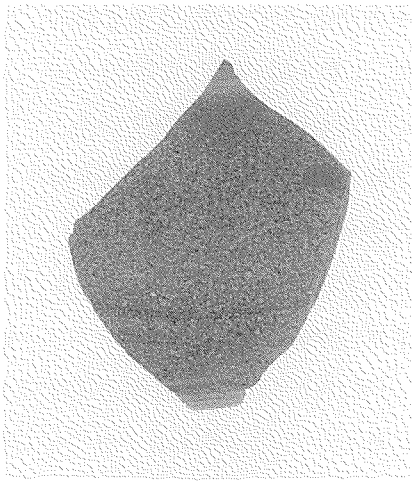


図9　須恵器（第12図-6）

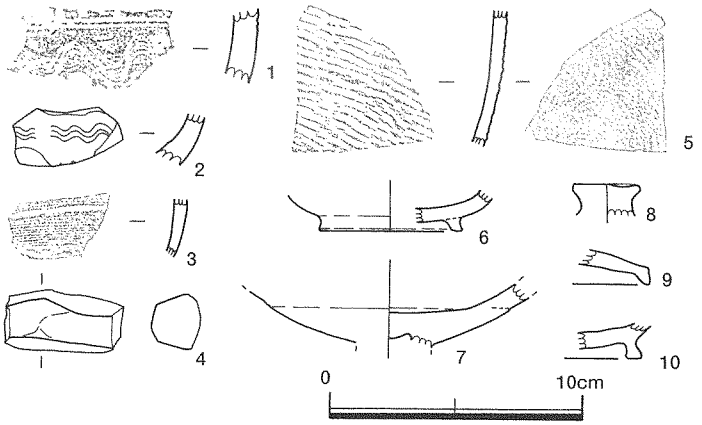
1区「整地土」下層下位（2層・3層相当）

（第13図-1）は須恵器片で、2条の平行沈線と複波状文をほどこしている。(2)も複波状文をほどこす須恵器片である。小片ではあるが、胎土が白く、複波状文も丁寧に施文している。5世紀代にさかのぼる須恵器の破片の可能性がある。(3)は器種器形不明の須恵器片である。1条の沈線がみとめられるほか、擦痕かハケメのような細かい線が横走している。(4)は移動式竈の突帯である。(5)は須恵器甕の胴部片である。外

面には平行タタキがほどこされており、内面には車輪文状当て具痕がみとめられる。(6)は須恵器の底部である。瓶類であろうか。(7)は土師器高坏の坏部である。脚部を欠失している。松河戸Ⅱ式期のものである。(8)は須恵器坏蓋の鈕である。(9)は須恵器鈕蓋片である。(10)は須恵器の底部である。

2区「整地土」下層①上面（1′層上面）

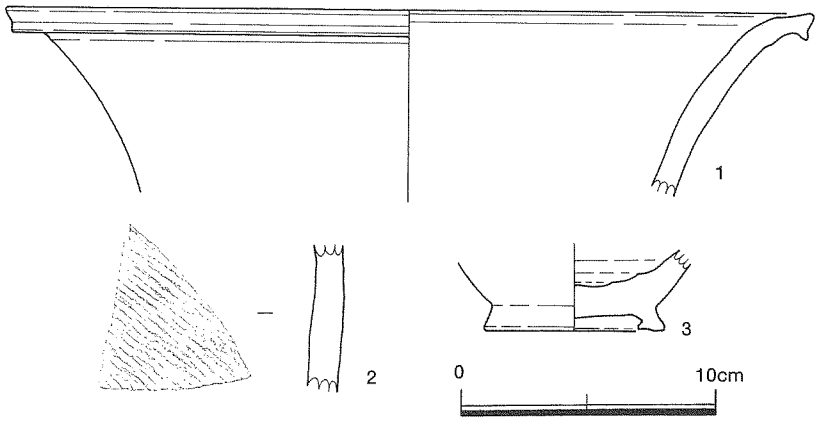
(第14図-1)は、須恵器甕の口縁部である。口縁は端部付近でつよく外反し、端部は面をなし下端がやや垂下ぎみとなる。復元直径　cm で、色調は青灰色である。(2)は須恵器甕の胴部片であろう。平行タタキをほどこす。(3)は須恵器の底部で、高台がつく。瓶類であろう。K115～K44号窯式期か。



第13図　1区包含層下層下位（2・3層相当）出土遺物

2区「整地土」下層①（1′層・1層相当）

(第15図-1) は須恵器口縁部片。器種器形は不明。突線が1条あり、その下に波状文をほどこす。(2)は須恵器の高台つき底部。瓶類であろう。NN288～I25号窯式期とおもわれる。(3)はおろし皿の底部片である。外面に回転糸切痕がある。(4)は須恵器甕の胴部片であろう。平行タタキがある。(5)は土師器高坏の脚部である。(6)は須恵器の甑または鍋の胴部片であろう。牛角状把手の直下の部分である。把手は剥離して欠失している。(7)は須恵器蓋坏の蓋。(8)は器種器形不明の須恵器片である。口縁端部は平直であるが、意味不明の刻みがみとめられる。(9)は須恵器片で、平行タタキをほどこす。(10)は須恵器片で、2条一組の平行沈線のあいだに波状文が施文されている。下段の沈線の下にも波状文がみとめられる。

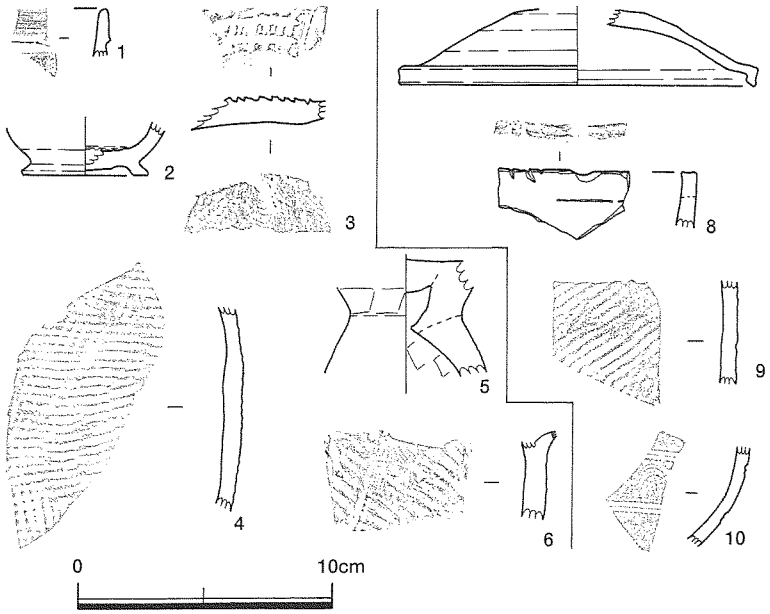


第14図　2区包含層下層①上面出土遺物

2区「整地土」

(第16図-1)は須恵器甑の基部である。底部の透孔の一部が残存している。基部外面はケズリ調整がいちじるしい。(2)は須恵器ハソウの口縁から頸部である。焼成は堅緻で器壁が薄く、稜線も鋭い。表面の色調は淡灰白色で光沢のある黒色がみられる。内面はしっかりとした受口状の屈曲をもち、外面は口縁部と頸部の境が明瞭な段をなし、稜がきわめて鋭い。淡灰白色の胎土は均一で精緻である。H111号窯式期と考えられる。(3)～(6)は須恵器甕の胴部片である。外面に平行タタキ、内面に車輪文状当て具痕がみとめられる。(7)は須恵器片で、縄タタキがほどこされている(8)は須恵器片で、平行タタキがある。(9)・(10)は須恵器の高台つき底部である。瓶類とおもわれる。(11)～(13)は土錘である。(14)は土師器高坏である。(15)は須恵器甕の頸部から肩部にかけてで、頸部以上は欠損している。平行タタキがある。緑色の自然釉がか

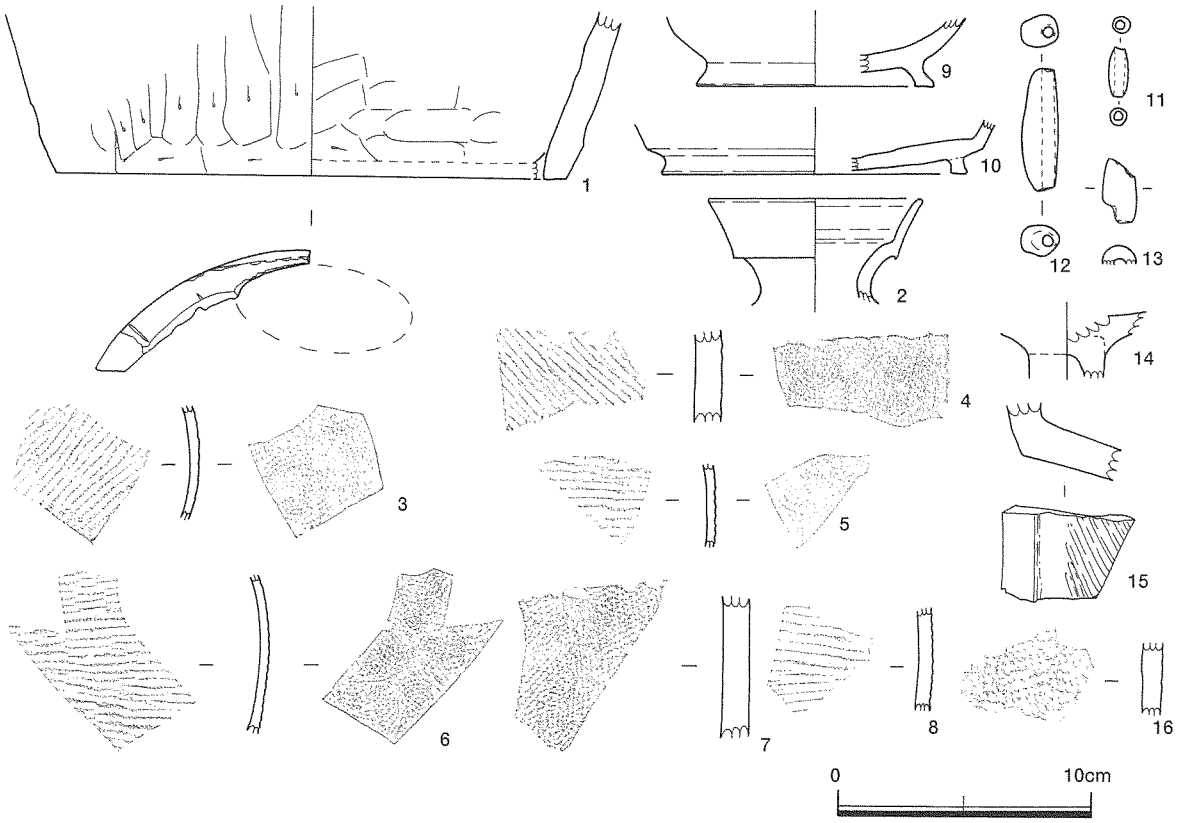
図10　須恵器坏蓋（第15図-7）



第15図　２区包含層下層①出土遺物
（１～６：南壁断面図１'層相当、７～10：同１層相当）

かっている。(16)は須恵器片である。縄タタキがみとめられる。

（第17図）は、瑳の口縁から頸部にかけてである。口縁部外面に波状文をほどこす。焼成は堅緻で器壁が薄い。表面の色調は淡灰白色で、部分的に黒色のところがある。（第16図-2）にくらべて受口状の屈曲があまく、外面の口縁部と頸部の境をなす部分の稜線も、有段部とはならず、突線で表現している。胎土は淡灰白色で比較的精緻だが、均一ではなく、東山窯に特徴的な淡灰白色と淡灰黒色のマーブル状を呈する。H11号窯式期と考えられる。



第16図　２区包含層出土遺物（１：包含層下層②、２～16：同③）

SK 3

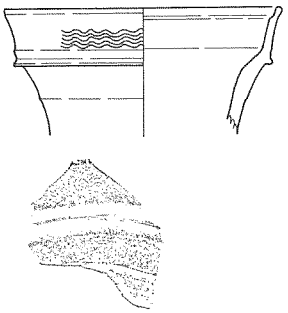
（第18図-1）は須恵器片である。平行タタキがみとめられる。甕胴部であろうか。(2)は須恵器の臼の底部である。底面に刺突状の穿孔がある。

図11　須恵器甕（第16図-2）

その他の遺物

（第19図）は、調査区壁面より出土した遺物である。(1)～(3)は南壁1層より出土した。(1)は須恵器の短頸壺である。ＮＮ288号窯式期ごろとおもわれる。(2)・(3)は土師器で、それぞれ高坏、甕とおもわれる。(4)は西壁４層から出土した。須恵器片で、平行タタキがみとめられる。胎土に白色の砂粒を多くふくむ。(5)は西壁11層から出土した。須恵器の底部である。

（第20図）は、表土除去中に出土した遺物である。(1)は土師器の口縁部片である。甕であろうか。(2)は須恵器片で、波状文と平行沈線がみとめられる。

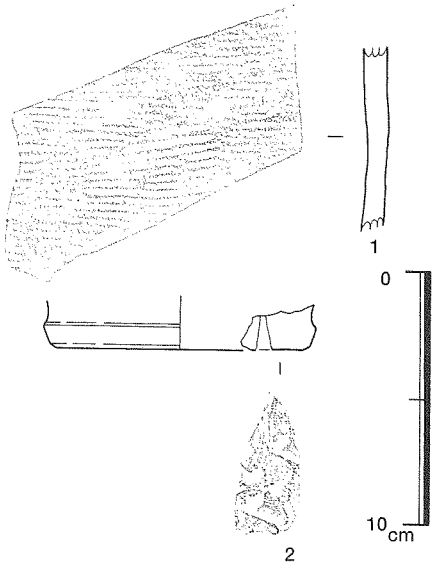


第17図　須恵器甕

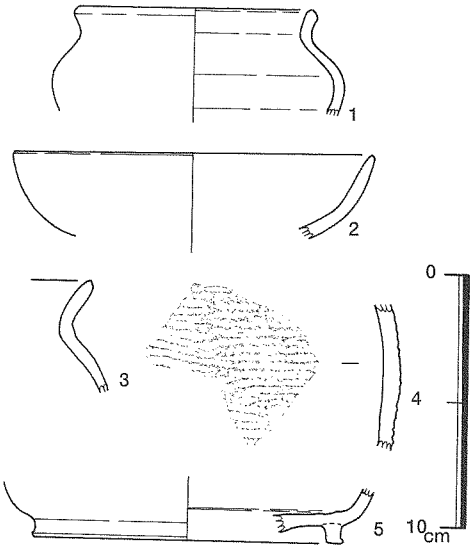
図12　須恵器甕（第17図）

(3)～(5)は須恵器片である。平行タタキがほどこされている。(6)・(7)は須恵器の高台付?である。(8)は須恵器の胴部から底部にかけてである。瓶類であろう。(9)は土師器高坏の脚部片である。

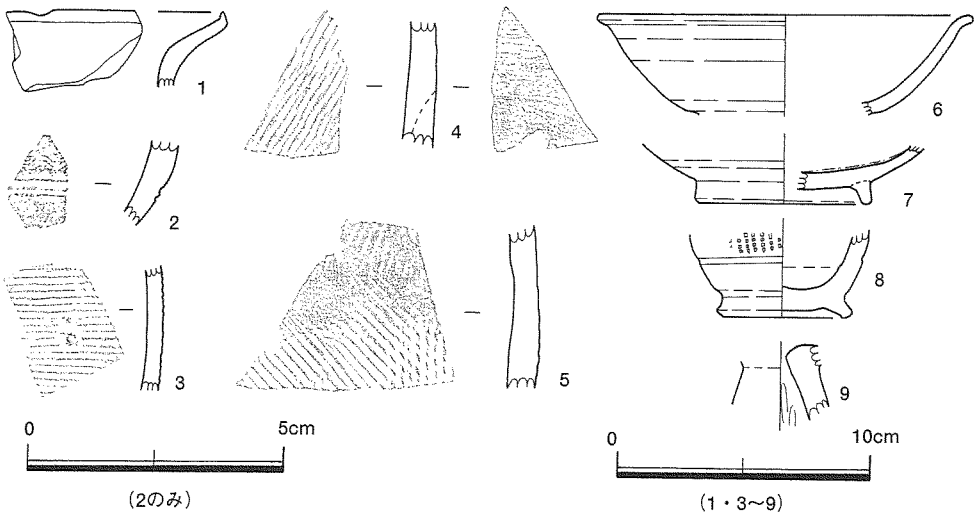
（第21図）は、排土中より採集の遺物である。(1)は土師器高坏の坏部から脚部にかけてである。(2)は須恵器坏蓋の鈕の周辺である。



第18図　SK3出土遺物



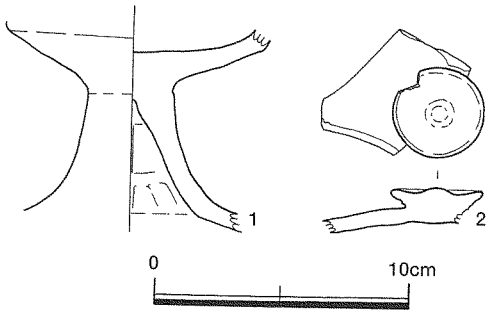
第19図　壁面出土遺物
（１～３：南壁１層、４：西壁４層、５：西壁11層）



第20図　表土除去中出土遺物

四、まとめ

このたびの14次・15次調査では、明確な遺構はほとんど検出できなかった。しかしながら、小規模な面積とはいえ、いづれの調査においても、調査区全体が地山を大きく削りこんで平坦にしていること、さらに地山面の上は一様に遺物包含層状の土が水平に堆積していることから、この遺物包含層じたいが遺構であり、作為的な整地行為にともなう整地土であったと考えられる。14次・15次調査の地点は比較的近接しており、両地点で同様の整地土が確認できることからすれば、この整地行為は周辺一帯の一定範囲にわたっているものと推定できる。整地土には古代の遺物のみをふくむ土層と、古代の遺物を中心としながらも中世の遺物をふくんでいる土層が確認できるため、整地行為は古代から中世にいたる長期にわたっておこなわれたと考えられよう。整地土の原因を考えるとき、おそらく正木町遺跡一帯が古代から中世にかけて名古屋台地の中枢的集落域であったために、大規模かつ頻繁な開発行為がおこなわれたことは想像に難くない。このたびの調査成果は、そうした意味では示唆的なものであったと考える。今後、正木町遺跡集落の範囲とその内容、性格を明らかにしていく必要があろう。



第21図　排土採集遺物

(注1)　これらの玩具については、すでに当資料館 学芸員　纐纈茂による報告がある。参照いただきたい。(纐纈茂2002「名古屋市中区正木二丁目出土の遊戯具」『名古屋市見晴台考古資料館報　みはらし』217)

謝辞　本報告書の図版作成にあたり、杉浦綾子の協力をえた。また、当遺跡の第4次調査で出土した鉄製品についての調査研究報告を収載するにあたり、東京学芸大学大学院　関博充氏には多大のご協力と、ご執筆をも賜った。両氏のご芳名を記し感謝申し上げます。

写真１　SK３（南西から）

写真２　SK３半裁断面（南東から）

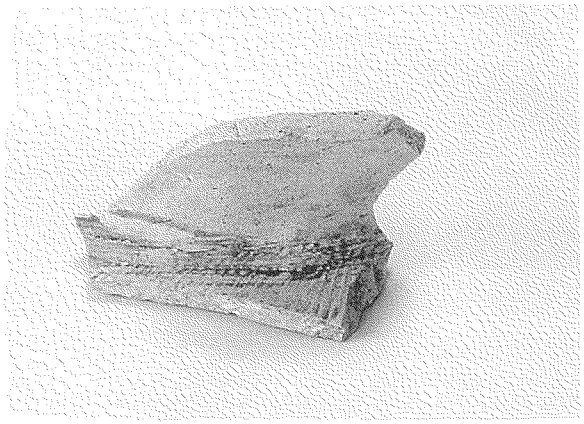


写真３　須恵器甕（第10図-２）

写真４　須恵器平瓶（第10図-８）

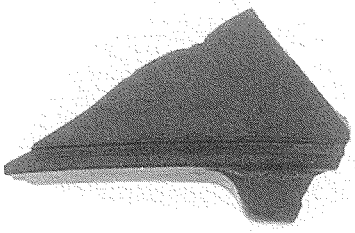


写真５　不明陶器（第10図-６）

写真６　土錘・陶錘

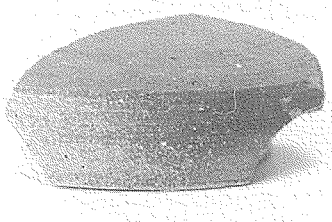


写真７　須恵器坏蓋（第10図-10）

写真８　須恵器（第10図-10）

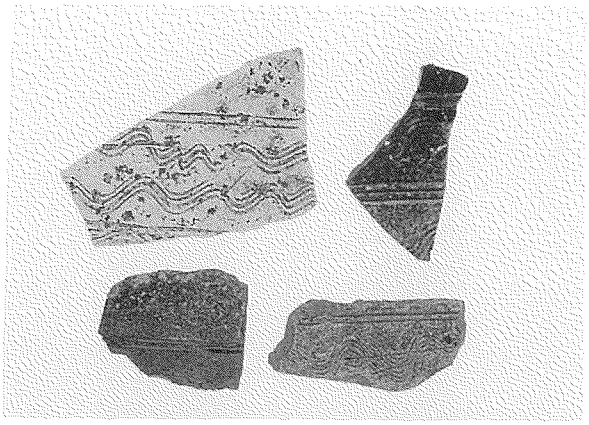


写真９　須恵器（波状文）

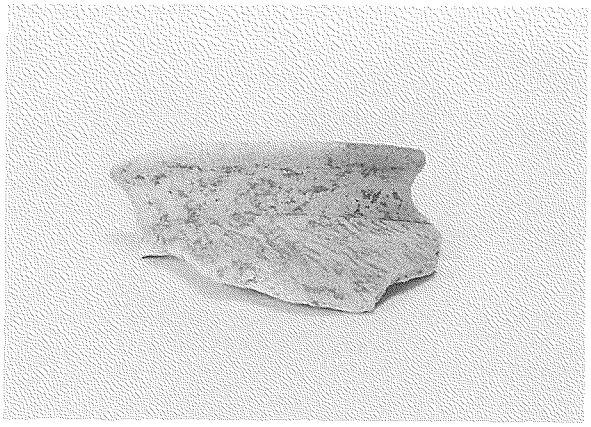


写真10　土師器甕（第11図-１）

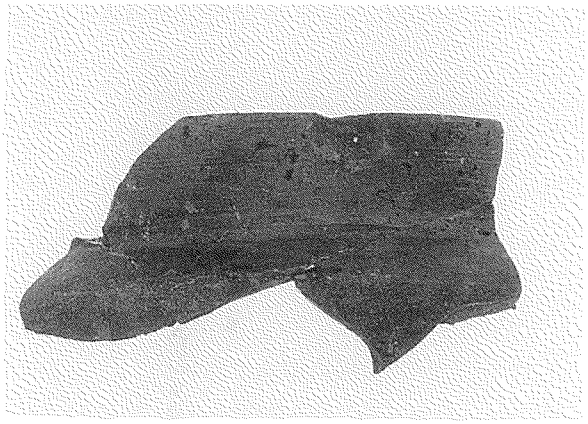


写真11　須恵器短頸壺（第12図-１）

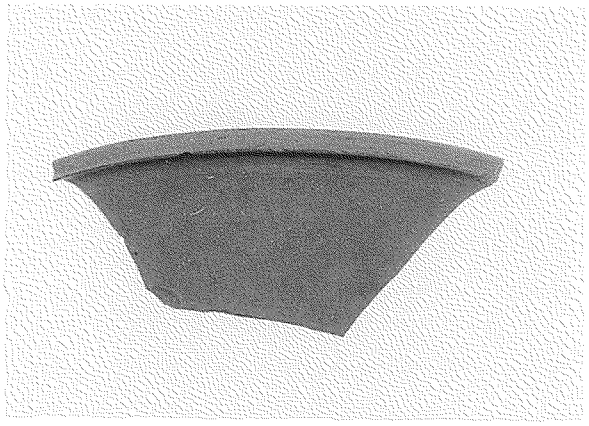


写真12　須恵器甕（第14図-１）

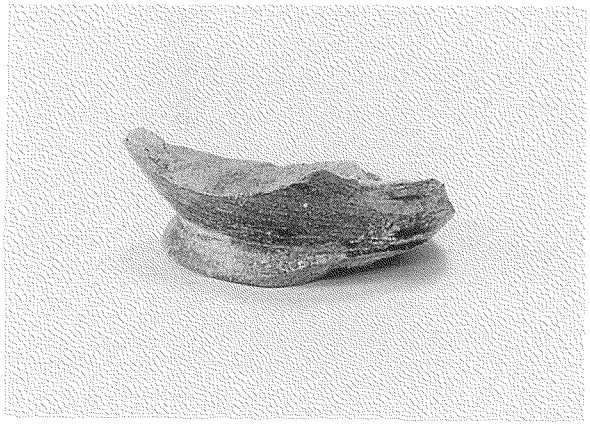


写真13　須恵器底部（第14図-３）

写真14　須恵器甑（第16図-１）

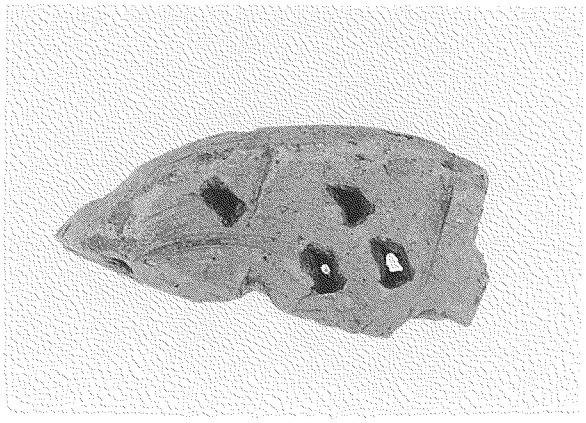


写真15　須恵器陶臼（第18図-２）

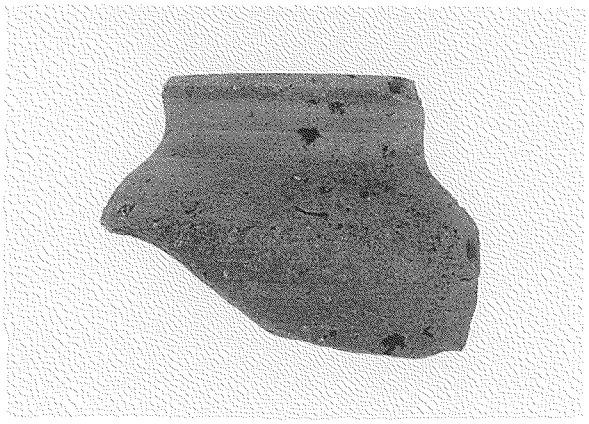


写真16　須恵器短頸壺（第19図-１）

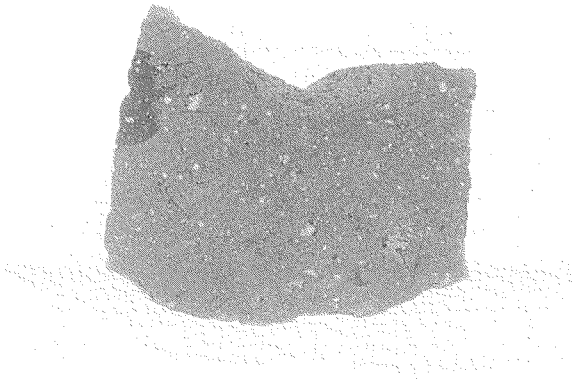


写真17　須恵器（第19図-４）

写真18　灰釉陶器（第20図-７）

写真19　須恵器（第20図-８）

写真20　土師器（第21図-１）

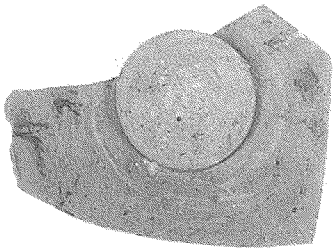


写真21　須恵器坏蓋

写真22　被熱した石

写真23　火打石

写真24　遺物集合写真

付篇、名古屋台地古墳時代の基礎資料（4）
ー正木町遺跡第４次調査出土鉄器の調査ー

藤井　康隆※・関　博充※

はじめに

正木町遺跡第4次調査時に出土した鉄器について、藤井は前稿（2000）でこれを「鉄鋌」として資料紹介した。類例の少ない遺物でもあり、製作技術や化学組成などについて詳細な情報をえて、より精確な位置づけが必要と考えた。また、その実測図作成時の復元形などに一抹の不安もあった。関は、藤井の報文に接して、かりに鉄鋌であることの当否を措いたとしても、この遺物の化学組成と合致する鉄器が遺跡内で確認されることで原料鉄として使用されていた可能性が浮上すると考え、同遺物につよい関心をもち、自然科学的調査による協力を申し出た。このような経緯が、小稿を草する契機となった。

2. 調査資料の概要

今回調査を実施した２点の鉄器の概要については、すでに前稿で紹介したが、若干の訂正もあり、本稿でもあらためてのべておきたい。２点の鉄器は、正木町遺跡第４次調査において、土坑SK25から出土した。SK25は、性格不明であるが、位置は古墳時代の竪穴住居SB04に近接しており、住居との関係がうかがえる。土坑内での層位的な上下関係は明確でないが、SK25からは松河戸Ⅱ式併行期の土師器が出土しており、２点の鉄器は、これらの土師器と共伴したようである。２点のうち、前稿で刀子として紹介した鉄器は、このたびX線撮影によって刀子ではないことが判明した。一方、「鉄鋌」については、前稿では、両端が左右対象でないなど、やや変わった形状をしていることは認識していたが、外形の凹凸は錆ぶくれによる変形と考えていた。しかしながら、このたびのX線撮影によって、前稿の段階で「錆による変形」と考えていた外形の凹凸は、本来の形状であることがわかった。「鉄鋌」について、すぐさまその名でよぶことに慎重な意見もあり、また「刀子」についても誤認であったことが明らかとなったので、暫時、以下の分析過程では、前稿で「鉄鋌」とした鉄器を「板状鉄器」、「刀子」としたものを「棒状鉄器」とよんでおくこととしたい。

付表１　資料の概要

No.	資料名	検出遺構		推定時期
		遺構名	層位	
1	板状鉄器	SK25	埋土中	松河戸Ⅱ式併行期（５世紀前半）
2	棒状鉄器	SK25	埋土中	松河戸Ⅱ式併行期（５世紀前半）

3. 調査方法

自然科学的調査用試料片は以下の方法で摘出された。肉眼観察、ならびにX線透過観察により、資料形状・残存状況を確認した。それらの結果を検討し、資料の外観形状を損なう恐れがなく、他に比べ錆化が進んでいないと判断された部分から、ダイヤモンドカッターを使って2つの微少試料片を摘出した。摘出した試料片のうち大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。なお、刀剣類にみられるように、鋼製鉄器の中には異なる組成の鋼を合わせて製作されているものがある（俵1982）。No.1板状鉄器、No.2棒状鉄器の器種は不明であるが、板状、棒状を呈しており、鉄器の半製品である可能性が考えられるために、いずれにおいても2カ所（Sa_1・Sa_2）から試料片を摘出した。試料片摘出位置は付図$1a_1$、付図$2a_1$に示すとおりである。

組織観察用試料片についてはエポキシ樹脂で包埋し、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した。得られた検鏡面を金属顕微鏡で観察し、さらに、地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された非金属介在物（鋼を製造する過程で分離・除去することができずに残った異物）については、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）によりその組成を調べた。

化学成分分析用試料片については、表面の土砂を除去した後、エチルアルコールならびにアセトンで洗浄し十分に乾かした。試料片を直接テフロン分解容器に秤量し、酸を加え、マイクロウェーブ分解法(註1)によって分解した。冷却後、ホウ酸を加え、再度マイクロウェーブにより加熱した。室温まで戻した溶液に蒸留水を加え定溶とし、得られた溶液の全鉄（T.Fe)、銅（Cu)、ニッケル（Ni)、コバルト（Co)、マンガン（Mn)、りん（P)、チタン（Ti)、けい素（Si）の８成分を誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP・OES法）で分析した。

4. 調査結果

4-1. 組織観察結果

No.2棒状鉄器Sa_1から摘出した試料片は相当に錆化が進んでおり、いたるところに亀裂、空隙がみられる（付図２c_1)。枠で囲んだ内部のミクロ組織には、細線状物質（Cm）が層状にならび、島状領域を形成した組織が観察される（付図２d_1)。これまでに行われた鉄器の金属学的調査結果（佐々木他1984;Knox 1964）に基づくと、Cmはパーライト[フェライト（αFe）とセメンタイト（Fe_3C）の共析組織]中のセメンタイトもしくはその欠落孔と推定される。同様の組織はNo.2棒状鉄器Sa_2にも見いだされたが、いずれの試料片も残存する組織がわずかなため、炭素量の推定は困難であった。

No.2棒状鉄器Sa_1には白色粒状化合物Wとその内部にみられる灰色化合物He、およびそれらを取り囲む暗灰色領域と黒色領域Sから構成される非金属介在物が観察された（付図２d_2)。EPMAによる定性分析の結果、Wはウスタイト（化学理論組成：FeO)、暗灰色領域はFe-Mn-O系、SはFe-Mn-Ca-Al-Si-O系のガラス質けい酸塩であることがわかった。Heはヘマタイト（Fe_2O_3）と推定され、ウスタイトが埋蔵環境下において酸化したものとみることができる。ほぼ同様の鉱物組成をとる非金属介在物はNo.2棒状鉄器Sa_2にも認められ、No.1板状鉄器Sa_1にはウスタイトが観察された（付図１d_1)。なお、No.1板状鉄器Sa_2は錆化の進行が著しく、元の健全な地金を推測できる組織は見いだされなかった。上述の結果は付表２の右欄にまとめられる。

4-2. 化学組成

４点の試料片のT.Feは42～66%、Siは0.8～2.6%にあり、相当に錆化が進んだ試料が分析されている（付表２)。検出されたCu、Ni、Coはいずれも0.01%以下、No.1板状鉄器Sa_1・Sa_2には0.07～0.25%、No.2棒状鉄器Sa_1・Sa_2からは２%以上のMnが、No.1板状鉄器Sa_1・Sa_2、No.2棒状鉄器Sa_2には0.1%を上回るＰが含有されていた。既述の通り、No.2棒状鉄器に見いだされた非金属介在物にはMnを含む領域が認められる。分析されたMnのほとんどは非金属介在物中に残存するMnに起因するものと推定される。No.1板状鉄器のMnについても同様に考えることができる。一方、Ｐについては埋蔵環境下からの富化の恐れがある（佐々木他1987)。同じ埋蔵環境下にあり、錆化の進行が同程度の鉄器に含まれるＰと比較する

付表2　分析結果

No.	資料名	化学組成（mass%）								ミクロ組織	n.m.i
		T.Fe	Cu	Ni	Co	Mn	P	Ti	Si		
1 Sa_1	板状鉄器	63.42	0.007	0.001	<0.001	0.077	0.18	0.010	1.20	no	W
1 Sa_2	板状鉄器	65.32	0.006	0.003	<0.001	0.245	0.11	0.007	0.950	no	no
2 Sa_1	棒状鉄器	42.09	0.004	0.003	0.001	2.59	0.42	0.050	2.52	Cm（推定不能）	W,He, S
2 Sa_2	棒状鉄器	62.79	0.004	0.002	0.001	2.67	0.05	0.007	0.880	Cm（推定不能）	W,He, S

注1　No.、資料名は表1に対応。化学組成はICP-OES法による。
注2　Cmはセメンタイト、カッコ内は推定される炭素量。noは見いだされず。
注3　n.m.iは非金属介在物組成。Wはウスタイト（化学理論組成：FeO）、
He：Fe-O系化合物[ヘマタイト（Fe_2O_3）と推定される]、S：ガラス質けい酸塩、noは見いだされず。

必要があるが、比較できる資料が未検出のため、Pについては検討対象外とする。

5. 考察

自然科学的調査をおこなった2点の鉄器は、セメンタイトおよび非金属介在物が観察され、鋼製鉄器であることが確かめられた。鉄器からは0.077～2.67%のマンガンが検出され、非金属介在物中にマンガンを含む領域が認められた。表3に他遺跡から出土した古墳時代の鋼製鉄器の分析結果を示した（赤沼1999;久野1984;佐々木1987;村田他1982）。これらの鉄器に比べ、正木町遺跡出土の鉄器には高レベルのマンガンが含有されている（表2）。検出されたマンガンのほとんどは地金中に残存するマンガンに起因すると推定される。2点の鉄器を製作するために使用された鋼の製造過程において、マンガンを含む鉄滓が生成したことは確実である。これらの事実から、ア）遺跡内でマンガンを含む鋼が製造され、それを素材として鉄器が製作された、イ）マンガンを含む鋼が遺跡外から供給され、遺跡内で鉄器に加工した、の2つを考えることができる。今後、遺跡内およびその周辺に所在する遺跡から古墳時代の鉄関連遺構が検出され、出土鉄関連遺物の考古学・自然科学的調査が実施されることによって、この地域における鉄器の製作活動とその利用の実態が、より明確なものになると思われる。

結語

以上、正木町遺跡第4次調査出土の鉄器2点について、自然科学的分析の成果を報告した。藤井は、関による分析の結果をうけ、あらためて次のような点を指摘したい。

すなわち、(1)板状鉄器については、X線撮影による形状の確認によっても、これが単体で道具として機能した鉄製利器類とは考えられないこと。(2)鉄器製作にかかわる素材である可能性があること。(3)板状鉄器、伴出の不明棒状鉄器ともにその化学組成は近似すること。(4)相対的にマンガンの含有量が高レベルであること。以上の4点が重要であろう。

棒状鉄器については器種、用途ともに不明であるが、板状鉄器については、やや歪んではいるが撥状の形態をとっていることや、(1)(2)の点から、あらためて「鉄鋌」とよんで大過あるまい。(3)(4)の点からは、その特徴ある化学組成から、名古屋台地をふくめた尾張ないし近隣地域での製作になる可能性をも視野に入れて、今後の調査研究をすすめる必要があろう。また、正木町遺跡、そして近接する伊勢山中学校遺跡などにおいて、同様の原料鉄から製作された鉄器が一定数存在する可能性を示唆している。

一般に鉄鋌の性格については、買地券や貨幣などに似た性格をもつ場合もあるといわれ、截然としない点も多い。しかしながら、日本列島出土の鉄鋌において、鉄器製作の素材として使用されたものがかなり

の割合にのぼったことはうたがいなかろう。日本列島での初現は古墳時代中期初頭で、古墳時代後期後半まで認められる。おもに畿内をはじめとする西日本の古墳を中心に出土し、出土数は1100枚以上にのぼる（東1987）。しかしながら、その大半が奈良県奈良市ウワナベ古墳陪冢の大和6号墳から出土したものによってしめられており、出土遺跡数としては多くはない。東日本では、正木町遺跡に隣接する伊勢山中学校遺跡第16号住居址（名古屋市教委1996）をはじめ、東京都板橋区氷川神社北方遺跡住居址（板橋区教委1989）、千葉県千葉市南二重堀遺跡第24号住居址（千葉県埋文センター1988）、千葉県市原市草刈1号墳木棺内（千葉県埋文センター1997）からの4例の出土が知られていた。本資料の存在は、東日本では5例目となる。数少ない事例であるだけでなく、しかもそのうち2例が名古屋台地における事実上の同一集落遺跡からの出土になるという点で、重要な問題を内包している。東日本にはほとんど流入していない鉄鋌が、古墳時代名古屋台地の中心的集落遺跡から2点出土したことは、正木町遺跡が、西日本を中心とした大陸・半島との技術導入や交易の一端に連なる拠点的な集落であったといえよう。正木町・伊勢山中学校の両遺跡に代表されるこの集落遺跡では、韓式系軟質土器や多くの初期須恵器の出土が知られている。名古屋台地は須恵器製作・焼成技術の導入が早い段階でおこなわれており、しかも長い継続性をもつ。このような技術の導入と相俟って、鉄器製作が古墳時代中期の早い段階からおこなわれていたとしても、無稽のこととはおもわれない。単純に当地域における鉄器生産の開始およびその導入経路の問題とともに、いわゆる「渡来文化」の脈絡のなかで当地域を考えることの必要性を提起している。

今回の調査成果により明らかになった化学組成は、原料鉄の産地の問題を考えるうえで重要な知見となった。この点、当地域で重要な事例としては、岐阜県大垣市の金生山で産出する赤鉄鉱が近年注目されている。大垣市周辺の古墳出土鉄器にはこの金生山の赤鉄鉱と同様の化学組成を示すものが少なからず存在することが指摘されており、金生山産の原料鉄からなる製品には一定の流通力を想定することができる。その自然科学的分析の成果によれば、金生山の赤鉄鉱は砒素と銅を高レベルに含有するという。今回の正木町遺跡の2点の資料は、その化学組成が金生山のものとは異なった特徴を有していた。今後、消費地遺跡や古墳の出土資料をふくめ、東海地方出土の古墳時代鉄製品をひろく考古学的・自然科学的に分析していくことで、鉄器のバリエーションをみいだし、東海地方における鉄器の生産と流通のありかたを明らかにしうることが期待できよう。

雑駁ではあるが、分析成果をふまえ、今回の調査の要点と、本資料について今後考古学的に課題となる点をあげてみた。やや結論を急いだ点や、思索のいたらない部分も多々あろうが、まづは自然科学的分析成果の重要性と、研究が緒についたことを報告し、本稿の結びとしたい。

（※ふじい　やすたか／名古屋市見晴台考古資料館、※せき　ひろみつ／東京学芸大学大学院）

補記　本稿の執筆にあたっては、1・2と結語を藤井が、3～5を関が担当した。最終的に板状鉄器を鉄鋌と断案したことをはじめ、自然科学的分析以外の点における本資料の評価について、不適切な点が発覚した場合、その責はすべて藤井にある。

註

(1)　水などのマイクロ波を吸収する物質（極性のある分子）に、マイクロ波を照射すると、励起によっ

て分子運動が起こり、その物質を高速で加熱することができる。その性質を利用して、試料片と酸を入れたテフロン分解容器内を、短時間で高温・高圧にし、高速分解する方法である。

引用・参考文献

東潮1987「鉄鋌の基礎的研究」『橿原考古学研究所紀要　考古学論考』12

東潮1991「鉄素材論」『古墳時代の研究５　生産と流通Ⅱ』、雄山閣

東潮1999『古代東アジアの鉄と倭』、渓水社

佐々木稔、村田朋美1984「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」季刊考古学、8、pp.27-33

佐々木稔、伊藤薫1987「川合遺跡出土の鉄斧、鉄鎌ならびに鋤先の金属学的調査」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』Ⅱ、pp.63-80

俵國一1982「日本刀の科学的研究」日立印刷

名古屋市教育委員会1996『埋蔵文化財調査報告書24　伊勢山中学校遺跡（第５次）』

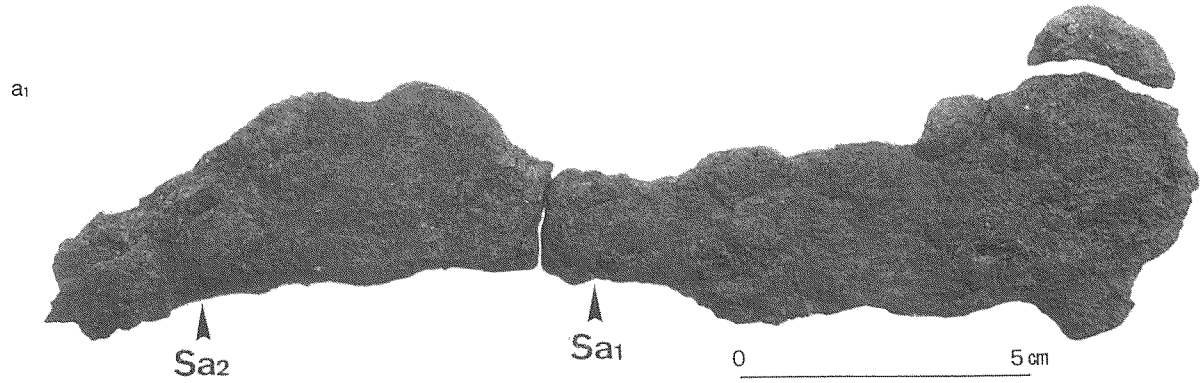
名古屋市教育委員会1991『正木町遺跡第４次発掘調査概要報告書』

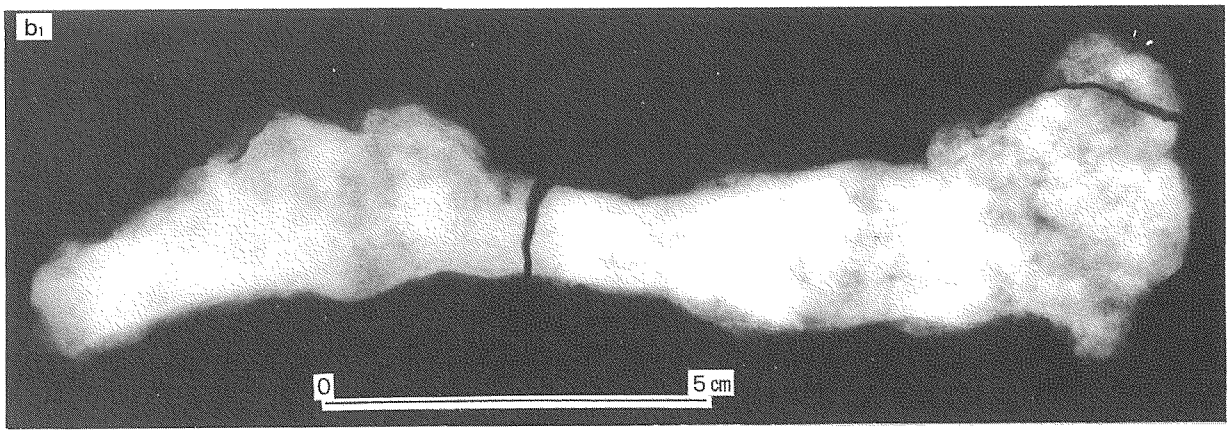
名古屋市見晴台考古資料館1997『特別展　発掘された名古屋の五世紀』

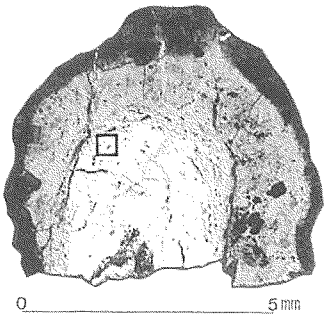
八賀晋1999「古代の鉄生産について－美濃・金生山の鉄をめぐって－」『学叢』21－林屋辰三郎先生追悼号－、京都国立博物館

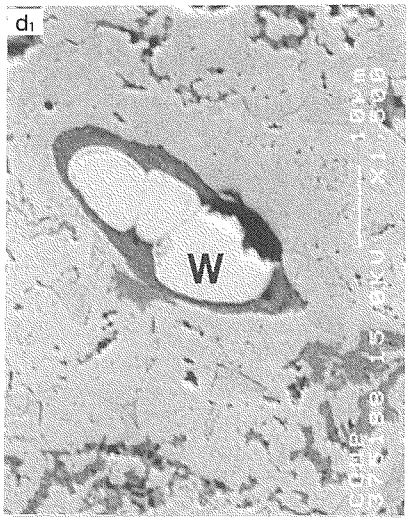
藤井康隆2001「名古屋台地古墳時代の基礎資料－正木町遺跡第4次調査出土の鉄鋌－」『伊勢山中学校遺跡－第8次発掘調査報告－』（『埋蔵文化財調査報告書』38、名古屋市教育委員会、2001に収載）

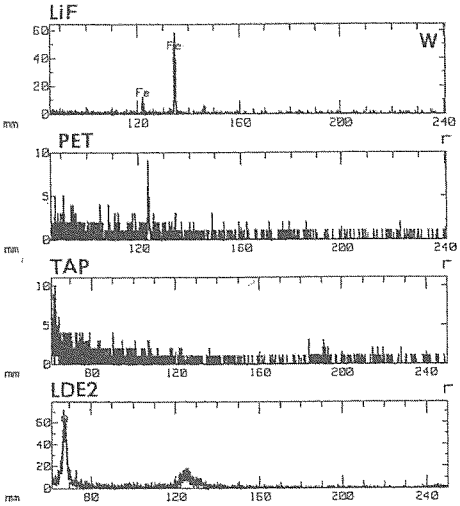
Knox.R. 1963 “Detection of carbide structure in the Oxide remains of ancient steel”, Archaeometry,Vol.6. pp.43-45





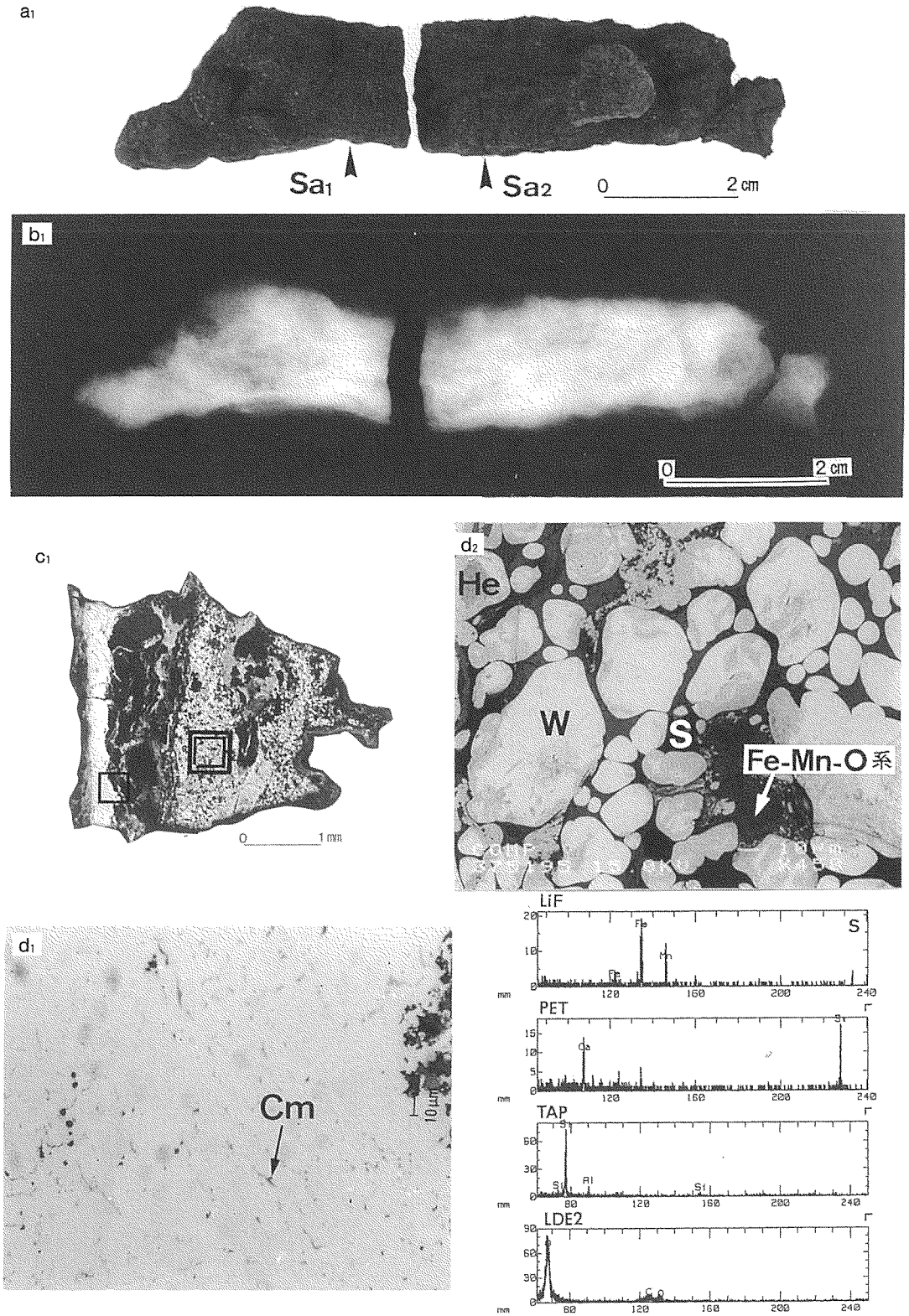






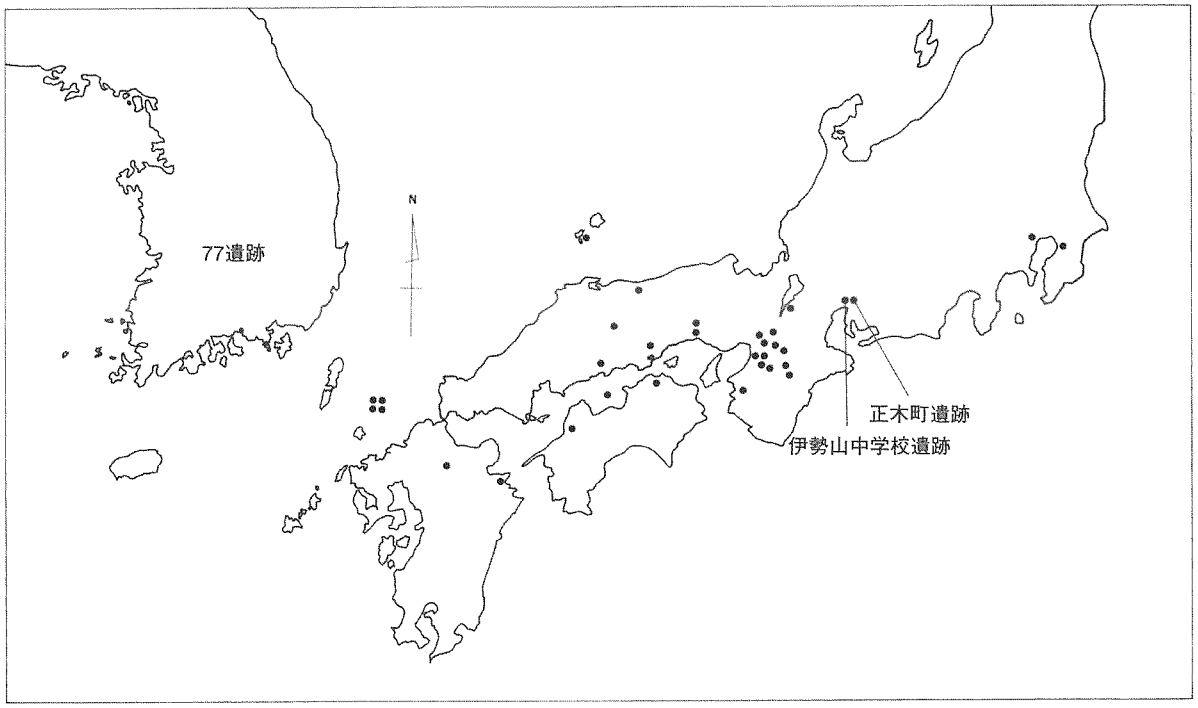
a1: 外観。付した矢印は試料片摘出位置。　b1: X線透過写真。
c1: Sa1から摘出した試料片のマクロ組織。
d1: c1の枠で囲んだ内部のEPMAによる組成像（COMP）と定性分析結果。
W：ウスタイト（化学理論組性：FeO）

付図１　板状鉄器の外観とＸ線透過写真、および組織観察結果



a1: 外観。付した矢印は試料片摘出位置。　b1: X線透過写真。　c1: Sa1から摘出した試料片のマクロ組織。
d1: c1の枠で囲んだ内部のミクロ組織。
d2: c1の二重枠で囲んだ内部のEPMAによる組成像（COMP）と定性分析結果。
Cm：セメンタイトもしくはその欠落孔　W：ウスタイト（化学理論組性：FeO）
He：Fe-O系化合物［ヘマタイト(Fe_2O_3)と推定される。］　S：ガラス質けい酸塩

付図２　棒状鉄器の外観とＸ線透過写真、および組織観察結果



付図３　鉄鋌出土遺跡の分布

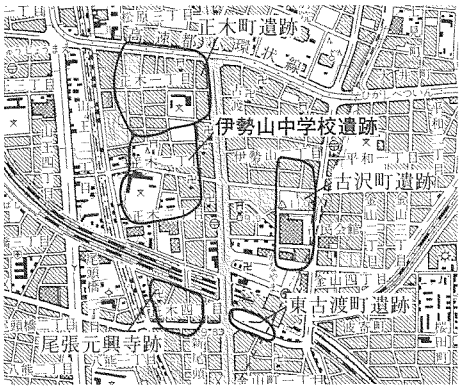
伊勢山中学校遺跡第９次発掘調査報告

一、 遺跡の概要

位置と環境

伊勢山中学校遺跡（第１図）は、金山駅の北西約600m、中区正木二丁目から三丁目にかけて所在する。地理的には、名古屋台地が半島状に突出した、いわゆる熱田台地（標高７～９m）の西縁部に立地する。当遺跡が立地する熱田台地西縁の段丘崖からは眼下に堀川をみおろし、堀川の西には低地がひろがっている。古代以前には、ここまで海がはいってきていたと推定されている。

当遺跡の北側には正木町遺跡が隣接し、南側ではおおきく距離をおかずに尾張元興寺跡が所在する。これらの遺跡は、現在は異なる遺跡名がついているものの、古墳時代の集落遺跡としては伊勢山中学校遺跡と一体の集落をなすと考えられる。正木町遺跡では、古墳時代中期～古代の住居址多数や、古墳時代中期の竈をもつ住居址、古代の大型掘立柱建物群を検出し、古墳時代中期から古代にいたるまでの須恵器や土師器が多量に出土している。とくに、初期須恵器や韓式系軟質土器、鉄鋌、古代の羊形硯など、特殊な遺物を出土している点が注目される。また、金山駅前に所在する東古渡町遺跡では、古墳時代の方形周溝墓群を検出している。円筒埴輪や家形埴輪、須恵器が出土しており、当遺跡と重複期間をもつ墓群である。尾張元興寺跡では７世紀半ばごろに尾張元興寺が創建されている。熱田台地先端ちかくに立地する断夫山古墳も、当遺跡と重複する時期をもつ。また、中世になると、おおくの城館がこの地域に築かれ、当遺跡や正木町遺跡でも、城館の濠とおもわれる大溝を検出している。



第１図　伊勢山中学校遺跡の位置

このように、当遺跡の歴史的環境は、古墳時代から古代にいたるまでの重要な遺跡が集中しており、遺跡群として有機的に把握し、歴史復元をおこなう必要がある。なかでも、伊勢山中学校遺跡は、古墳時代中期～後期においては、この遺跡群の中心地であったと考えられ、当該期における名古屋台地の中枢的集落として、その重要性が注目されている。

既往の調査

伊勢山中学校遺跡では、これまでに8次にわたる調査を経ている（本書正木町遺跡報文第2図を参照）。検出した遺構や遺物から、５世紀～６世紀前半ごろにかけての、古墳時代の集落遺跡を主要な内容とする。第１次調査から第７次調査にいたるまで、第４次調査をのぞいては、古墳時代の竪穴住居を検出しており、大規模な集落域であったことがうかがえる。遺物としては、初期須恵器をふくむ古式須恵器やその併行期の土師器が、一定数まとまって出土する。また、住居址より、袋状鉄斧（第３次調査、名古屋市教委1987）、鉄鋌（第５次調査、名古屋市教委1996）が出土していることは、とくに注意すべきである。第7次調査（名

古屋市教委1998）では、小土坑より、完形の須恵器蓋坏が出土している。蓋を開けたなかには、臼玉や小石がつめられていたほか、科学分析によって、塩がはいっていた可能性も指摘されている。また、第８次調査（名古屋市教委2001）では、H111号窯式期をさかのぼると考えられる初期須恵器や、韓式系軟質土器、これらと同時期の土師器、滑石製臼玉などが共伴して出土している。こうした調査によって、伊勢山中学校遺跡は、北接する正木町遺跡、南接する尾張元興寺跡とともに、古墳時代中期から古代にかけての大規模集落であることが判明し、名古屋台地部の当該期における中枢的集落として、その重要性がひろく周知されるようになった。地理的条件をも考慮して、原史古代における海を越えての交流・交易の拠点としても検討していく必要があろう。

図１　発掘風景

二、第９次調査

第９次調査地点と調査の経過

あらためて調査地点の地理的条件をみておこう。伊勢山中学校北側を東西にとおる道路がある。この道路は本来、堀川の流れる低地から台地へきれこんできた入江状の谷筋であったようである。この谷の北側は緩やかな斜面を、南側は比較的きりたった崖状の急斜面をなしていたようすをうかがうことができる。調査地点は、この谷筋のすぐ南側で、台地西縁の崖際にあたる。

今次の調査は、伊勢山中学校の擁壁改築工事にともなうものであり、約80㎡を対象とした。ただし、擁壁に近い部分については崩落の危険があるため、掘削しなかった。この未掘箇所については、本調査終了後、中学校の擁壁工事の際に立ち会った（図３）。このとき、黒色粘質砂土を埋土とする溝状遺構を検出し、遺物を回収した。

図2　調査区完掘状況

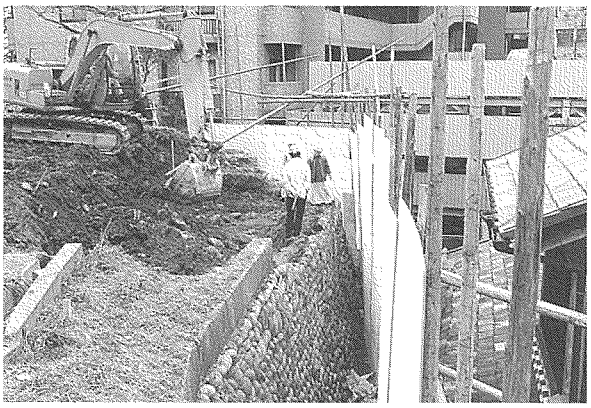


図3　擁壁工事立会風景

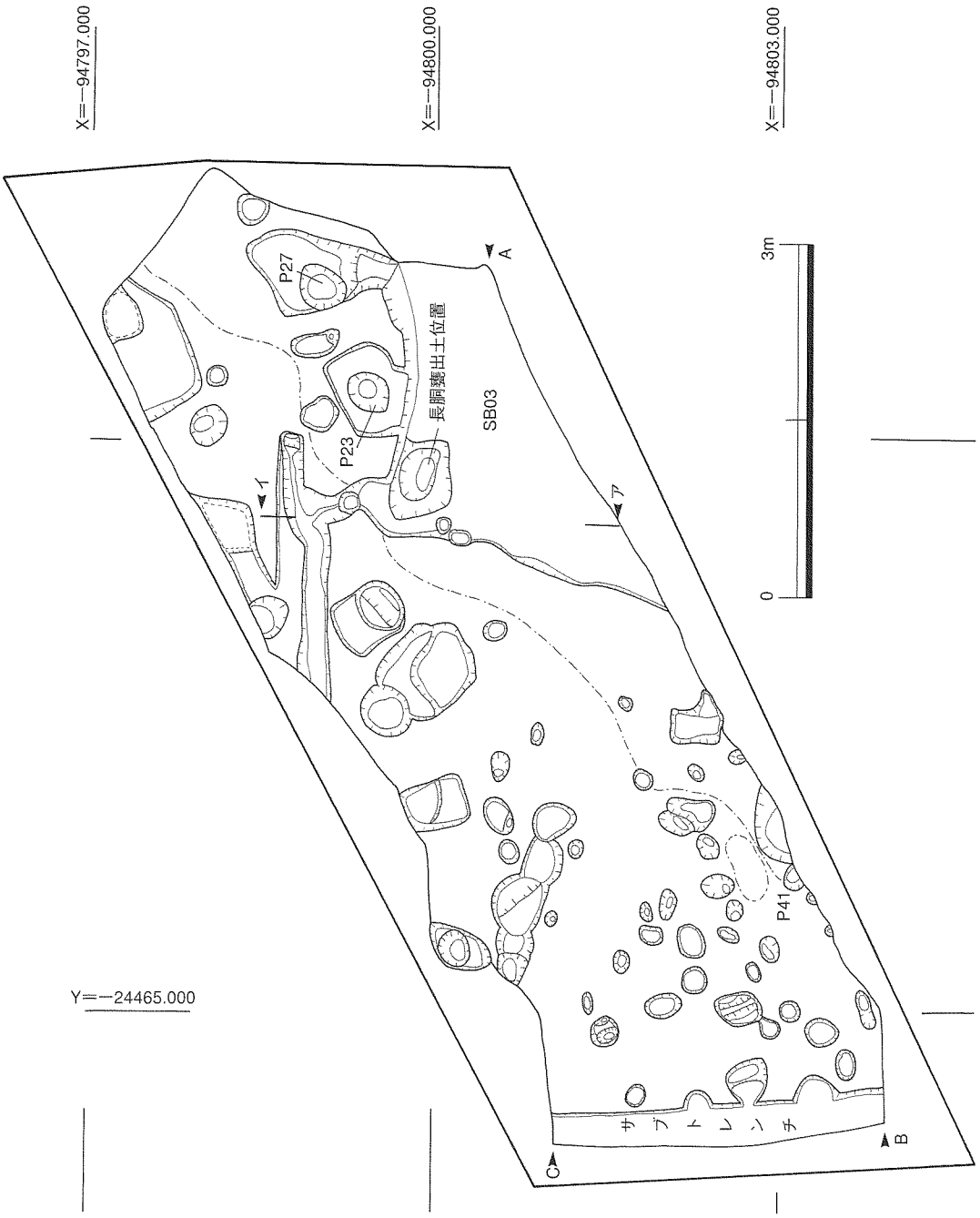
調査日誌抄

平成13年

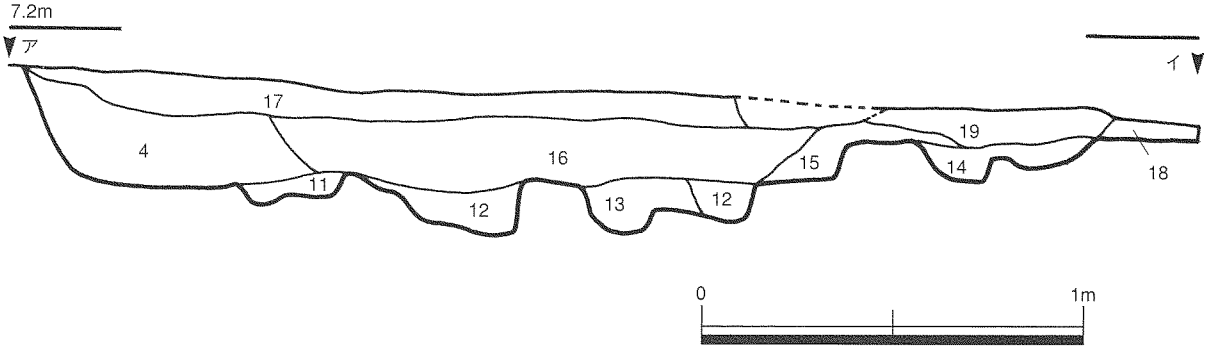
１月９日　調査準備

１月10日　表土除去開始　多量のコンクリート、レンガをふくんでいる。太平洋戦争中までここにあった東洋紡の建物解体材かとおもわれた。

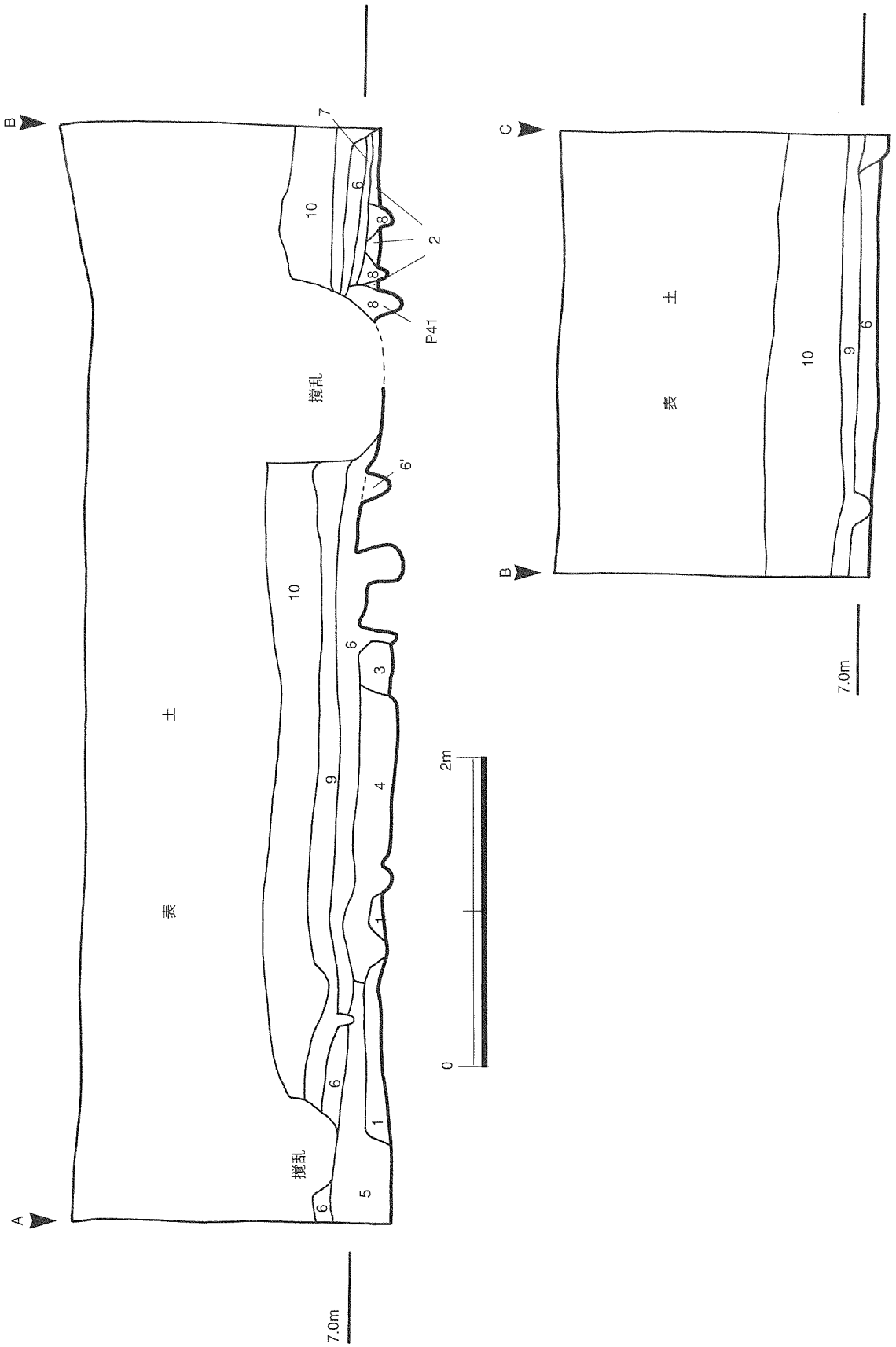
11日　表土除去、近世表土層かとおもわれる土層を検出。午後から包含層掘削。



第2図　第9次調査区平面図



第3図　SB03調査アゼ東壁面断面図



第４図　第９次調査区土層断面図

土　層　注　記

1　橙褐色土　地山土の細かい橙色シルトブロックを密にふくむ
2　暗褐色シルト混じり橙褐色シルト（地山土上面）
3　橙褐色土　褐色土に地山の橙色シルトを多くふくむ
4　灰褐色土　地山の灰黄色砂ブロックを多くふくむ
5　灰褐色土　地山の灰黄色砂ブロックと地山の橙色シルトブロックを少量ふくむ
6　黒褐色粘質砂土　暗褐色粘質土と灰褐色粘質土が混じる
7　黒褐色土　地山土の細かい橙色シルトの大きいブロックをふくむ
8　黒褐色土　地山の灰黄色砂ブロックをふくむ
9　灰褐色砂質土　旧表土層　近世の耕作面か
10　焼土・炭化物層　戦災ガラ
11　茶褐色粘質土　地山の灰黄色砂ブロックを少量ふくむ
12　黒褐色粘質土　地山の赤褐色砂ブロックをふくむ
13　黒褐色粘質土　地山の灰黄色砂ブロックをふくむ
14　黒褐色粘質土　地山の暗橙色シルトをふくむ
15　暗褐色粘質土　やや砂混じり
16　黒褐色粘質土　地山の灰黄色砂ブロックを多くふくむ
17　暗灰褐色粘質土　地山の灰黄色砂ブロックを少量ふくむ
18　灰黒色粘質土　地山の暗橙色シルトをふくむ
19　淡赤灰褐色粘質土　やや砂混じり

12日　強風・酷寒。包含層掘削。住居址らしきプランを検出、1号住居とする。調査区西辺でも、遺構プランを検出、2号住居とした。

15日　晴、大寒波・夕方に雪。1号住居を調査アゼを設定して掘削した。1号住居は結局プラン・埋土不明で、遺構として確認できなかった。掘削中に地山面で別の遺構プランを検出、3号住居とした。3号住居から土師器の長胴甕が完形で出土した。長胴甕の写真を撮影した。2号住居も、掘削した結果、遺構にはならなかった。

16日　遺構検出。地山面で検出したピットを掘削。長胴甕の出土状況平面図作成、写真撮影。

17日　遺構掘削。長胴甕の清掃、レベリング、取りあげ。昼休みに中学校の生徒約10人が見学。

18日～19日　調査アゼの断面図作成、写真撮影。同アゼ崩し。ピットを掘削。18日は、施設課および住宅建設局が工事下見のため来跡。校長先生が見学に来た。

22日　前週末に大雪が降ったため、調査区周囲に雪が残っていた。調査区全景の写真撮影。

23日～24日　調査区平面図作成。

25日　曇のち雨。焼土の断ち割り。雨が降ってきたため、作業を終えた。遺物を一部洗浄。

26日　雨のち曇。雨のため休工。発掘器材片づけ、図面整理。

29日～30日　晴。埋め戻し。

31日～2月6日　図面整理、発掘器材や事務所プレハブおよび備品の撤去。撤収準備。撤収後、調査終了。

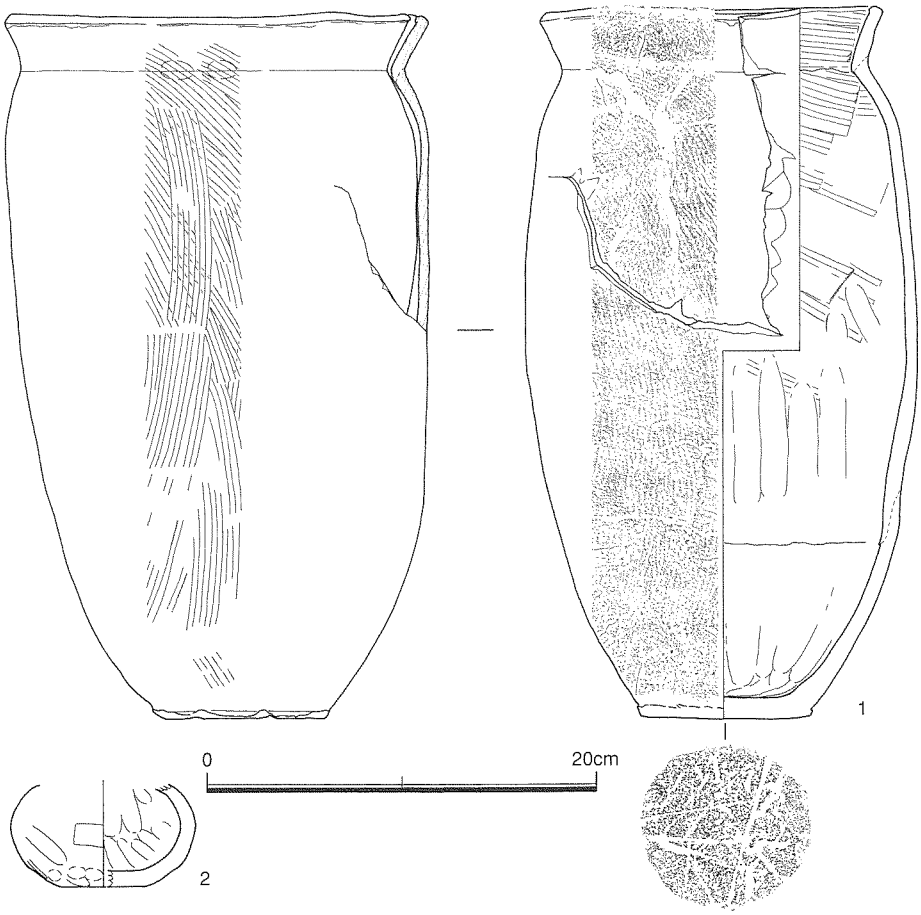
基本層序（第4図）

当初、過去の調査歴などから、近現代の造成により、地山面に掘りこまれた遺構は残存しても、その上の遺物包含層の残存状況はあまりよくないと予想された。しかしながら、実際には、表土除去後、包含層の状況を確認したところ、部分的に撹乱をうけてはいるものの、約1mほどの遺物包含層が残存していた。そのため、地山面の遺構については、これらにパックされたかたちで、遺存状況はかなり良好であった。包含層の最上層は近世の耕作土と考えられ、それより下は中世および古代の遺物包含層をなしていた。最下

層には地山（熱田層）面があり、上位層の赤橙褐色粘質土と下位層の黄白色砂の二層が確認できた。調査対象となった遺構は、この熱田層の面で検出した。

調査区平面図（第２図）中に一点鎖線で示したのは、土質の異なる地山の境である。名古屋台地の地山である熱田層は、一般に、赤褐色ないし黄褐色を基調とするシルト質の土が最上層にみられ、それより下層に黄白色の砂層、白色粘土層が互層となっている。今次調査区では、一点鎖線の南側に黄白色砂層が露出し、北

図4　長胴甕出土状況



第５図　SB03出土長胴甕・小型壺

側には赤褐色シルト質土がみられた。遺物包含層の堆積状況と、また谷へ向かって下降していく地形状況を考慮すれば、この地山の検出状況は、古代以前の段階で斜面の高い側を削平した結果ではないかと推定される。

図５　SB03

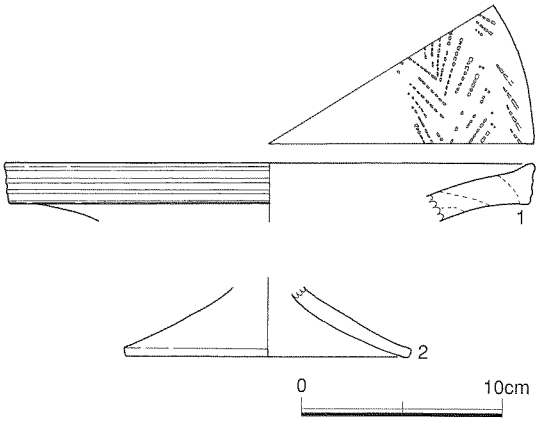
遺構と遺物

第９次調査では、調査面積が小規模なせいもあり、遺構として明確なものは少なかったが、地山面での遺存状況は良好で、明確なものとしては住居址SB03を検出したほか、調査区全体において、多数のピットを確認した。包含層下位上面での遺構検出は困難で、当初はほかにも住居址らしきプランを見いだし、SB01、SB02と名づけた。しかしながら、掘削がすすむにつれ、SB01はプランが明確にならぬまま不明となり、SB02は結果的に誤認と考えざるをえなかった。そのため、いづれも明確な遺構として把握できず、遺構番号を欠番とした。SB03は、掘り方が地山面に達するものであったために確認することができた。ここでは、古代の長胴甕が完形で出土した。

図6　SD01検出状況

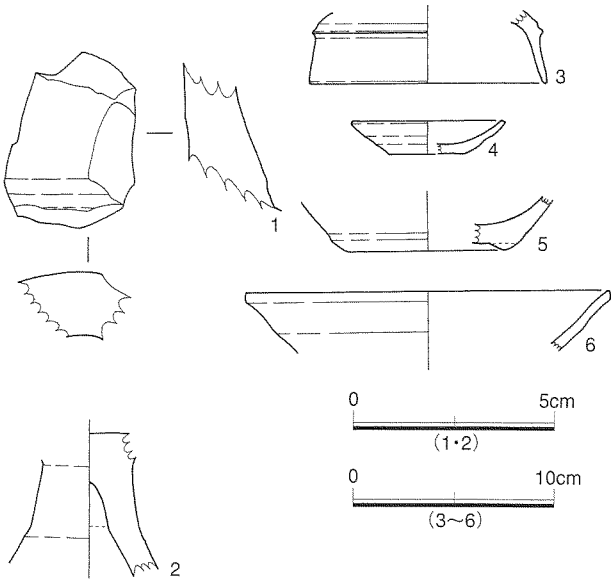
ＳＢ03（図5）

遺構　調査区の南壁にかかるかたちで検出したため全容は不明であるが、残存するのは西の一辺約2.6m、北の一辺約2.4m程度である。この住居の角にあたる場所で、完形の土師器長胴甕が横倒しになった状態で出土した(図４)。すぐそばからは土師器の小型壺も出土している。これらは土坑状のくぼみにはまった状態で、周囲を固めるように地山の灰黄色砂塊が存在したが、意図的に置かれたものかどうかはわからない。



第6図　SD01出土遺物

遺物　(第5図-1) は、土師器の長胴甕である。口縁部が直立ぎみに外へひらき、口縁端部は内面に肥厚する。色調は橙色で、器壁はかなり薄い。外面調整は胴部がタテハケで、口縁部と底部最下位のみナデである。内面調整は上半をナナメハケ調整、下半をタテナデとし、とくに口縁内面は密にヨコハケをほどこす。底部底面には木葉状、枝状の圧痕がある。形態がいちじるしく歪んでおり、胴部が部分的に膨張して割れている。この歪みや膨張による破損は、破断面じたいは合うにもかかわらず一周せずに食い違うのだが、これは接合作業に由来する問題ではなく、出土当初からの状態である。とくにつよく被熱した形跡もなく、膨張の原因が不明である。(2) は土師器の小型壺であ



第7図　「SB01」出土遺物

る。色調は赤褐色で、外面、内面ともに調整はナデおよび指オサエである。

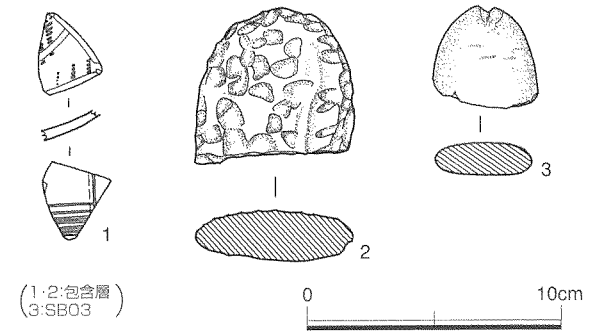
SD01（図6）

遺構　第９次調査の本調査時に検出した遺構ではなく、本調査終了後に施工された擁壁工事の際の立会いで検出した。検出範囲では、東から西へのび、緩い角をもって北へ曲がっていく状況がみとめられた。最大幅1.5m、最大深0.4m程度のものである。上面付近では須恵器の小片もみうけられたが、確実にこの溝にともなった遺物は（第６図）に示したようなものである。弥生時代の方形周溝墓の溝であった可能性がある。

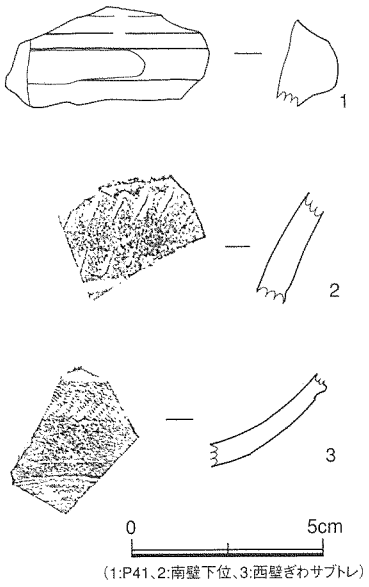
遺物　（第６図-1)、(2)ともに弥生土器である。(1)は、いわゆる「パレーススタイル」の壺形土器の口縁である。口縁端面に３条の沈線をほどこし、内面上端付近には綾杉状文を施文している。(2)は高坏の脚部とおもわれる。いづれも、弥生時代後期のものと考えられる。

その他の遺構・遺物

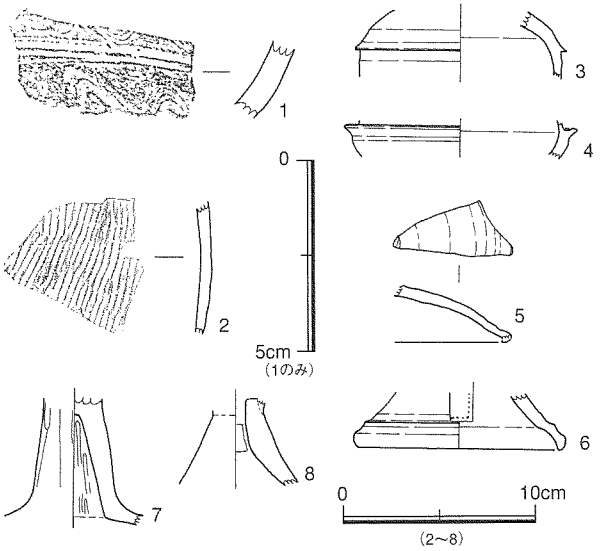
当初ＳＢ01と名づけたものは、結果的にプラン不明であったが、埋土と考えていたところから出土した遺物が(第７図)である。(1)は須恵器片である。水瓶の注口と考えられる。(2)は須恵器高坏の脚部である。(3)は須恵器坏蓋である。天井部があまり深くなく、口縁は長くやや開きぎみである。H11号窯式期のものであろう。(4)は山茶碗の小皿である。(5)・(6)も山茶碗である。



第8図　陶磁器・石製品



第9図　その他の遺物（1）

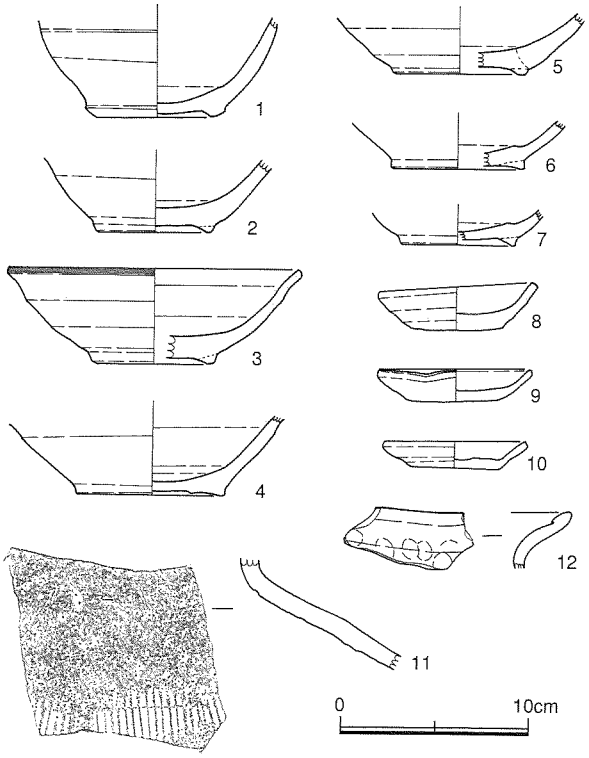


第10図　その他の遺物（2）

Ｐ41は、調査区南壁ぎわで確認した小ピットである。(第９図-1)は、このＰ41から出土した遺物で、移動式竈の突帯である。(2)・(3)は調査区壁面から出土した須恵器片である。いづれも波状文がほどこされている。(3)は坏身とおもわれ、外面が光沢のある黒色で、下方に回転ケズリの痕跡がある。(第8図)・(第10図)・(第11図)は、包含層より出土した遺物である。(第8図-1)は同安窯系の中国製青磁片である。(2)は打製石斧である。全面に密な敲打痕がみとめられる。(3)は石錘である。砂岩質の石材である。先端に切り込み状のくぼみがある。（第10図 - 1）は須恵器片で、平行沈線と波

状文がほどこされている。(2)は須恵器片である。焼成に特徴があり、外面の色調が銀色がかった光沢をもつ暗赤褐色を呈する。甕の胴部片とおもわれ、平行タタキがほどこされている。(3)は須恵器坏蓋で、H11～10号窯式期のものとおもわれる。(4)は須恵器坏身である。(5)は須恵器坏蓋である。(6)は須恵器高坏の脚部である。方形透孔の一部が残存している。外面は光沢のある黒色を呈する。H11号窯式期のものである。(7)・(8)は土師器高坏の脚部である。(7)は松河戸Ⅰ式期のものであろう。(第11図)は、包含層より出土した中世の遺物である。(1)～(10)のような山茶碗の碗、小皿のほか、(11)は伊勢型鍋の口縁、(12)は常滑焼の肩部である。頸部から上は欠損している。

このほか、図示しなかったが、比較的大型のピットであるP23から、炭混じりの鉄滓らしき遺物と、土師器や須恵器の小片が出土した。



第11図　その他の遺物 (3)

三、まとめ

このたびの第９次調査は、小規模な面積であったうえ、遺構の種類までが明確なものはわづかに住居址一軒のみであった。しかしながら、台地崖際の今次調査地点で弥生時代の遺物をふくむ溝状遺構や、古代の竪穴住居址が確認されたことから、台地直下の低地が入江状にはいりこむ崖際にまで、弥生時代から中世にいたるまでの有力な集落・墓域が展開していたことが明らかとなった。地山の検出状況もまた、積極的に評価するならば、当遺跡の集落範囲を考えるうえで重要な知見といえる。すなわち、斜面の高い側が熱田層の砂層レベルまで削平されていると考えるなら、地形を削りこむことで平坦面を台地崖ちかくまで拡張しているといえ、古代以前の集落は周辺一帯におおきく展開しているものと推定できる。遺物包含層に中世の遺物を数多くふくみ、小片とはいえ中国からの舶載陶磁をも出土したことも、中世においても同様に集落域であったことを示していよう。とくに、今次調査地点と同様に崖際に位置し、距離的にも比較的近接する正木町遺跡第5次調査地点では、古代のものとおもわれる大型掘立柱建物群を検出している。今次調査で検出した古代の住居址は、それと一連の脈絡で存在する可能性があり、今次調査地点が入江状の谷地形に面していることは示唆的である。

SB03出土の長胴甕については、検討を要する点が多い。本資料は、尾張地域をはじめ近隣の地域に類似の資料がみうけられない。しいて類例をもとめるならば、信濃や甲斐の長胴甕に近い形態を有しているようにもおもわれるが、現時点では不明とせざるをえない。名古屋台地の古代の土師器についてはいまだ実態を把握するにいたっておらず、位置づけは困難である。搬入品であるのか、名古屋台地独自の型式であるのかなど、今後あきらかにしていく必要があろう。名古屋台地の古代土師器を検討していくうえで、重要な資料となったと考える。

写真１　調査区全景

写真２　土師器長胴甕

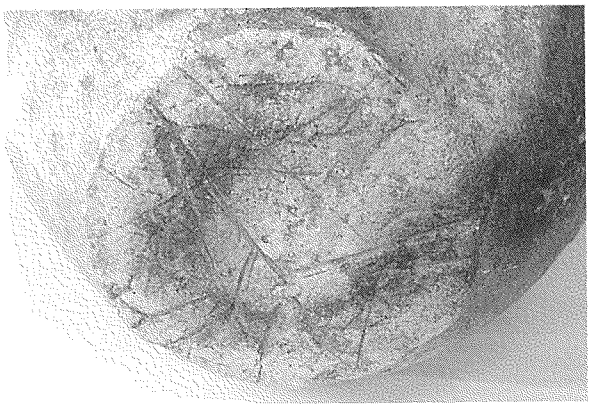


写真３　長胴甕底部

写真４　弥生土器（第６図-１）

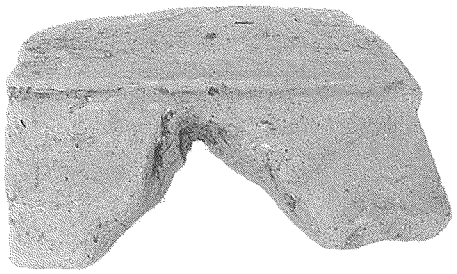


写真５　須恵器坏蓋（第７図-３）

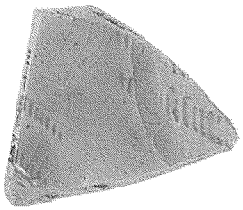


写真６　中国製青磁（第８図-１）

写真７　打製石斧（第８図-２）

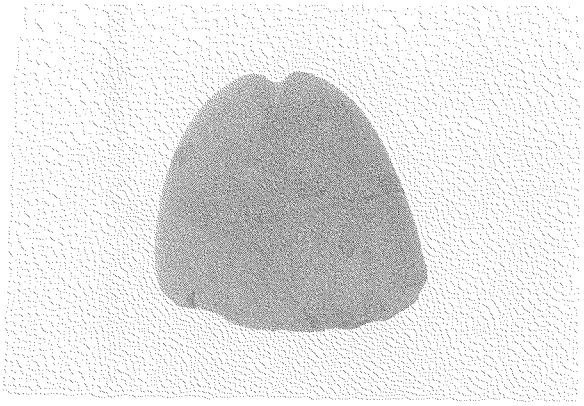


写真８　石錘（第８図-３）

写真９　移動式竈（第９図-１）

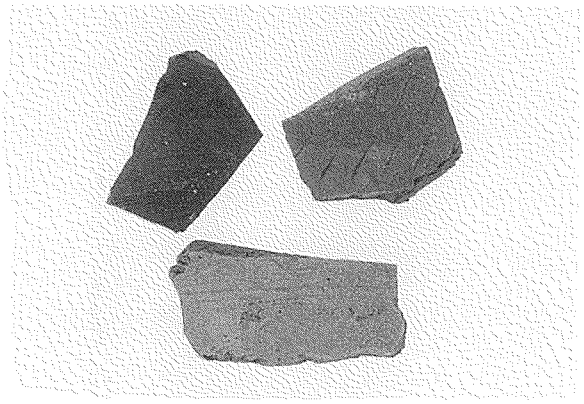


写真10　須恵器（波状文）（第９図）

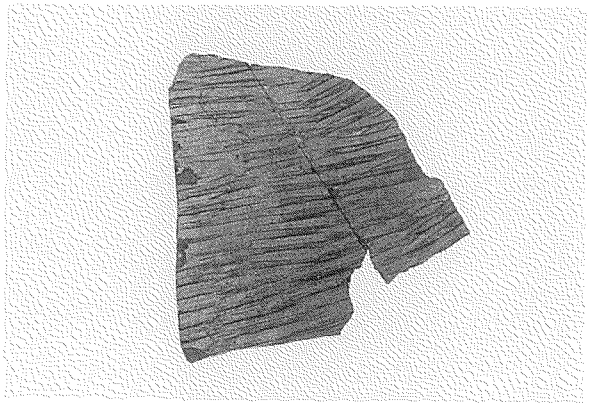


写真11　須恵器（第10図-２）

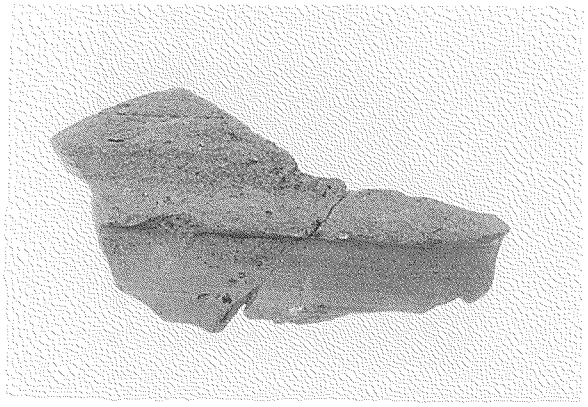


写真12　須恵器坏蓋（第10図-３）

写真13　須恵器高坏脚部（第10図-６）

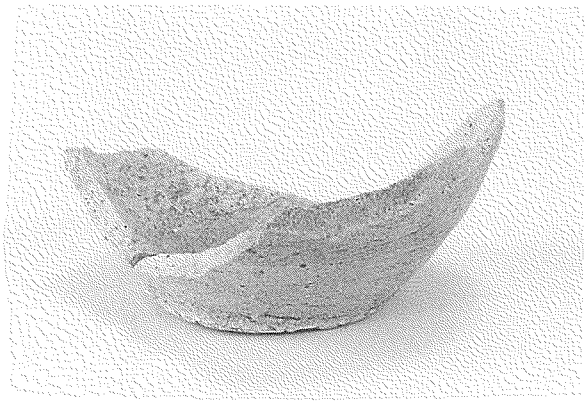


写真14　山茶碗（第11図-１）

写真15　山茶碗（第11図-２）

写真16　山茶碗（第11図-３）

写真17　山茶碗（第11図-４）

写真18　山茶碗　小皿（第11図-8）

写真19　山茶碗　小皿（第11図-９）

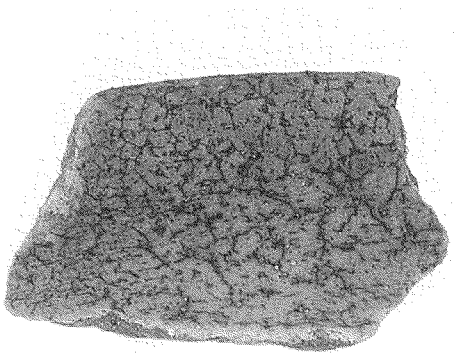


写真20　伊勢型鍋（第11図-12）

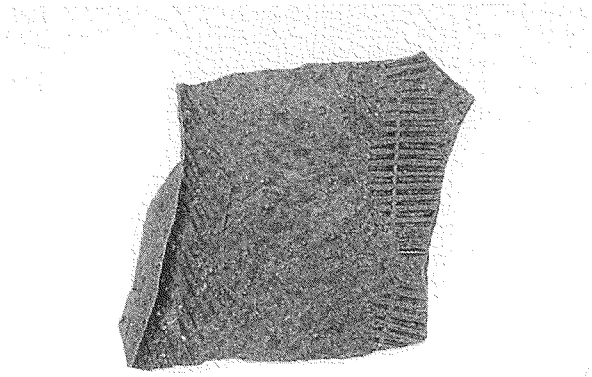


写真21　中世常滑甕（第11図-13）

竪三蔵通遺跡第16次発掘調査報告

後半区全景（北西から）

もくじ

1　はじめに……51
2　調査の経過……52
3　遺構と遺物……54
4　まとめ……70

付　言

・写真６は、名古屋市鶴舞中央図書館所蔵の「名古屋城下之図」の一部である。
（写真提供：名古屋市博物館）

・調査の実施および報告の作成にあたっては、次の方々よりご教示・ご協力をいただいた。お名前を記して、謝意を表する。（五十音順、敬称略）

浅野弘子・岡本敦子・梶山　勝・川合　剛・城戸武男建築事務所・斉藤英彦
鳥居和之・名古屋市鶴舞中央図書館・名古屋市博物館・野場喜子・松村冬樹
山本祐子

名古屋城
本丸
二の丸
三の丸
中区
中村区
名駅
名古屋駅
名古屋市役所
愛知県庁
名古屋市博物館
名古屋市政資料館
名古屋市体育館
名古屋市立図書館
名古屋市立中央図書館
名古屋市立中央図書館
名古屋市立中央

1　はじめに

竪三蔵通遺跡は、中区栄一丁目にある旧石器時代から江戸時代の遺跡である。白川公園の西方一帯、伏見通・若宮大通・堀川に囲まれた、東西約500m・南北約250mを遺跡範囲と捉えている。遺跡が形成された地盤は、６万年以上前に堆積を終えた熱田層より成る更新世台地（熱田台地）であり、隆起後の浸食や開析によって基本的な地形が形成された。遺跡付近の標高は９m前後で、基本的に南方の紫川に向かって下がる傾向がある。周辺は、17世紀の名古屋城下町建設以来都市的環境が続いており、特に太平洋戦争の戦災復興によって地形はかなりの改変を受けている。遺跡範囲の西端は、堀川に臨む段丘崖であり、東・南端は、紫川の谷に面する地形をほぼ示している。紫川は、北東方から台地を開析して堀川に流下していた小河川で、城下町時代には都市排水路として石垣護岸により整備されていた。紫川の谷地形は、最終氷期の海面低下に伴って浸食形成されたものと考えられる。遺跡の北縁の現状は、中世以前の遺物の出土情報に基づいて16次地点北側の東西方向の道路で画されている。

図１に示したように、1983年以来、遺跡内の各所で調査が行われている。５・８・９・14次で旧石器が出土しており、現在のところ名古屋台地で最古の人間活動の痕跡である。４・５・８・９・14次では、縄文時代の土器がまとまって出土しており、特に５次では旧紫川への谷斜面で、早期から晩期の土器が見られた。弥生時代には、後期の土器が４～６・８・９・14次で出土しており、４・５・８・９次地点では古墳時代の初頭へと継続した後、一旦途切れるようである。この段階までは、旧紫川に面する台地縁辺沿いに、小規模な遺跡が断続したことがわかる。

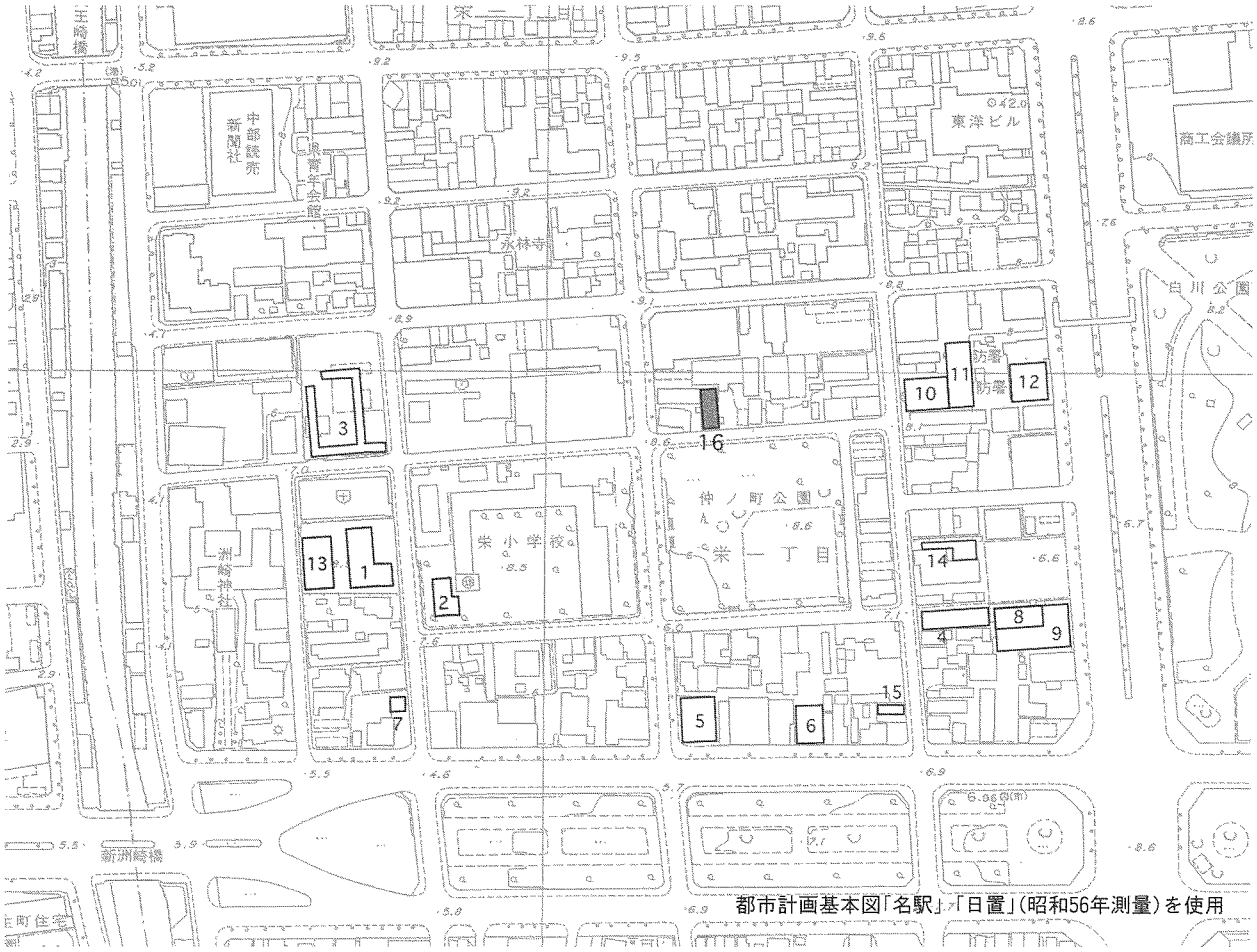


図１　竪三蔵通遺跡調査地点位置図（１／4,000　数字は調査次数）

古墳時代前期の遺物は、3～5次で見られるものの量的には少ない。5世紀の初期須恵器の出現と前後して、遺跡は爆発的に拡大する。5～6世紀の竪穴住居跡は、1・3・10・11・13・14次調査で見られ、2・4・5・8・9・12次でも、土坑やまとまった遺物の出土があった。4次地点では、径20mほどの円墳と思われる溝があり、5世紀末～6世紀初め頃のものと考えられる。7～8世紀にも、1・7・13・14次調査で遺構があり、各所で遺物が出土しているが、遺構・遺物の量からは縮小傾向と言える。2次調査では、灰釉陶器がまとまって出土し、平安時代の住居跡も見られたが、総じて遺構・遺物は少なくなる。2・12次調査では、小片ながら緑釉陶器も見られたが、灰釉陶器が出土しない地点も多く、遺跡範囲はかなり限定される。

中世前半も、様相はあまり変わらない。1次地点で12世紀の竪穴住居1軒が知られるが、全体的に遺物量は少ない。13世紀には、6・14次で溝や井戸が残されており、遺物も増加の傾向を見せる。15～16世紀には、1・2・6・13次で規模の大きな溝が知られ、遺跡南西部に城館が築かれたと考えられている。

近世に入り、名古屋城下町が建設されると、遺跡範囲も都市化が進み、武家屋敷が立ち並んだ。こうした景観は、江戸時代を通じて続き、太平洋戦争の空襲後の戦災復興がおこなわれるまでは、町の様相は大きく変わることがなかった。

2　調査の経過

マンション建設に伴う調査の現地作業は、2001年(平成13年)7月23日から8月31日を期間とした。

調査地点は、最近まで駐車場として使用されており、着手の前週に駐車場の片屋根が撤去された。当該敷地は約200㎡であるが、敷地は周囲よりも高く、道路や隣地のコンクリート塀で囲まれているため、周囲に安全余地を取る必要があった。このため調査区は、敷地形状よりひとまわり小さい約150㎡を計画した。実際の調査区は、ほぼ予定通りに南北約19.4m、東西約7.7mの長方形となった。

排土置き場の関係から、調査区を分割して折り返し調査する必要があった。前後半の2回で終了させるため、排土の一部は敷地外に仮置きした。前半（北半）調査区は、西壁沿いで北から約13m、東壁沿いで約12mまでとし、面積は約90㎡であった。後半（南半）調査区は、北側を前半区と一部重複させつつ、残りの約60㎡を対象とした。前半の南縁（前後半の境界）は、遺構の密度や状況に応じて任意に設定したため、不規則である。

調査区の形状に基づき、全体を8区分して作業を進めた。図3のように調査区北西隅および西壁ライン（北西隅と南西隅を結ぶ直線）を基準として、西壁から4m東の南北線と、これに直交する北から5m毎の線を設定した。これは仮想グリッド（Gr.）であって、遺物の取り上げや遺構の位置表示に使用したが、現地に明示した訳ではない。土層観察断面（アゼ）は、外周壁を利用した他、状況に応じて任意に設定した。なお、前半区の西壁は全体が撹乱土(主に図6－33層)であったため、土層図を作成しなかった。

調査区東壁沿いには、上述の駐車場屋根を支えた柱の基礎が並んでいた。基礎はコンクリートの塊で、調査区内に8基がかかっていた。無理に除去すると東壁および隣地の塀が崩壊する可能性があったため、これらはそのまま残して調査を進めた。基礎の直下は、設置工事でかなり深くまで撹乱を受けていたが、周囲の土も一部掘り残さざるを得なかった。調査中の位置表示にも利用するため、これらの基礎を北から順にコンクリート1～8（Co1～8）と呼んだ。

作業の進行状況は、下記の日誌抄のとおりである。

調査日誌(抄)

7月23日(月)　調査に着手。フェンス設置。旧駐車場のコンクリート面にカッターで調査区を設定。調査区内のコンクリート版を重機で割り剥がす。

7月24日(火)　除去したコンクリートを搬出。北部から前半区の表土除去を始める。

7月25日(水)　前半区表土除去。

7月26日(木)　前半区表土除去終了。包含層掘削に着手。

7月27日(金)　前半区包含層掘削。３Gr.の黒色土から須恵器高杯が出土。住居跡の存在を予想。

7月30日(月)　前半区包含層掘削。遺構検出も進み、一部では遺構の掘削にも着手。

7月31日(火)　前半区包含層掘削を終了。遺構の掘削進む。ＳＢ1はこの時点では形状不明確。

8月１日(水)　前半区遺構掘削。記録作業にも着手し、ＳＢ１周辺の東西土層図を作成。

8月２日(木)　前半区遺構掘削。ＳＢ１のプラン確定、掘削。主にピット掘り。

8月３日(金)　前半区遺構掘削を終了。南西（５Gr.北西部）の一部は未掘のピットを残す。

8月６日(月)　前半区清掃を行い、全景写真撮影。上記掘り残しの掘削。平面図作成に着手。

8月７日(火)　前半区実測。雨が断続。東壁土層図、平面図の作成を進める。

8月８日(水)　前半区実測。平面図を作成。５Gr.北西部の最終写真撮影。

8月９日(木)　前半区調査完了。東壁土層図・平面図を仕上げる。

8月10日(金)　前半区埋戻し。後半区表土掘削。南東から始めるが、黒色土の残存良好。

8月13日(月)～16日(木)　排土工事業者夏期休業のため現場作業休止。

8月17日(金)　後半区表土掘削終了。黒色土上面に近世遺構の存在を確認。

8月20日(月)　後半区包含層掘削。黒色土上面の遺構も検出・掘削。

8月21日(火)　台風11号接近。雨天休止。安全対策（フェンス撤去等）のみ実施。

8月22日(水)　フェンス復旧。排水。後半区、黒色土上面遺構の掘削・実測。

8月23日(木)　後半区掘削。包含層掘削ほぼ終了。住居が重複か。遺構検出・掘削も進める。

8月24日(金)　後半区遺構検出・掘削。土層図作成に着手。

8月25日(土)　後半区遺構検出・掘削。ＳＢ5まで命名。切り合い関係は不明確。

8月27日(月)　後半区遺構掘削。ＳＢ２のカマド確認。南壁土層図等作成。

8月28日(火)　後半区掘削終了。清掃を行い、全景写真撮影。平面図作成に着手。

8月29日(水)　後半区平面図作成。東壁土層図作成。

8月30日(木)　後半区平面図作成。

8月31日(金)　後半区平面図作成・完了。埋戻しを行う。フェンス等撤去。現地での作業完了。

3　遺構と遺物

表１に、把握した近世以前の遺構を一覧した。主なものを時代順に概説する。遺物は、コンテナケース８箱分と少ない。丹念に採集したこともあるが、小片が多い。長径が１cmに満たないような破片も多く、全体的に細片化している印象が強い。”No.”を付した数字は、図７・８、表２に対応した遺物番号である。

(1)　古墳時代以前

出土遺物中には、弥生時代末に遡る土器片を含む可能性がある。今回最も古い遺物は、旧石器時代～縄文時代早期の剥片（No.36）である。時期不明ではあるが、古墳時代以前の遺構を１基以上確認した。

ＳＫ４　古墳時代の２軒の住居（SB１・６）に先行する落込みである。検出面は暗褐色地山面で、深さは約80cm、径1.5m以上と推定されるが、Co３下に続くため全形は不明である。東西断面（図a-a’）では、黒色土埋土中に、上位にあるべき地山の大型ブロックが、ずり落ちたような状況が認められる。西側では形状が捉えられたが、東側では地山ブロック（埋土）と地山の区別をつけられないまま調査を終えた。明確な共伴遺物は無く、黒色土中にわずかな土器の小片を認めたが、上層からのピット等を確認しきれなかった可能性もあり、形成時期は、古墳時代以前としか表現できない。成因は、人為によらない可能性が考えられ、いわゆる風倒木痕に類するものと推測している。

ＳＫ８　SK４と同様な黒色土の落込みである。やはり時期・形状とも不明確であった。上記の剥片は、この土坑を切ったP30の出土品であるが、関連は不明である。また、SK８の南にあるP34～36の周辺も、黒ボク状の土が小土坑状に落ち込んでいた。単独の落込みが近接する可能性と、両者が一体のものである可能性が考えられたが、「地山」を断ち割る余裕が無く確認できなかった。

(2)　古墳時代

黒色土および暗褐色埋土の遺構が、この時期にあたる。ただし厳密に時期比定ができる訳ではなく、古墳時代以前～中世の幅を持つと考えられる。暗褐色土は、地山の上部である暗褐色のブロックを主体とするもので、黒色土と時期差を想定するものでは無い。竪穴住居跡６軒、土坑数基、ピット多数がある。掘立柱建物１棟が推定できる。各遺構からの出土遺物は少なく、遺構の時期を明示する例は無い。埋土中と捉えた遺物も、上面からの遺構を把握しきれなかった可能性があり、時期比定は推定にとどまる。切合いを確認した関係のみ示せば、SB３→SB２およびSB５→SD１→SB２である。

ＳＢ１　主軸W25°N、東西4.8m、南北５mの方形プランを推定する竪穴住居である。北及び東壁の一部は残存が良好だが、北東部以外は形状が不明確である。P50･74･98･４または５が柱穴と推定され、東壁際のSK15も、この住居に伴うものと考えられる。SK15は、床面より10cm程掘り込んだ浅い土坑で、上面に明確な貼床等は認められなかった。北壁の中央よりやや西には、焼土粒の目立つ部分があり、壁のラインがわずかに抉れる形状を認めた。竈の可能性を考えたが、確認はできなかった。SK２は、防空壕１以西を捉えていたが、住居の北西部であった。この付近はかなり攪乱を受けており、他の遺構が重複している可能性も残る。SK３は、検出時にP74の北部付近を土坑と捉えたもので、最終的には住居埋土とした。SB１の遺物は、埋土に混入した破片が認められたのみである。No.５はSK15出土で住居の廃絶以前のものと考えられ、No.22･23は埋土上部出土で住居廃絶以後の可能性が強い。他に、埋土中からNo.１～４・６・７･21が出土している。SB１の時期は、５世紀末から６世紀前半の幅の内と考えられる。

ＳＢ２　主軸W35～40°N、一辺約4.6mの方形プランを推定する竪穴住居である。中央から東壁にかけて

写真１　前半（北半）調査区（南から見る）

写真２　後半（南半）調査区（北東から見る）

表１　遺構一覧

◎肩高欄は、記録に確認できる遺構形状の最上位のレベル値を、５cm毎に二捨三入したものである。（単位＝m）

◎底高欄は、遺構底面の標準的なレベル値を、５cm毎に二捨三入したものである。（単位＝m）

◎埋土欄は、次のように略記した。

黒＝黒色土、a～dは地山ブロックの割合を示す。aが非常に密にで、dはわずか。

暗褐＝暗褐色土

暗灰＝暗灰色土

灰＝灰色土

Ｓ＝石（礎石・根石となる大きさ）

◎時期欄は、確度の高いもののみ記した。～は、記した時期を含む以前・以後を表す。

◎遺物欄は、破片点数の概数を示す。基本的に細片も１点としている。略記は、以下の通り。

土＝土器・土師器

須＝須恵器

山＝山茶碗

中＝中世陶器（山茶碗以外）

近＝近世陶磁器

名称	Gr.	肩高	底高	埋土	時期	遺物	備考
SB１	1-4	8.95	8.70	図参照	古墳	土564，須107	
SB２	5-8	8.95	8.70	〃	古墳	土610，須98	
SB３	8	8.95	8.70	〃	～古墳	土160，須15	
SB４	5･7	8.80	8.60	〃	古墳	土410，須55	
SB５	6	8.90	8.65	〃	古墳	土85，須16	
SB６	4	9.05	8.65	〃	古墳	土２，須１	
SK１							→SE１
SK２							→SB１
SK３							→SB１
SK４	4	8.95	8.10	図参照	～古墳	土30，須３	木痕？
SK５	6	8.60	8.40	灰	江戸	土15，須８，近８	
SK６	6	8.65	8.40	図参照	古墳	土25，須10，山２	住居跡？
SK７							→SB６
SK８	2	8.80	8.30	黒	～古墳	土5	木痕？
SK９	1	9.00	8.85	黒	～古墳	須4	住居跡？
SK10	6･8	8.95	8.55	灰	江戸	土23，須24，山３，近25	瓦・石北半に多い
SK11							→SB４
SK12	7	8.55	8.30	黒	古墳	土20，須１	SB4との関係？
SK13	7	8.60	8.30	黒	古墳	土90，須7	SB４貼床下，SK14を切る
SK14	7	8.60	8.35	黒	古墳	土10	SB４貼床下
SK15	2･4	8.70	8.55	黒	古墳		SB１床面土坑
SE１	4	8.90	？	灰	江戸	土15，須５，近５	底面＝7.90以下
SE２	5	8.60	？	灰	江戸	土16，須２，山１，近３	底面＝7.85以下
SE３	8	9.00	？	灰	江戸		底面＝7.95以下
SD１	6･8	8.80	8.65	黒	古墳？	土17，須７	住居周溝？
防空壕１	1･3	8.95	？	瓦礫	現代		底面＝8.20以下
防空壕２	2	9.20	？	瓦礫	現代		底面＝8.60以下
防空壕３	5･6	8.85	7.70	瓦礫	現代		
P１	3	8.65	8.20	灰		土４，須３，山１	
P２	4	8.50	8.45	暗灰			
P３	4	8.40	8.30	黒c		土３，須１	
P４	4	8.45	8.95	黒b	古墳	土２	SB１柱穴
P５	4	8.45	8.25	黒b	古墳		SB１柱穴？
P６	4	8.45	8.35	黒b		土２，須１	
P７	4	8.45	8.40	黒b			
P８	4	8.50	8.40	黒		土４	
P９	4	8.55	8.45	灰			
P10	4	8.50	8.25	暗灰		土10，須１，山２，中１	
P11	3･4	8.55	8.45	黒c		土４，須１	
P12	4	8.50	8.40	黒a			
P13	3	8.60	8.45	黒a			
P15	4	8.55	8.45	暗灰			
P16	3･4	8.55	8.45	暗灰			
P17	6	8.60	8.40	暗灰		土１，須２，山１，近１	
P18	5･6	8.75	8.35	黒c		土７，須２，近２	掘立柱建物？
P19	6	8.50	7.95	黒	古墳	土３，須３	SB５柱穴？
P20	3	8.65	8.50	黒b			
P21	3	8.85	8.65	暗灰？			
P22	2	8.70	8.15	黒	～古墳	土１	
P23	2	8.95	8.80	灰S	現代？		川原石あり
P25	2	8.90	8.80	灰			
P26	2	8.90	8.75	黒			
P27	2	8.85	8.60	灰			
P28	2	8.90	8.60	暗灰			
P29	2	8.85	8.75	暗灰			
P30	2	8.75	8.40	灰		須２，近１	形状不祥
P31	2	8.85	8.65	暗灰			
P33	2	8.80	8.10	灰S		須３	北西隅に柱痕
P34	2	8.75	8.35	灰			
P35	2	8.75	8.35	灰		須１，中１	
P36	2	8.80	8.25	黒			
P37	2	8.90	8.40	灰S		土５，須８，山２，近３	石あり
P38	2	8.90	8.60	暗灰		土４，須１，近１	
P40	2	8.90	？	灰		土10，須２，山３	底面＝8.30以下，砂利敷き
P41	2	8.80	8.65	灰		土１，須１	
P42	2	8.75	8.55	黒		土1	
P43	1	8.85	8.65	暗灰		土４，須５，山４，中２	
P45	1	8.75	8.50	灰		土９，須３	
P46	1	8.75	8.35	灰S	現代？	土18，須17，山２	石あり
P47	1	8.80	8.40	灰S	現代？	土８，須３，山２，近？１	石あり
P48	1	8.95	8.75	黒		土２	
P49	1	8.90	8.75	暗灰			
P50	3	8.65	8.20	黒c	古墳		SB１柱穴
P51	1	8.80	8.65	灰S		土８，須９，近１	P52を切る
P52	1	8.45	8.25	灰S	現代？	土７，須５，近２	
P53	1	8.80	8.50	灰S		土７，須８，山２，近５	石あり
P55	1	8.75	8.65	黒b			
P57	3	8.80	8.35	灰？		瓦	
P58	3	8.85	8.60	暗灰		土3，須2	
P59	3	8.80	8.60	暗灰		山１	
P60	1	8.75	8.65	暗灰		土５	
P61	5	8.80	8.40	灰？		須１	
P62	1	8.75	8.65	灰		土３，須１	
P63	1	8.75	8.70	灰		土３	
P64	5	8.70	8.45	黒？		土９，須１	掘立柱建物？
P65	5	8.90	8.45	黒			
P66	5	8.65	8.50	灰			
P67	5	8.60	8.40	灰			
P69	3	8.60	8.40	暗灰		土１	
P70	3	8.60	8.30	黒		土４，須１	
P71	4	8.60	8.50	暗灰			
P72	4	8.55	8.45	暗灰			
P73	3･4	8.60	8.45	暗灰			
P74	3	8.60	8.15	黒	古墳	土３	SB１柱穴
P75	3	8.60	8.40	黒		土20，須１	
P76	3	8.65	8.50	灰S	現代？	土７，須１	３段重ねの石
P77	3	8.70	8.30	灰		土８，須５	P76に切られる
P79	2	8.90	8.50	灰S			石あり
P80	2	8.60	8.55	暗灰？		土５，須１，近１	
P82	6	8.40	8.10	暗灰	～江戸		SK５に切られる
P83	6	8.55	8.30	灰		土１，須１	
P84	1	8.65	8.55	暗灰？		近世瓦１	防空壕１に切られる
P86	1	8.80	8.45	黒		山１	

名称	Gr.	肩高	底高	埋土	時期	遺物	備考
P87	2	8.80	8.60	灰			
P88	2	8.95	8.90	灰S	現代？		石あり
P89	2	8.90	8.80	暗灰		須1	
P90	1	8.80	8.70	灰S	現代？		
P91	1	8.80	8.65	灰S	現代？	土2，山1	
P92	3	8.75	8.35	灰		土2，須4	南寄りに柱痕
P93	6	8.55	8.50	黒？			
P95	2	8.90	8.85	灰？		須2，山1	
P97	1	8.80	8.65	灰S	現代？		
P98	1	8.60	8.10	黒a	古墳		SB1柱穴
P99	2	8.90	8.60	黒		土2，須1	
P100	1	8.85	8.40	黒		土3，須1	
P101	1	8.85	8.50	黒		土1，須2	
P103	1	8.90	8.65	黒			
P104	1	8.85	8.50	黒			
P106	2	8.55	8.50	黒c			
P107	4	8.55	8.50	黒a			
P108	3	8.55	8.30	黒a		土4，須1	掘立柱建物？
P109	4	8.55	8.40	黒a		不明土製品1、須1	
P110	5	8.85	8.45	灰		土6，須5	撹乱混
P111	1	8.85	8.70	黒		土3，須2	
P112	3	8.75	8.45	黒		土4	
P113	5	8.80	8.60	黒	8c～	土6，須3	
P114	5	8.80	8.70	黒？			撹乱？
P115	5	8.80	8.55	黒			
P116	5	8.75	8.60	黒			
P117	5	8.85	8.70	暗褐			
P118	5	8.95	8.40	暗褐			
P119	5	8.90	8.60	暗褐		土8，須2，近1	
P120	5	8.85	8.20	黒a		土20，須4	掘立柱建物？
P121	8	9.05	8.75	灰	江戸	土6	根石あり
P123	8	8.65	8.45	暗褐b			
P124	8	8.65	8.45	暗褐a			
P125	6	8.40	8.20	暗灰		土3，山1	
P127	5･6	8.60	7.75	暗灰		土5，須2	
P128	5	8.60	8.55	黒c			
P129	6	8.60	8.35	黒			
P133	6	8.75	8.60	灰	江戸	山1，近6	石数個
P134	6	8.55	8.50	黒a		近世瓦1	
P135	6	8.55	8.30	黒a			掘立柱建物？
P136	8	8.65	8.30	黒d			
P138	7	8.55	8.45	暗灰		土2，須1	撹乱混
P139	7	8.60	8.15	黒b	古墳	土7，須3	SB4柱穴
P140	7	？	？	灰		土4，須5，中?1	底面＝8.60以浅
P143	5	8.80	8.65	灰S		土2，須3	
P144	5	8.75	8.55	灰	近代～	土2，須2	陶甕を据える
P145	5	8.80	8.55	黒		土1	
P148	7	8.65	8.55	黒a			
P149	5	8.55	8.50	灰		土40，須10，山3，中近5	
P152	6･8	8.80	8.75	灰		土4，須4，山1，近1	
P154	5	8.35	8.50	黒c		土2	
P157	8	8.70	8.65	暗褐			
P158	8	8.70	8.55	暗褐		土4	
P160	6	8.80	8.60	黒c		土15	貼床？下
P161	6	8.80	8.55	暗褐		土2，須2	貼床？下
P165	5	8.80	8.75	灰		土10，須3，山3	
P166	7	8.50	8.05	黒c		土20，須3	
P167	8	8.70	8.20	黒d	古墳		SB3柱穴？
P168	8	8.65	8.60	黒c			
P169	8	8.70	8.60	暗褐b	古墳	土1	SB2柱穴
P170	8	8.65	8.55	暗褐b			
P172	8	8.65	8.55	黒a			
P174	5	8.75	8.50	黒a		土7，須2	SB2に切られる，近世瓦混

名称	Gr.	肩高	底高	埋土	時期	遺物	備考
P175	5	8.85	8.35	灰c		須1	
P176							→SE2
P177	8	8.65	？	黒			底面＝8.60以下
P178	8	8.65	8.60	黒a			
P179	6	8.65	8.45	黒			
P180	8	8.70	8.55	黒			
P181	8	8.65	8.60	灰			
P182	8	8.70	8.60	黒			
P183	8	8.70	8.65	灰c			
P184	8	8.80	8.30	暗褐d	古墳	土5，須1	SB3柱穴？
P185	8	8.70	8.55	黒			
P186	8	8.70	8.60	黒a			
P187	8	8.70	8.65	黒c			
P188	8	8.70	8.65	黒c			
P189	8	8.75	8.35	黒		土1	
P190	7	8.65	8.60	黒d		土1	
P191	7	8.65	8.60	暗褐d		土3	
P192	7	8.65	8.60	暗褐d			
P193	7	8.65	8.55	暗褐c		土3，須3，山1	
P194	5	8.80	8.65	黒c			
P195	5	8.75	8.55	灰		土5，須1	近世瓦混
P196	5	8.75	8.55	暗褐b		土1，須1	
P197	5	8.70	8.50	黒			
P198	5	8.75	8.60	黒		土8，須3	
P199	8	8.70	8.65	暗褐b		土1	
P201	8	8.60	8.50	暗褐c			
P203	6	8.60	8.25	黒b	古墳		SB2柱穴
P204	8	8.65	8.50	暗褐c			
P205	7	8.40	8.20	暗褐c	古墳	土1	SB4柱穴
P206	7	8.50	8.40	暗褐a		土7	
P207	7	8.55	8.45	暗褐a			
P208	7	8.55	8.55	黒c			
P210	7	8.55	8.35	黒d			
P211	7	8.55	8.40	黒b		土3，須1	
P212	7	8.55	8.50	暗褐a			
P214	5	8.75	8.70	黒		土1	
P215	5	8.75	8.55	灰		土8，須1，山1	
P216	8	8.70	8.65	黒b		近世瓦1	
P217	8	8.70	8.15	黒		土5，須2	
P218	8	8.65	8.60	黒c			
P219	6	8.65	8.20	黒c		土4，須1	
P221	6	8.60	8.55	黒b			
P222	5	8.80	8.65	黒c		土4，須3	
P223	5	8.80	8.50	黒			
P224	8	8.65	8.50	暗褐c			
P225	6	8.75	8.15	黒a	～古墳	土6	SB5柱穴？
P226	6	8.60	8.20	黒		土8，須1，焼土塊5	
P227	5	8.80	8.65	暗褐			
P228	7	8.55	8.50	黒		土5，須6	
P229	5･7	8.50	7.80	黒b			
P230	7	8.55	8.30	黒c	古墳		SB2柱穴？
P231	7	8.55	8.45	灰			
P232	7	8.55	8.25	黒c		土8，須3	
P233	5	8.55	8.25	暗褐b		土19，須2	
P235	8	8.70	8.50	黒		土5	
P236	6	8.70	8.60	黒	～古墳	土1	SB2・5に先行
P237	6	8.80	8.55	黒	～古墳	土3	SB5に先行，SD1貼床？下
P238	6	8.60	8.50	暗褐b		土3	SB5を切る
P240	6	8.65	8.55	黒c			
P241	6	8.60	8.25	暗褐b			
P243	5	8.55	8.50	黒	古墳	土2	
P244	7	8.55	8.10	黒c	古墳		SB4柱穴
P245	7	8.50	8.45	黒b	古墳	土7，須3	
P246	5	8.50	8.30	暗褐	中世～	土7，須2，中1	SB2を切る
P247	7	8.55	8.45	暗褐b			
P248	7	8.55	8.50	暗褐b		土1	

図２　調査区全体図（Ｓ＝１／80）

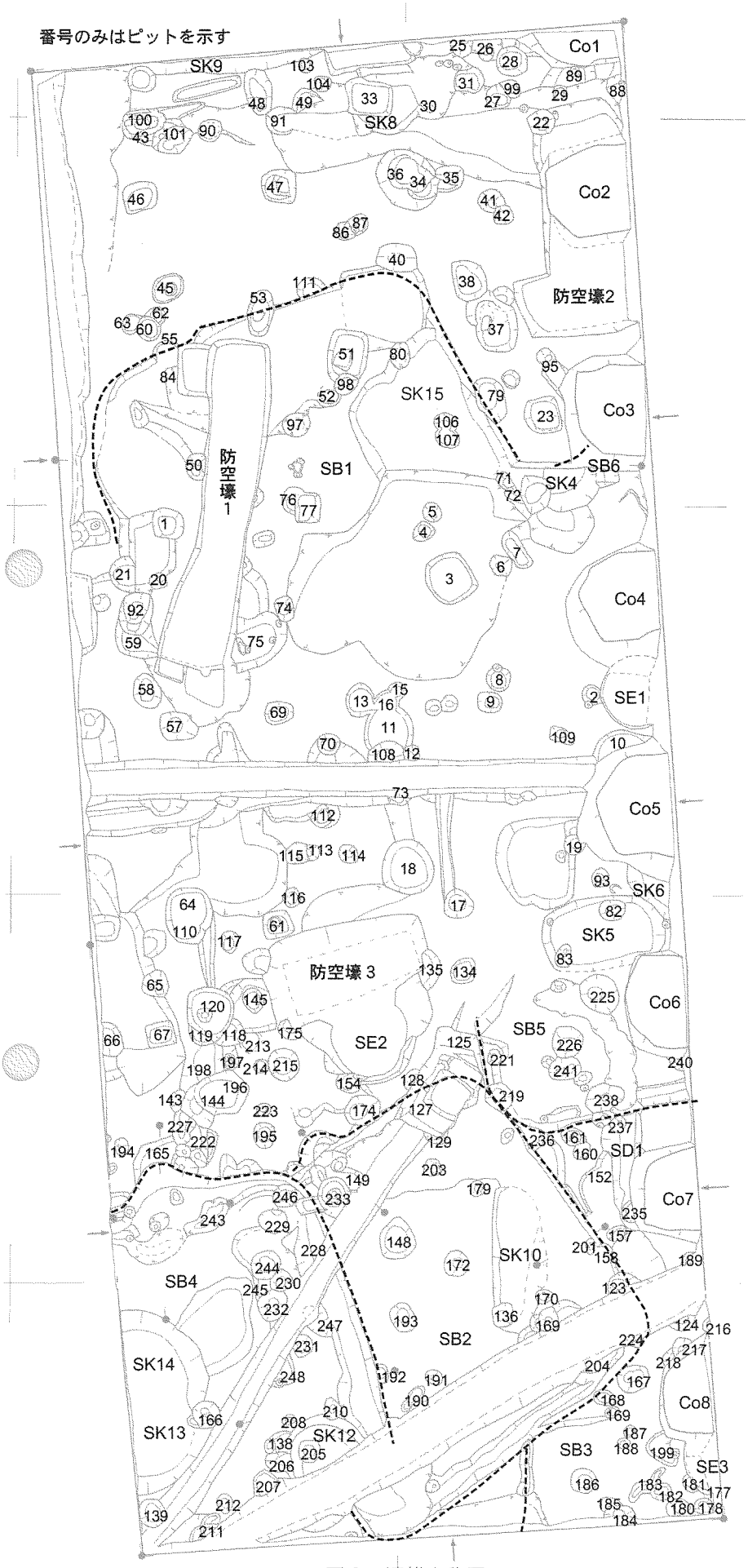


図3　遺構名称図

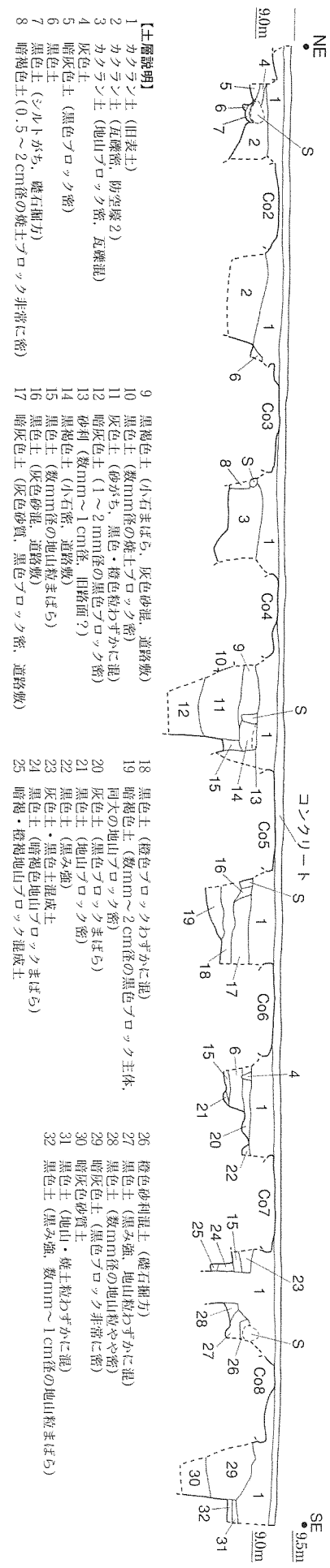
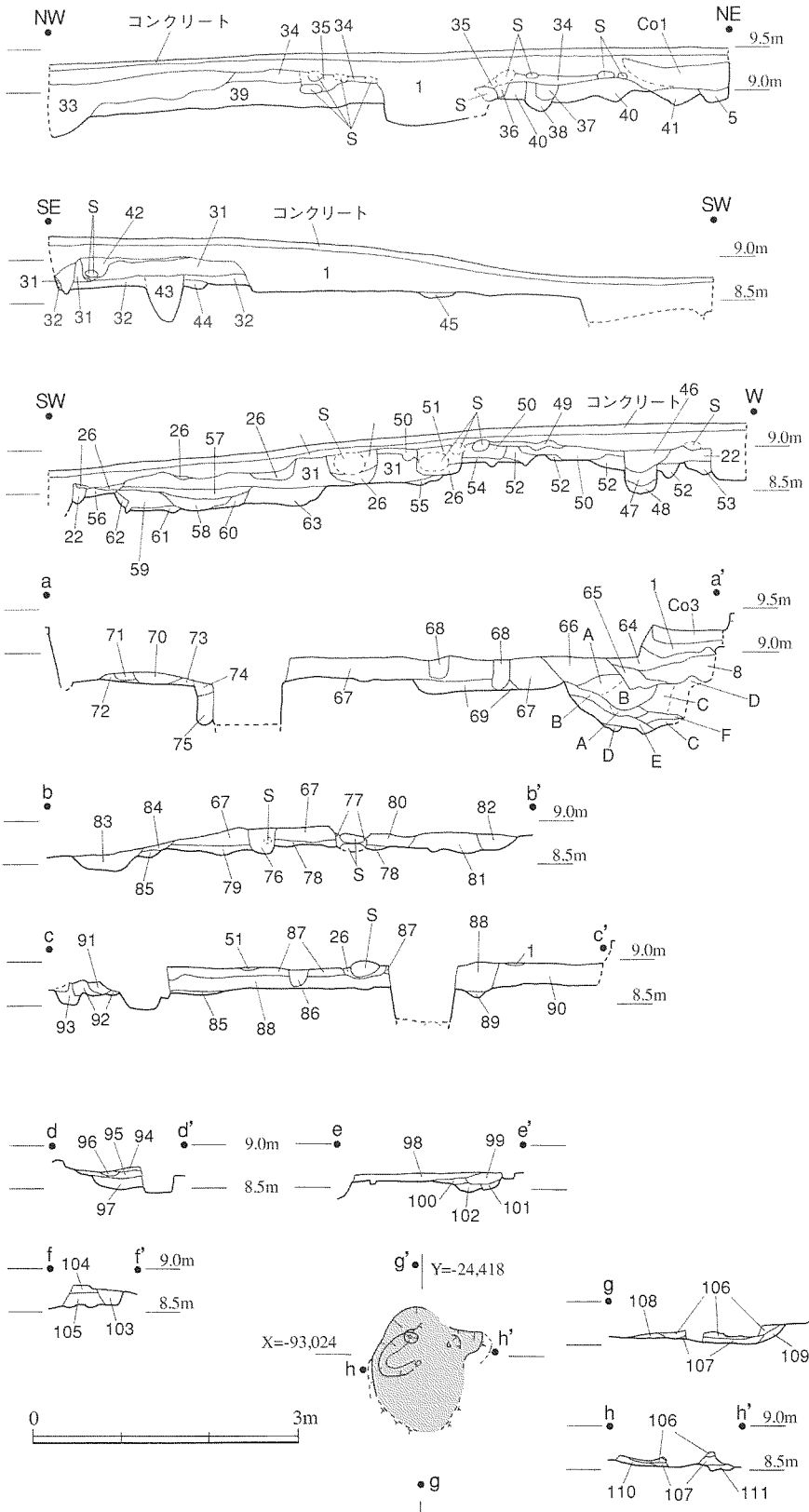


図4　調査区東壁土層断面図

【土層説明】

1 カクラン土（旧表土）
2 カクラン土（瓦礫密，防空壕2）
3 カクラン土（地山ブロック密，瓦礫混）
4 灰色土
5 暗灰色土（黒色ブロック密）
6 黒色土
7 黒色土（シルトがち，礫石掘方）
8 暗褐色土（0.5～2cm径の焼土ブロック非常に密）
9 黒褐色土（小石まばら，灰色砂混，道路敷）
10 黒色土（数mm径の焼土ブロック密）
11 灰色土（砂がち，黒色・橙色粒わずかに混）
12 暗灰色土（1～2mm径の黒色ブロック密）
13 砂利（数mm～1cm径，旧路面？）
14 黒褐色土（小石密，道路敷）
15 黒色土（数mm径の地山粒まばら）
16 黒色土（灰色砂混，道路敷）
17 暗灰色土（灰色砂質，黒色ブロック密，道路敷）
18 黒色土（橙色ブロックわずかに混）
19 暗褐色土（数mm～2cm径の黒色ブロック主体，同大の地山ブロック密）
20 灰色土（黒色ブロックまばら）
21 黒色土（地山ブロック密）
22 黒色土（黒み強）
23 灰色土・黒色土混成土
24 黒色土（暗褐色地山ブロックまばら）
25 暗褐・橙褐地山ブロック混成土
26 橙色砂利混土（礫石掘方）
27 黒色土（黒み強，地山粒わずかに混）
28 黒色土（数mm径の地山粒やや密）
29 暗灰色土（黒色ブロック非常に密）
30 暗灰色砂質土
31 黒色土（地山・焼土粒わずかに混）
32 黒色土（黒み強，数mm～1cm径の地山粒まばら）



【土層説明】

33　カクラン土（砂利密な淡紅色土）
34　暗茶褐色土（整地層？，小石まばら）
35　茶褐色土（砂利密な暗茶褐色土）
36　黒色土（18に似るが35・Sと一体か？）
37　灰茶色土（黒色土粒まばら）
38　暗灰褐色土（37と同様だが粒密）
39　黒色土（砂質地山の小粒わずかに混）
40　黒色土（暗褐・黒色の地山粒混成土）
41　暗灰色土（暗褐・黒色粒密）
42　灰色土（砂がち，黒色粒まばら）
43　黒色土（32に似る，ブロックやや多い）
44　暗褐色土（数mm～1cm径地山粒密な黒色土）
45　黒色土（数mm～1cm径の地山粒わずか）
46　暗灰色砂質土（黒色粒やや密）
47　灰色砂質土（黒色粒まばら）
48　暗褐色土（橙色・黒色粒混成）
49　暗褐色土（1cm径以下の焼土・暗褐・炭粒混成）
50　灰色砂質土（黒色粒・小石まばら）
51　暗灰色土（黒色粒密・砂利まばら）
52　黒色土（暗褐色粒まばら）
53　暗褐色土（暗褐色粒主体，黒色粒混）
54　暗褐色土（地山に黒色土が浸透？）
55　黒色土（数mm径の地山・焼土粒やや密）
56　黒色土（1cm径前後の地山粒やや密）
57　暗褐色土（数mm～1cm径の黒色・橙色・暗褐粒混成土）
58　暗褐色土（57より黒み強く粒径2～3cmも混）
59　黒色土（1cm径前後の黒色・暗褐粒混成）
60　暗橙褐色土（57に似るが地山粒多い，61・62と一連か）
61　暗橙褐色土（60に似るが径は2cm前後主体）
62　暗橙褐色土（61と同様で地山粒主体）
63　暗橙褐色土（0.5～3cm径の粒混成，橙褐・暗褐主体で黒色わずかに混）
64　暗褐色土（数mm径の焼土・地山粒まばら，黒色土に近い）
65　暗褐色土（1cm径以下の地山粒密，黒色粒混）
66　黒色土（直下のA粒とは漸移的変化？）
67　黒色土（暗褐色，数mm径の地山・黒色粒まばら，焼土粒わずか）
68　灰色・暗灰色土（地山・黒色粒密，カクラン）
69　暗褐色土（数mm～2cm径の地山C・D粒主体，黒色粒混）
70　暗褐色土（数mm～5cm径の地山C・D・黒色粒かなり密）
71　黒色土（59に似る，焼土粒わずかに混）
72　暗橙褐色土（黒色土混地山粒，地山か）
73　暗橙褐色土（数mm～1cm径地山粒主体，黒色粒混）
74　暗橙褐色土（数cm径地山・黒色粒混成）
75　暗灰褐色土（黒色土粒密，やや砂がち）

A　黒色土（クロボク状，本来の地山最上部か）
B　地山AからBへの漸移的な部分
C　暗褐色土（Aの下部地山）
D　橙褐色土（Cの下部地山）
E　黄褐色粗砂（Dの下部地山）

76　暗灰色土（黒色土粒密）
77　灰色土（やや砂がち）
78　黒色土（67に似るが黒み強く焼土粒まばら）
79　暗褐色土（1～2cm径の黒色・地山粒混成，やや黒が多い）
80　暗灰褐色土（0.5～1cm径の黒色・地山・焼土粒密）
81　暗褐色土（数mm径の黒色・地山・焼土粒密）
82　黒色土（数mm～1cm径の地山・焼土粒まばら）
83　黒色土（径1cm前後の黒色粒主体，地山粒まばら）

84　黒色土（数mm径の地山粒やや密）
85　暗褐色土（1cm径の黒色・地山粒混成）
86　暗褐色土（数mm径焼土粒まばら，0.5mm前後の黒色粒密）
87　黒色土（やや砂がち，上層＝暗灰色砂質が浸透？）
88　黒色土（1cm径程度の黒・暗褐色粒主体，数mm径の焼土・橙褐粒混）
89　暗褐色土（数mm～1cm径の黒色・地山粒混成）
90　黒色土（0.5cm径の地山粒わずかに混，黒み強）
91　黒色土（0.5cm径の焼土・地山粒まばら）
92　暗褐色土（0.5cm径の橙色・暗褐・黒色粒混成）
93　灰色土（数mm径の地山・黒色土粒混）
94　黒色土（黒み強，暗褐粒まばら）
95　暗褐色土（数mm径の焼土粒をやや密に含む黒色土）
96　暗褐色土（95の内焼土が密な部分）
97　暗褐色土（暗褐・黒色粒混成，焼土微量）
98　黒色土（地山細粒わずか）
99　黒色土（98より黒み強，地山細粒まばら）
100　暗褐色土（0.5～1cm径の暗褐・橙褐粒混成，黒色粒混）
101　暗褐色土（暗褐粒主体，橙褐まばら，黒色わずか）
102　暗褐色土（暗褐・橙褐・黒色混成）
103　黒色土（数mm～1cm径の橙褐粒やや密）
104　黒色土（数mm～1cm径の橙褐粒わずか）
105　暗褐色土（数mm～3cm径の暗褐地山粒主体，同大の黒・橙粒混）
106　暗灰褐色土（橙色焼土粒密，炭化物片まばら）
107　暗灰色土（1cm径の焼土・炭・地山粒まばら）
108　黒色土（1cm径の焼土粒まばら）
109　黒色土（地山粒密，焼土粒わずかに混）
110　暗橙褐色土（数mm径の地山粒主体，黒色混）
111　暗灰色土（0.5cm径の焼土・黒色・橙色混成）

図5　土層断面図

の床面は良好だが、撹乱に寸断されている。P169・203・230が柱穴と推定され、北壁中央付近に竈がある。竈は、少量の焼土を伴うものの、痕跡的で不明瞭であった。周溝は、二重に検出された。壁際には幅20cm、深さ15cm程度で、黒色土を主体とする埋土の溝が巡り、その内側に幅50cm程の貼り床状（地山ブロック主体）埋土の浅い溝状部分が存在した。底面は著しく凸凹で、浅い凹みあるいは小ピットが密集したような状況を示していた。西部はSB４と、南東部はSB３と重複する。SB２床面では、No.９・11が出土しているが、住居に伴うとは言い切れない。SB３を切り、SB４との切り合いは不明確である。

ＳＢ３　調査区南東隅に想定される竪穴住居である。西壁周溝の痕跡と柱穴の可能性を考えるP167・184は、E５°Nの軸を持つ。Co８南西の焼土は、住居の中央付近にあたる。SB２に切られることと、埋土上面からI-17窯式頃の高坏坏部（No.15）が出土していることから、これ以前の住居と考えられる。地床炉を持つことと、軸方位が他と異なることから、古墳時代前半の住居である可能性を考えている。ただし、時期を明示する遺物は出土しておらず、No.12～14・16を埋土中として取り上げた。No.13・14は、No.15と時期的に近く、上記の時期推定と矛盾することになる。

ＳＢ４　主軸W15～20°N、南北4.8m、東西4.5mの方形プランを推定する竪穴住居である。東壁はSB２を切ると考えたが、土層の切り合いを明確に把握した訳ではない。P139・205・244を柱穴と推定している。東壁沿いの周溝は、SB２同様で、特異な幅広い二重構造であった。北壁には竈を伴った。橙色の焼土が径1.2m程の範囲に広がっており、竈の周壁がつぶれたものと考えられた。芯や支えの石は見られず、特に粘土質の土を用いた様子も見られなかった。当初SB４南東部（東壁ライン）をSK11と呼んだ。この付近は、遺構の重複が複雑で、SK11の遺物＝SB４出土とは捉えられない。SK12とSB４の先後も把握できなかった。SK13・14の黒色土埋土は、橙色地山ブロック主体の土による貼床で覆われていた。SB４の竈上面では、平底甕の底部片（No.17）や縄叩きの須恵器片（No.20）が出土したが、これらが本来伴うものかは不明である。埋土の遺物からは、５世紀末～６世紀の住居である可能性を考えている。

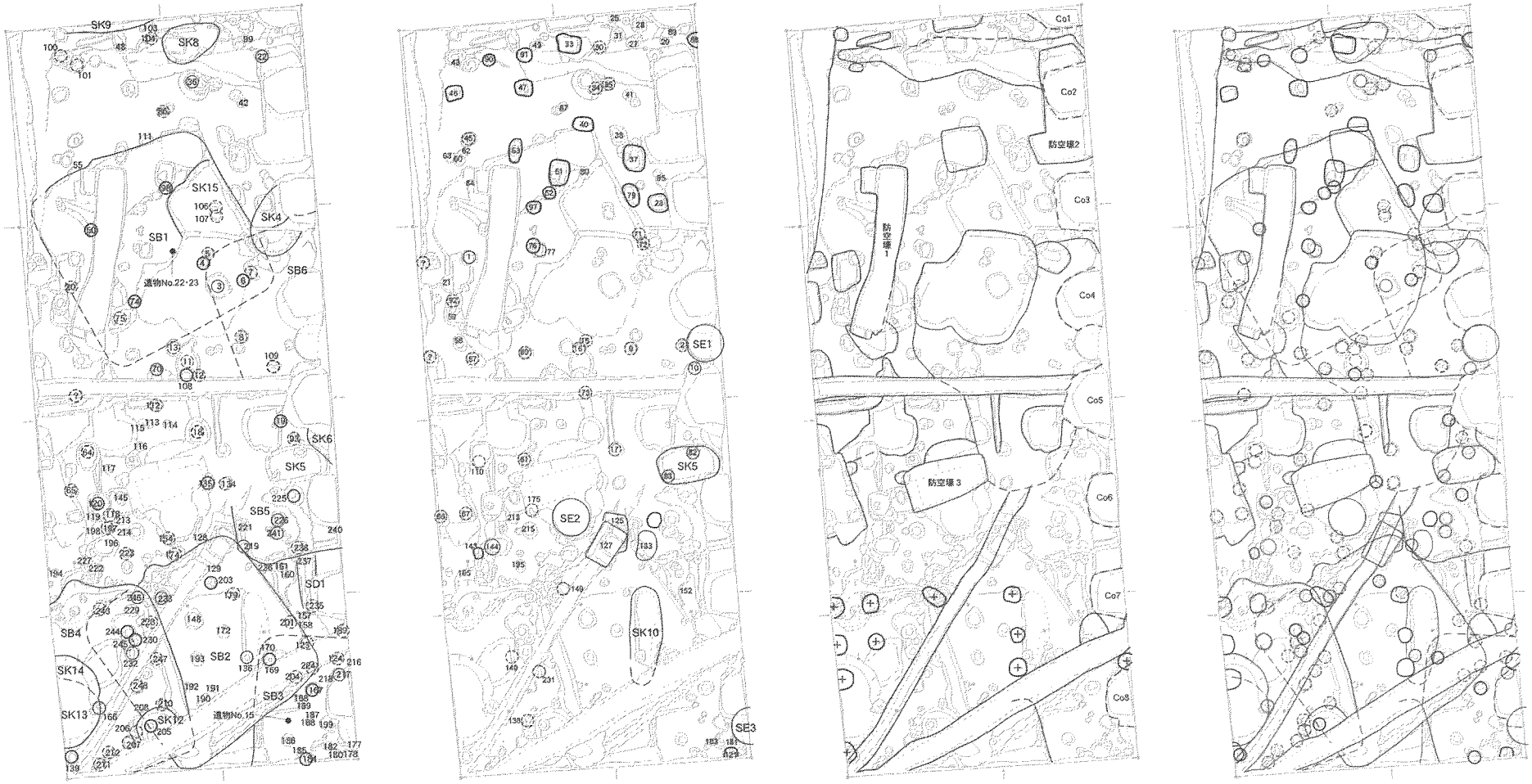
ＳＢ５　６Gr.で、ゆるい隅丸の南西角部のみを確認した。規模は不明で、柱穴はP19・225を想定するが、P226・241にも可能性があり、いずれも根拠は薄弱である。P19・225の軸方位は、W10°Nである。時期を示す遺物は認められなかった。P19からは甑の把手（No.35）が出土している。

ＳＢ６　SK４上部の土層断面で観察された焼土の非常に密な土を掘削したところ、わずかな焼土面が立ち上がる状況を確認した。遺物は伴わなかったが、状況から竪穴住居に伴う竈の痕跡と推定した。調査時にはSK７と呼んだ。あえて住居として推定を重ねれば、P６とP109を柱穴とする主軸W20°N前後のプランを持つ可能性が考えられる。報告にあたり住居番号を付した。

ＳＤ１　SB５の南で検出した南北方向の小溝である。この溝の西側には、橙色地山ブロックの貼り土の面があった。部分的な痕跡でしかないが、SD１を東壁周溝として貼床を持つ住居が存在した可能性がある。貼床はSB５埋土を覆い、SB２に切られていた。

掘立柱建物　SB１の南に方形の配列を示すピットがあり、１棟の建物であった可能性がある。P108・18・135・120・64と、撹乱と一緒に掘削されていた北西の１基の計６基である。P18からは近世陶器片が出土しているが、検出時には良好な黒色土を確認しているので、周辺からの混入と考えている。

ＳＫ６　６Gr.北西隅で一部を検出した。遺構の性格は不明である。位置的にはSB５の中央部にあたり、東壁土層の観察によれば、住居に先行する。埋土からは、山茶碗片が出土しているが、上層遺構等か



① 古代以前の遺構
（黒色土・暗褐色土埋土の遺構）

○　底面高が 8.30 m より低い穴
◌　底面高が 8.35～8.50 m の穴
○◌　柱穴の可能性を想定した穴

② 中世～明治時代の遺構
（灰色土・暗灰色土埋土の遺構）

○◌　①（左記）の説明に同じ
○　石を据えるあるいは込める穴

③ 現代の掘り込み（撹乱）
（明治時代以降に形成された
と考えられる掘り込み等）

⊕　砂利混橙褐色土中に石を据える穴

④ 主要な掘り込み全体
（①～③の図を合成したもの）

図 6　遺構変遷図

らの混入である可能性が強い。埋土出土の遺物中に、初期須恵器片（No.26）が含まれていた。

ＳＫ13・14　SB４西部床面で検出した。SK13は、西壁にかかるため全形は不明だが、南北約1.5mを測る。埋土は、掘り直したように見え、最後はブロック土で覆って埋めている。その上面が、SB４の床面となっている。北に重複してSK14がある。SK13に切られていると捉えたが、土層図（図５）の61～63層がSK14で、57～60層または60･61層と57･58層がこれを切っている（SK13）可能性がある。

(3)　古代～中世

須恵器には奈良時代のものをわずかに含む可能性がある。灰釉陶器の確実な破片は認めていない。中世では、山茶碗細片少量と大窯期の可能性がある陶片少量が出土している。黒色土または暗褐色土埋土のピット中には、奈良もしくは中世に属するものがあるかもしれないが、建物等は想定できない。

(4)　近世

井戸３基と土坑数基があるが、遺構の密度は希薄である。図７では、後述の北部の礎石群中に近世のものを含む可能性を考え、時期幅を広く示した。北半では、SE１以外に確実な近世遺構は認めていない。

ＳＫ10　ほぼ南北に主軸を持つ細長い土坑で、砂がちな埋土中に遺物をまばらに含んでいた。北寄りにやや多く見られた瓦片と石は、サンプリング的な取り上げをした。陶器類もほとんどが破片で、全形を示すのは鉢１点（No.30）のみである。遺物は、日常雑器類であるが、廃棄土坑と呼ぶほどに大量に含んでいる訳ではなく、遺構の性格は不明である。埋没後に据えられた河原石の礎石が、上面に認められた。礎石の方向軸と土坑の主軸がほぼ等しいのは、近世以降において屋敷地内の土地利用の規制・規格が一貫していたためと思われる。

ＳＫ５　地山ブロックを主体とする土と、黒色ブロックを主体とする土を互層状に埋め戻したと考えられる土坑である。出土遺物は陶器片がわずかに見られたのみである。

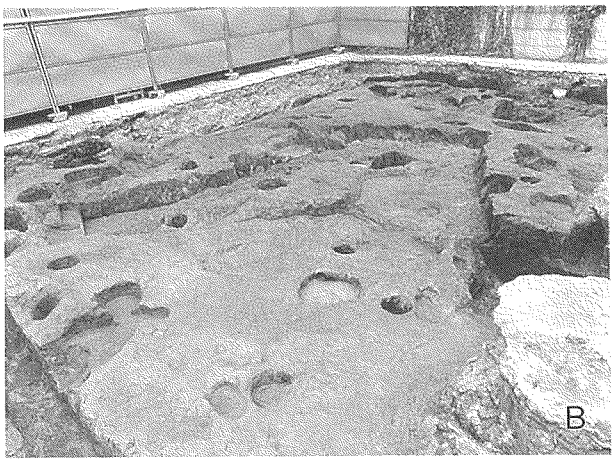
ＳＥ１　全形は不明だが、直径0.95mの円筒形土坑で、約１m掘り下げて底面に至らなかった。砂質の埋土中には、わずかな陶器片を含んでおり、17世紀後半～18世紀前半に埋没した井戸と考えられる。

ＳＥ２　径0.95mの円筒形土坑で、上部には段がついて径1.1mとやや広がっていた。北部は防空壕と考えられる大型土坑に切られていた。約1.5m掘り下げて底面に至らなかった。埋土は、粗い砂粒が目立つが、粘性の強い暗灰色の砂シルトで、陶器片をまばらに含んでいた。18世紀に廃絶したと考えられる。

ＳＥ３　推定径１m前後で、SE１に似た砂質土で埋没する。わずかな陶器片を含むが、時期不詳である。

(5)　近代以降

調査区の北部と南部に、建物基礎の石を伴うピットが見られた。北部の一群は、石の使い方に規則性が一貫せず、建物の構造は復元できないが、P43～88が示すE80～85°Ｎ（Ｗ５～10°Ｎ）の軸に関わって１軒の建物が存在したと考えられる。南部では礫混り土を詰めて扁平な石を据えたピットが見られた。８Gr.でSK10を切って南北に並び、以西に配列を見せるが、調査区東壁でも同様なピットが見られる。攪乱等で失われた部分もあり、建物の全体は把握できない。礎石列は、Ｗ５°Ｎ前後の軸を持つ。この２軒の間を東西に区画する小路？もあったらしい。東壁断面にCo５を挟んで縁石状の石があり、舗装面の痕跡も見られた。幅２m程の両縁にはピット列が伴うらしく、下水管も埋設されていた。太平洋戦争中および戦後の米軍航空写真から、南北２軒の建物は戦後に建てられた住宅の基礎と考えられた。防空壕と考えられる大型土坑3基は、2軒の建物に先行するはずだが、道路（区画）との先後関係は不明である。



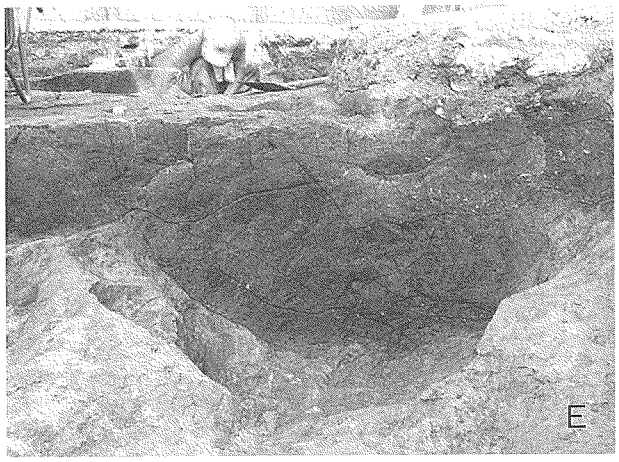


写真３　前半区

A　前半区全景を北東から見る、中央がSB１

B　前半区全景を南東から見る

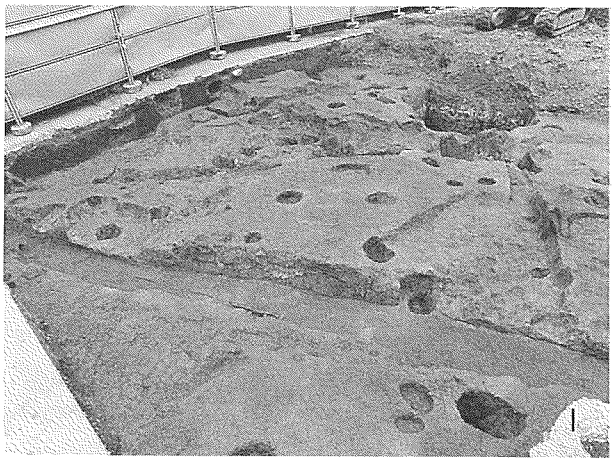
C　SB１を南西から見る（中央は防空壕１）

D　SB２竈の検出状況（Co３南下、南西から）

E　SK１の断面（南から）、右上が掘削前のSB２

F　SB１埋土須恵器出土状況（南東から）

G　作業風景、SB１付近を南西から見る



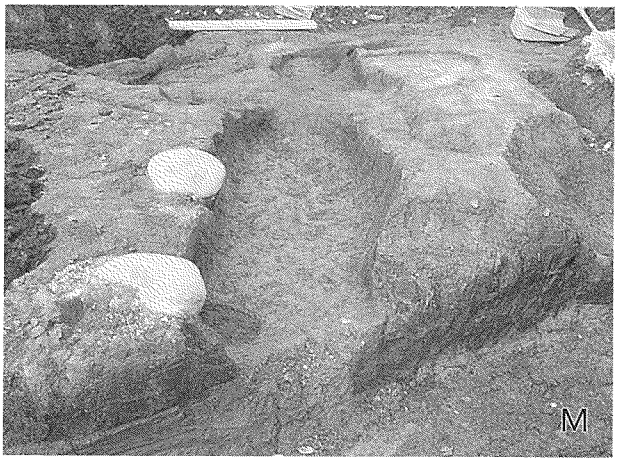


写真４　後半区

Ｈ　後半区を南西からみる

Ｉ　後半区を南東からみる

Ｊ　後半区を北東からみる

Ｋ　ＳＢ３（右）とＳＢ２（左）の土層断面（西から）

Ｌ　ＳＢ５の竈とその断面（南東から）

Ｍ　ＳＢ３の焼土とＳＥ３（後半区南東隅、西から）

Ｎ　ＳＫ10とこれを覆う礎石（南から）

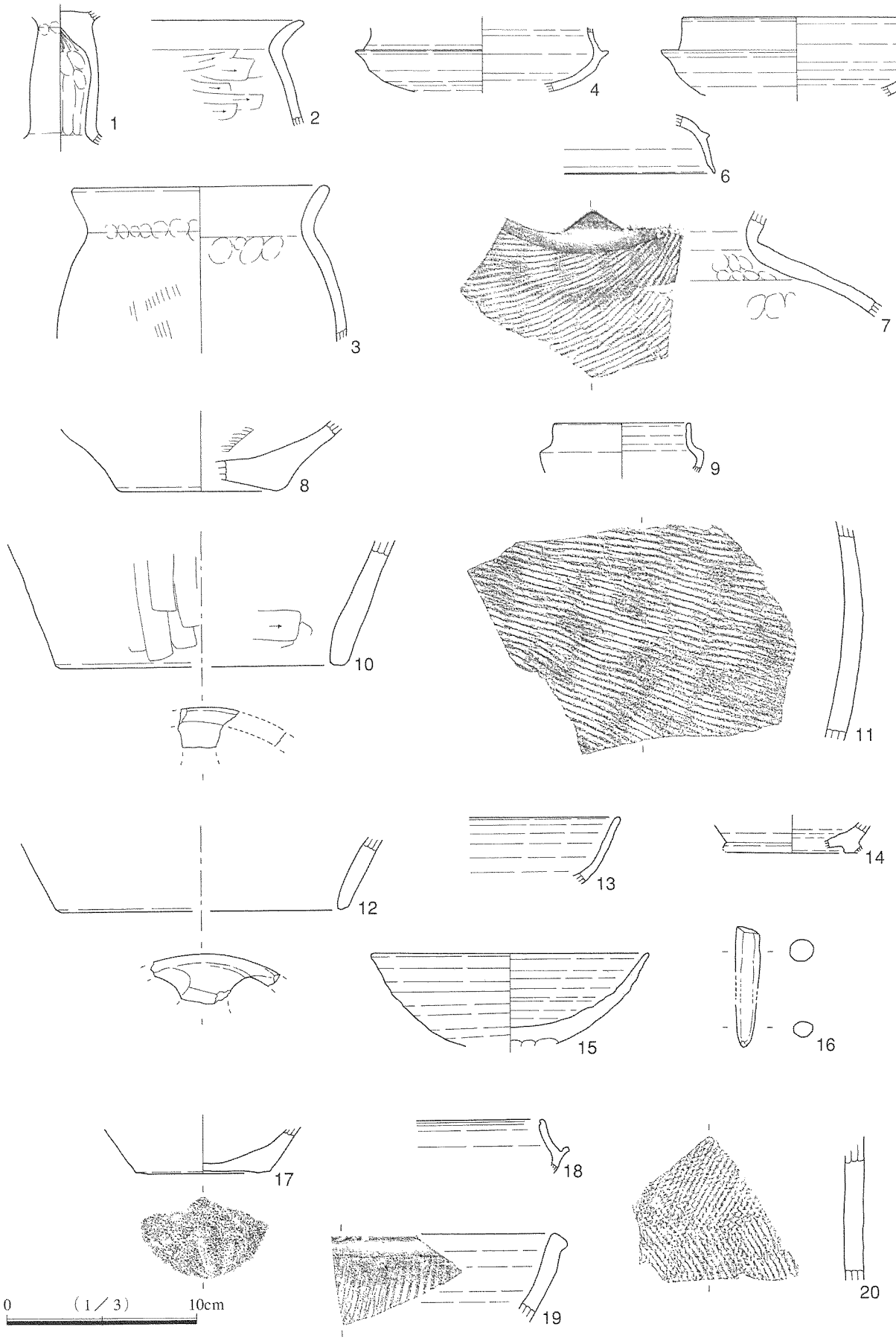


図7　出土遺物（1）

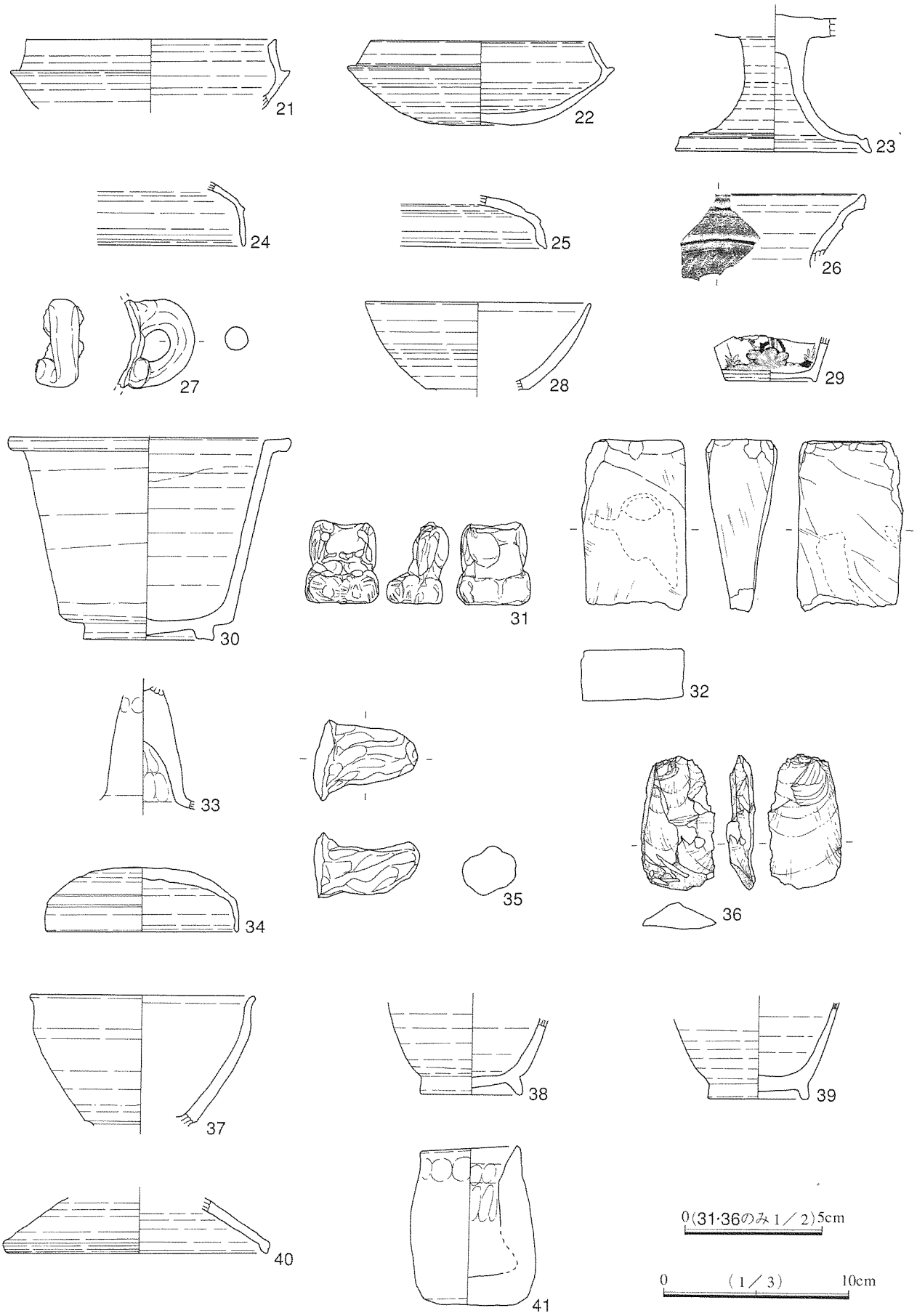
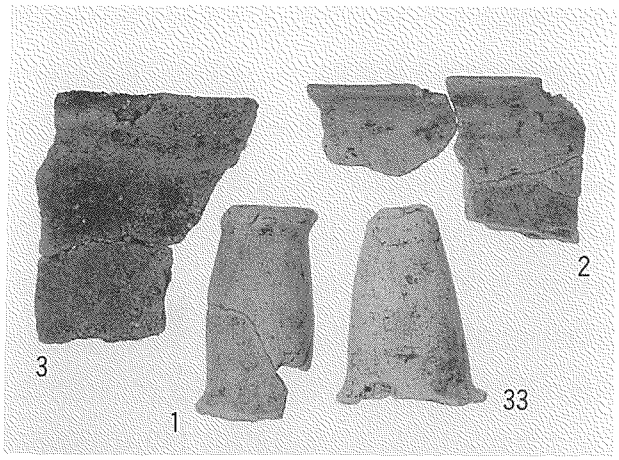
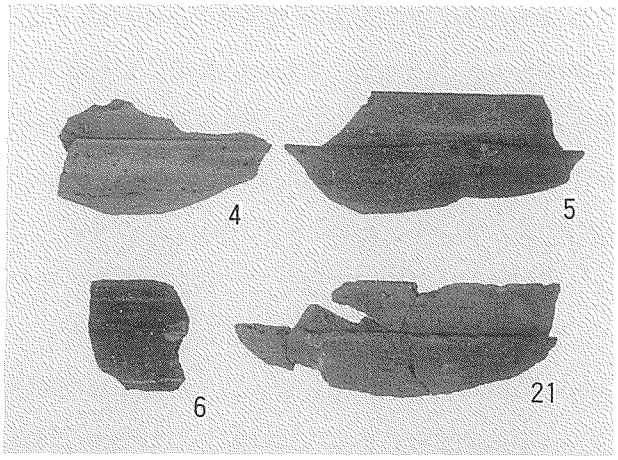

21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0(31·36のみ1／2)5cm
0 (1／3) 10cm

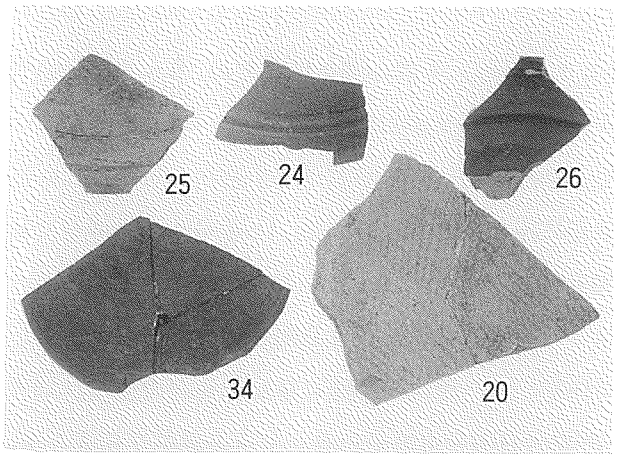
図8　出土遺物（2）

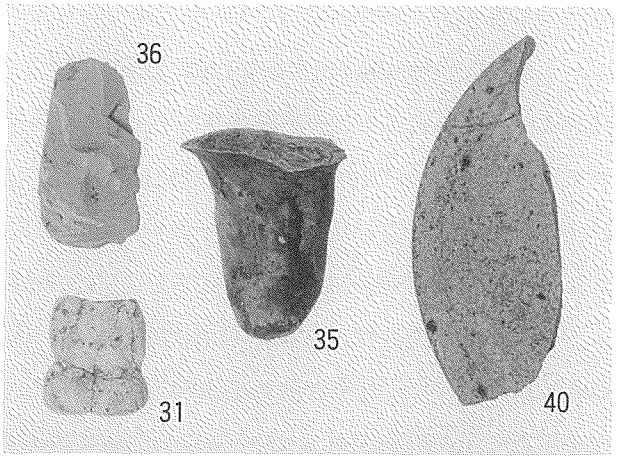
図	No.	名　称	出土位置	法　量	残存	観　察　内　容
7	1	土師器　高杯	SB 1 (北東部)		1／3	浅黄橙色，密だが砂粒含む，内面しぼり痕，指押え
	2	土師器　甕	SB 1 (中央部)		1／8	橙色，密だが砂粒少量含む，内面板ナデ，外面一部タテハケ
	3	土師器　甕	SB 1 (中央部)	口径(13.1)	1／6	外面にぶい橙色，内面黒褐色，粗，1～2mm大の小石多く含む，外面一部タテハケ残る
	4	須恵器　杯	SB 1 (中央部)		1／6	灰白色，密だが砂粒含む，内面回転ナデ，外面底部回転ヘラケズリ
	5	須恵器　杯	SK15	口径(11.9)	1／4	灰褐色，密，内面回転ナデ，外面底部回転ヘラケズリ
	6	須恵器　杯蓋	SB 1 (北東部)		1／10	灰色，密だが砂粒含む，回転ナデ
	7	須恵器　甕	SB 1 (北東部)		－	にぶい橙色，密だが砂粒含む，外面タタキ調整
	8	土師器　壺	SB 2 (南東部)	底径(8.0)	1／2	底部，橙色，内面ハケメ一部残る
	9	須恵器　短頸壺	SB 2 (東辺床直)	口径(7.0)	1／4	灰色，密，回転ナデ
	10	須恵器　甑	SB 2 (南東部)		1／8	灰色，密，外面ヘラケズリ
	11	須恵器　甕	SB 2 (SK10西の床直)		－	胴部片，灰色，密，外面タタキ調整
	12	土師器　甑	SB 3 (埋土中位)		－	浅黄橙色，やや粗
	13	須恵器　碗	SB 3 (埋土下位)		1／7	灰白色，緻密，回転ナデ
	14	須恵器　高台杯	SB 3 (埋土下位)	底径(5.8)	1／6	暗褐灰色，緻密，回転ナデ
	15	須恵器　高杯	SB 3 (上面)	口径14.6	1／1	にぶい黄橙色，密，回転ナデ，外面底部付近回転ケズリ，出土高8.90m
	16	製塩土器？	SB 3 (埋土下位)	残存長6.4	－	浅黄橙色，粗，小石砂粒多く含む
	17	土師器　甕	SB 4 竈(南北断面の土師器)	底径(5.8)	1／2	底部，にぶい赤褐色，やや粗，砂粒多く含む，底部に木の葉痕
	18	須恵器　杯	SB 4 (北東部，埋土中位)		1／8	灰白色，密，回転ナデ，口縁内側に沈線一条あり
	19	須恵器　鉢？	SB 4 (埋土中位)		－	灰白色，密，外面タタキ調整
	20	須恵器　甕？	SB 4 (竈上面)		－	灰白色，緻密，外面タタキ調整
8	21	須恵器　杯	SK 3 (アゼ以南)	口径(13.4)	1／4	灰色，粗，回転ナデ
	22	須恵器　杯	SK 3 (アゼ以南，SB1)	口径(11.8) 器高4.6	1／2	灰色，密，回転ナデ，外面底部ヘラケズリ，出土高8.80m
	23	須恵器　高杯	SK 3	底径(10.5)	1／2	灰色，密，回転ナデ，出土高8.90m
	24	須恵器　杯蓋	SK 4		1／8	灰色，密，回転ナデ，口縁内側に沈線一条あり
	25	須恵器　杯蓋	SK11南半		1／8	灰白色，密，回転ナデ
	26	須恵器　甕？	SK 6 B下半		1／8	口縁部，オリーブ黒色，緻密，外面櫛描波状文
	27	陶器　把手	SK 5	残存長6.4	－	把手部分，浅黄橙色，密，内面一部灰釉、外面灰釉
	28	陶器　碗	SK10(南部)	口径(12.2)	1／6	浅黄橙色，密，内外面灰釉
	29	磁器　蕎麦猪口	SK10(中央部)	高台径4.7	1／2	灰白色，緻密，染付，内外面透明釉，高台畳付露胎
	30	陶器　鉢	SK10(中央部)	口径15.0 器高11.0	1／1	灰白色，密，外面体部内面口縁部付近灰釉，高台周辺露胎，畳付に糸切り痕あり
	31	土人形	SK10(南部)		1／2	浅黄橙色，緻密，大黒天
	32	砥石	SK10(南部)	重さ260g	－	にぶい褐色，砂岩か？，二次的に被熱する
	33	土師器　高杯	P217		1／3	浅黄橙色，やや密，外面一部ミガキ調整，内面指押え
	34	須恵器　杯蓋	P232	口径(10.2) 器高3.5	1／3	灰赤色，緻密，外面に二条沈線あり
	35	須恵器　甑	P19	残存長5.4	－	把手部分，灰色，密，手づくね成形
	36	剥片	P30	残存長4.9 重さ12.2g	1／1	灰黄色，頁岩か流紋岩か？
	37	陶器　天目碗	P149	口径(12.0)	1／2	瀬戸・美濃製品，灰白色，密，内外面鉄釉，外面体部下半露胎
	38	陶器　小壷	P133上面	高台径5.4	1／2	瀬戸・美濃製品，にぶい黄橙色，やや粗，灰釉，高台周辺露胎
	39	陶器　小壷	SE 2	高台径5.4	1／2	瀬戸・美濃製品，灰白色，密，灰釉，高台周辺露胎，削り出し高台
	40	須恵器　蓋	5～7 Gr. 西壁際 黒or茶	口径(13.9)	1／4	灰白色，やや粗，回転ナデ
	41	焼塩壷	5～7 Gr. 西壁際 黒or茶	口径4.1 器高8.7	1／1	橙色，やや粗，器面は大半が細かく剥離

表２　出土遺物観察表









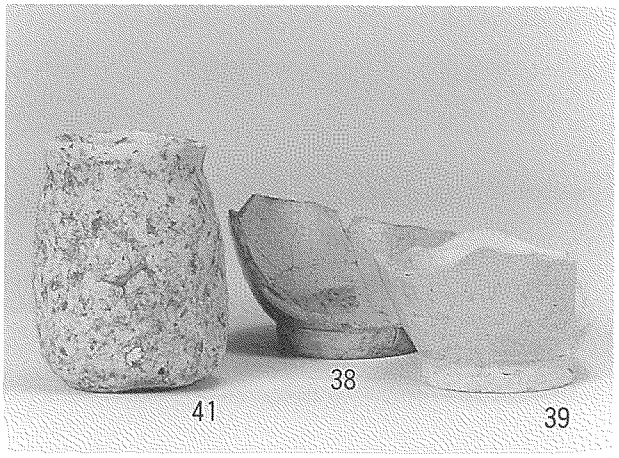


写真５　出土遺物（No.は図・観察表に共通）

4　まとめ

今回の調査地点は、従来の調査が遺跡周縁部を主としたのに対して、遺跡の中央部付近に位置する。狭小な調査面積であったが、多様な成果が得られた。以下、時代ごとにまとめる。

弥生時代以前の遺物は、わずかに認められたのみである。旧石器時代に遡る可能性のある剥片1点以外に確実なものは無く、弥生時代以前の土地利用は活発でなかったことがわかる。過去の調査と合わせて考えれば、弥生時代以前の遺跡形成は、堀川や旧紫川に近い台地縁辺付近に限られたという見通しを追認できた。遺跡内における微地形の検証は、［水野2000］等で試みられているが、より詳細な分析が求められるべきであろう。そうした作業の進展があれば、古墳時代以前の遺跡の構造に関する議論も、より深まるものと考える。

古墳時代の中頃になると、遺構形成が活発化する。初期須恵器は小片のみであるが、5世紀後半から住居が連続するようになり、今回の調査地点でも竪穴住居跡が各所で重複を見せている。多数の住居が、ある期間継続したことを示すものであろう。現状の理解では、SB1が5世紀末～6世紀前半、SB2が7世紀前半頃、SB3・5がSB2以前に位置づけることになる。出土遺物が少ないため、各住居の時期認定には疑問を残している。遺物のあり方からは、7世紀の内には居住様相が衰退した印象がある。古墳時代の遺物は、須恵器・土師器を主体とし、器形・器種の面からは特別な様相は見られない。住居も一般的な大きさで、他に特別な遺構も認められない。調査地点付近の古墳時代の様相は、東西に100～150m離れた先行調査地点の様相に共通している。これをもって台地面の全域に同じ様相を想定するのは無謀だが、旧紫川に面する遺跡南東部に古墳（4次調査）が築造された頃に、これを支えた大きな集落が存在したのは間違いないであろう。

こうした大規模集落は、7世紀以降に縮小していったようである。今回の調査地点では、7～8世紀の須恵器は少量見られるが、灰釉陶器は見られない。7世紀以降の確実な遺構は把握しておらず、居住域がいつまで継続したのかは不明である。9世紀以降は、土地利用が行われていたのかどうかもわからない。この様相は、中世にも続き、山茶碗など中世陶器も、小片が散漫に出土したのみである。1・2・13・6次調査で検出された戦国城館が営まれた時期についても、今回の調査地点では遺物をほとんど認めなかった。

こうした空白期と呼んで良い時期が続いた後、近世城下町遺構とこれに伴う遺物が残された。図9は、明治17年(1884)頃に測量された地籍図［名古屋市土木局1986］を、現代の地図に重ねたものである。調査地点周辺の現在の街区は、南北の通りの位置にのみ城下町期の名残を留めている。多少の誤差を無視して、今回の調査区を地籍図に写せば、明治時代の中頃には二筆の土地の南北方向の境界線付近にあたる。この明治の境界線は、調査区の中では痕跡を認めなかった。二筆の土地は、江戸時代には西側の中ノ町通に面した1軒の屋敷地であったことがわかる。屋敷地は、間口約21.6間（42.5m）(註1)、奥行約30.5間（60m）で、広さは約660坪（2,550㎡）である（図9の濃いアミの範囲）。調査位置は、屋敷の敷地の中では門口から見てやや奥にあたる。

数多く残る名古屋城下図のうち、調査地点を含む町割りは、ほとんどが中ノ町通沿いを11区画に描いている。この11区画は、明治の地籍図に明らかであり、これにより城下町絵図に見る居住者名を、現在の地図に対応させることができる。調査地点を含む屋敷地（以下、屋敷と記す）については、現時点で次のように把握された。

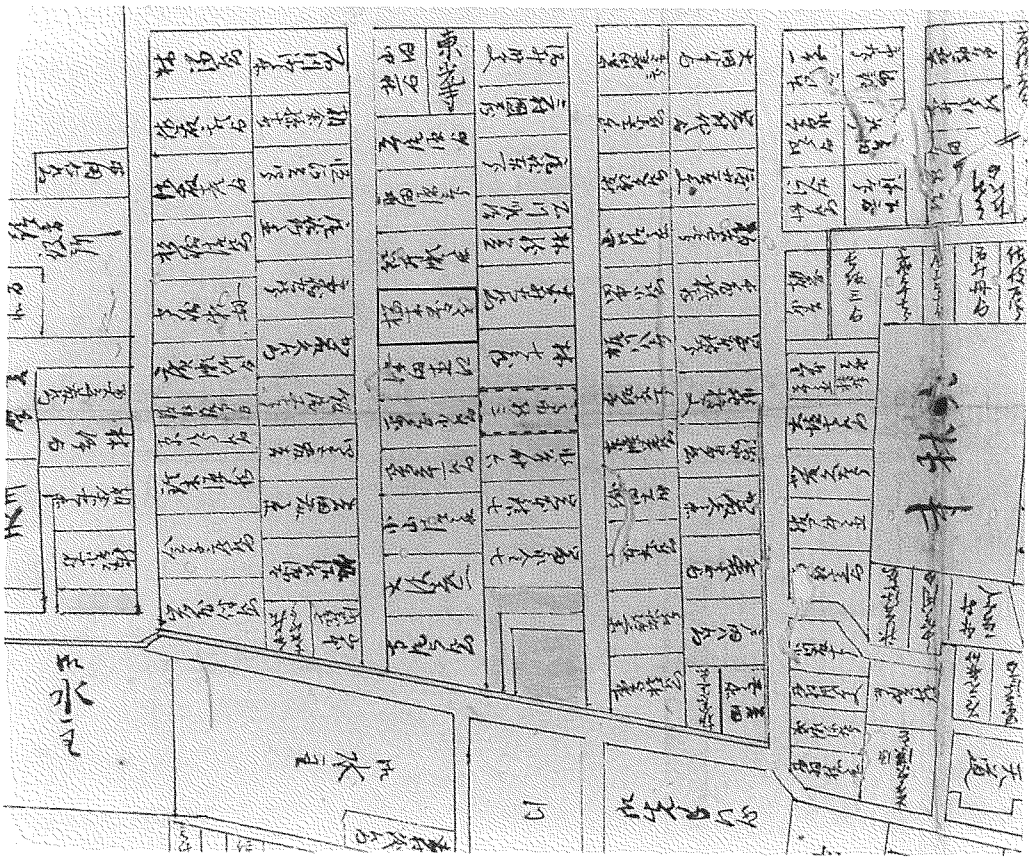


写真６
名古屋城下之図
（付言参照）

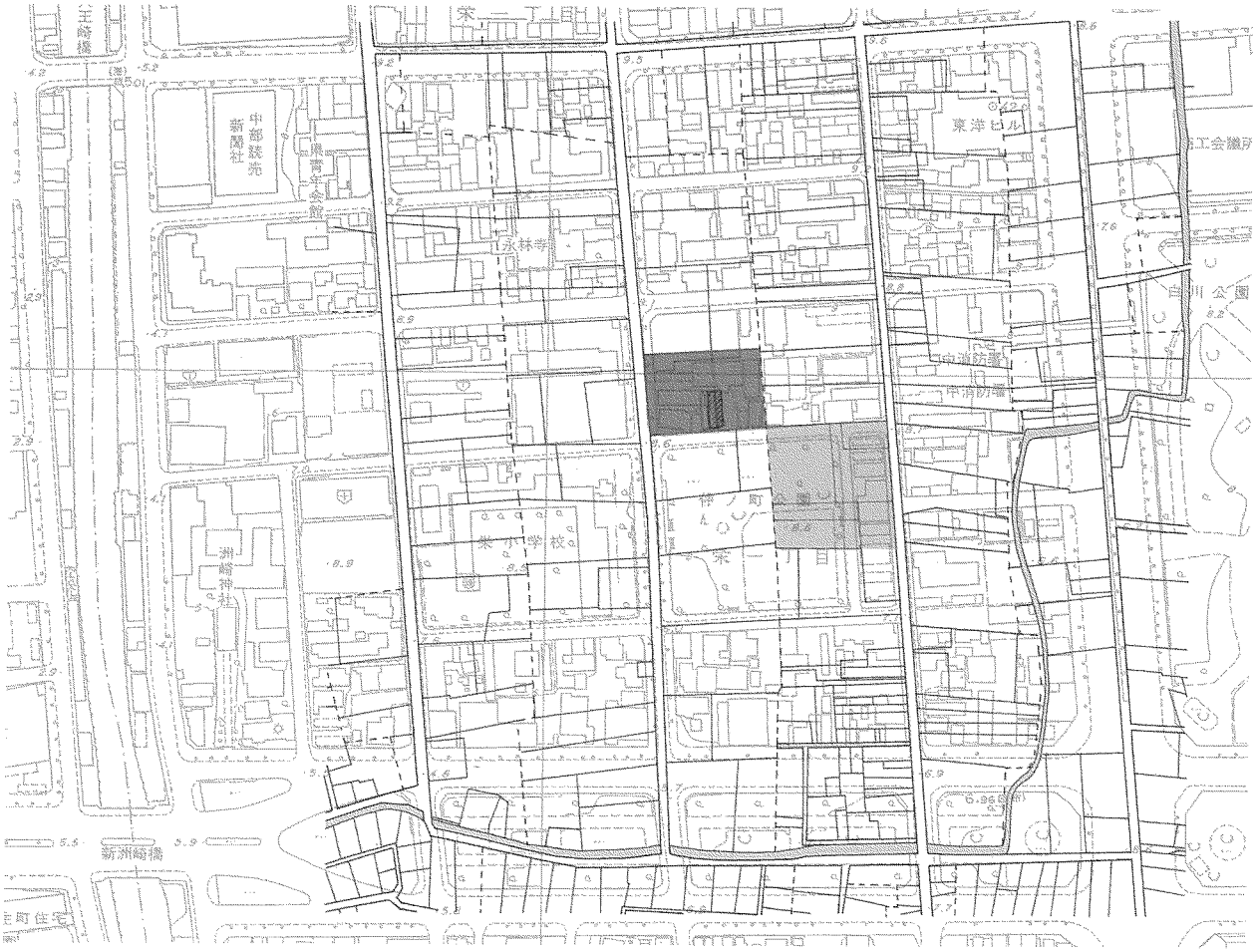


図９　明治時代の地籍図と現在の街区（１／4,000）

1714年（正徳4）頃成立[註2]の『尾府名古屋図』は、屋敷の主を「上野一之助」と記す。これは、『士林泝洄』に見える「上野資時（初、市之助）」を指すものと思われる。資時は、1704年（宝永元）に家督を継ぎ、1718年（享保３）に卒した。石高は400石で、寄合から御小姓を経て、亡くなる２年前に御目付となっている。『士林泝洄』には、上野家は資時の後二代が記されており、この後転居したものと思われる。

1731－33年（享保16－18）頃成立の『名古屋図』は、「桜木新右衛門」と記す。同じ名は、『藩士名寄』に見られるが、確認したのは1763年（宝暦13）以降の記載であり、同一人物かどうかはわからない。新右衛門は、1769年（明和６）まで岡本家の養子となっていたが、この岡本家は北隣の屋敷と思われる。

1770－77年（明和７－安永６）に成立し1783（天明３）頃まで訂正が続いた『尾州名古屋城下之図』は、「桜木助右衛門」と記す。同じ名は、『士林泝洄』に見える。1663（寛文３）卒の正種と、その二代後で1690（元禄３）から1707（宝永４）の記事がある某であり、地図とは別人と思われる。桜木家は、松平忠吉の時に仕えた「尾州衆」で、寛文３年頃は、250石取であった。

1804－1830年（文化元－天保元）頃成立の『名古屋城下之図』には、「桜木慶之進」の名が見える（写真６の実線囲）。『藩士名寄』にも同一人物と思われる名がある。この頃200石取の桜木家は、『藩士名寄』に明治の初めまで記録を残している。1869年（明治２）の『尾付全図』も「桜木助右衛門」と記す。

屋敷の主の石高は、確認できた記録を見る限り200～400石である。城下図を見ると、屋敷の南東には「猿猴庵」として知られる「高力種信」邸[註3]（写真６の破線囲、高力新三）がある。高力は、300石取りの尾張藩士であり、画家として多くの作品を残している［名古屋市博物館1986］。高力家の南隣は、本草家として有名な水谷豊文（200石）が居を構えていた。調査地周辺は、こうした数百石取の中級武士の屋敷が江戸時代を通じて続いていたのである。

今回の調査範囲には、江戸時代の顕著な遺構は３基の井戸とわずかな土坑のみであった。城下町期を通して安定して継続した武家屋敷の中で、この地点の利用状況も大きな変化がなかったと考えられる。ここでは武家屋敷の構造を含めた検討はできないが、狭い範囲とはいえ良好な屋敷内の調査成果は、貴重なデータとなるであろう。

【註】

(1) 名古屋城下で用いられた京間（１間＝６尺５寸＝1.97m）で換算した。［水野1985］

(2) 城下町絵図の年代は、［山本1994］および山本祐子氏のご教示による。

(3) 高力家のあった御園通の西側は、明治17年の地籍図ではすでに分筆が著しく、城下町図の屋敷地を正確に比定できない。ただし、高力家に当たる屋敷地は、確認した城下図のすべてで調査地点を含む屋敷地より南に描かれており、図９に薄いアミで示した範囲内に収まるものと思われる。現在、高力邸跡を示す看板が立てられている地点は、この推定地より北へ50～100m程離れることになる。

【参考文献】

名古屋市土木局 編　1986 『愛知県名古屋区地籍全図(復刻版)』 名古屋市土木局

名古屋市博物館　1986 『猿猴庵とその時代』

水野耕嗣　1985 「武家地とその建築」『日本名城集成 名古屋城』 小学館

水野裕之　2000 「竪三蔵通遺跡の石器と包含層の形成－研究ノートとして－」『研究紀要』2　名古屋市見晴台考古資料館

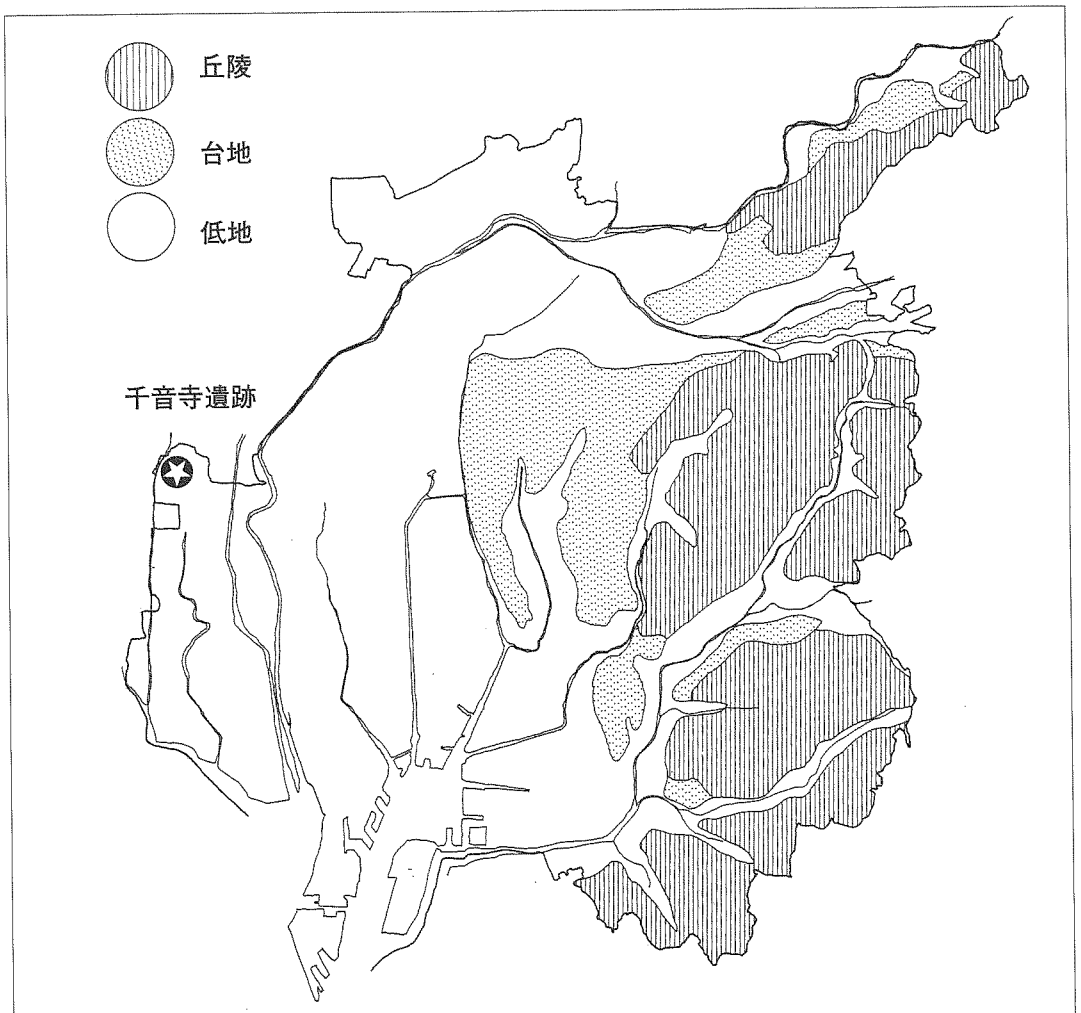
山本祐子　1994 「名古屋城下図の年代比定と編年について」『研究紀要』第17巻　名古屋市博物館

この他、名古屋市蓬左文庫発行の『名古屋叢書』『古地図複製』 等を参照した。

千音寺遺跡第4次発掘調査報告

もくじ

1、位置と環境……75頁
2、これまでの調査……76頁
3、調査の成果……76頁
　3－1　調査の経過
　3－2　基本層序
　3－3　遺構と遺物
4、まとめ……86頁



名古屋の地形と千音寺遺跡の位置

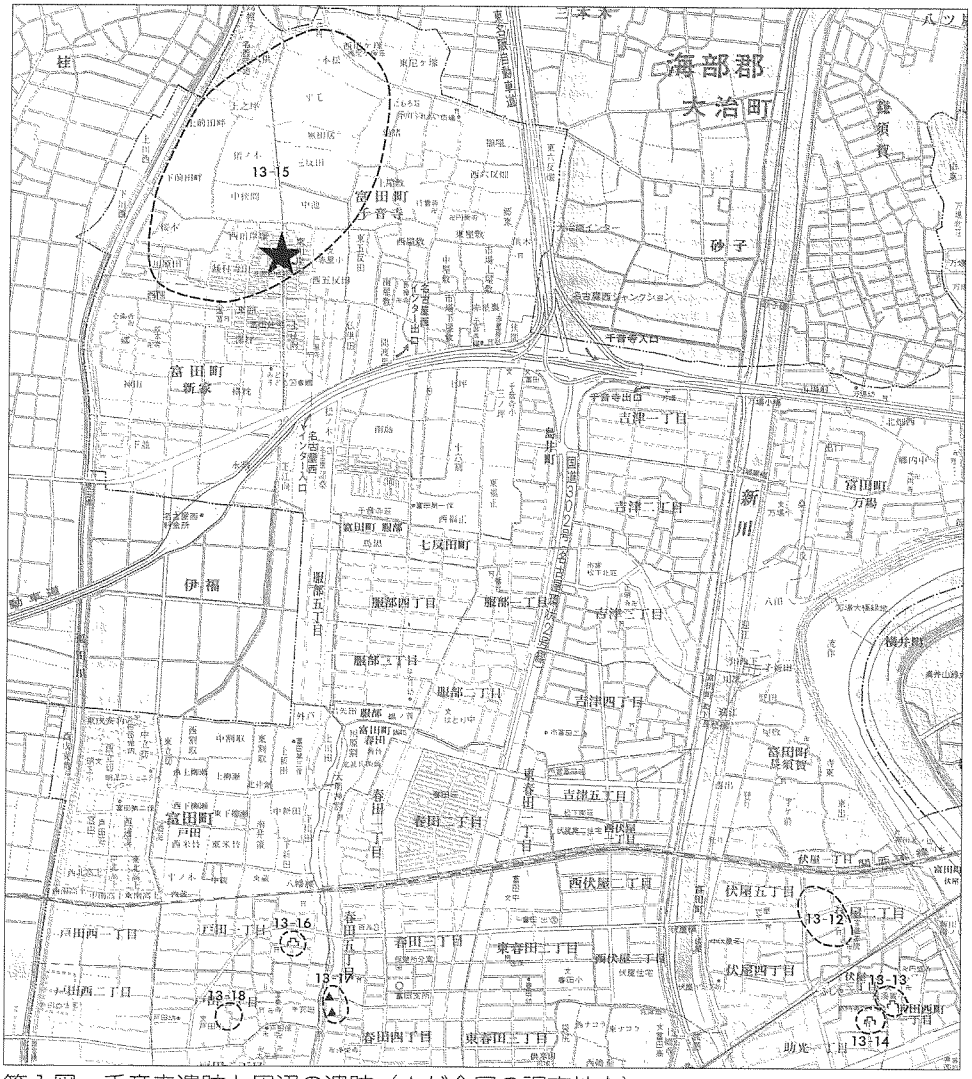
1、位置と環境

名古屋市域の地形は、市域東部の丘陵部、中央の台地部、中央の台地の北側及び西側に広がる低地部に大きく区分することができる。千音寺遺跡は、名古屋市域の北西端の低地部内に位置し、庄内川が形成した三角州及び自然堤防上に立地している。庄内川は、現在千音寺遺跡から2kmほど東を南流しているが、古代から中世にはその分流が遺跡の付近を流れていたものと推測されている。

「千音寺」の地名は、嘉暦二年（1327）頃に作成された、有名な『尾張国冨田荘絵図』に見られる。冨田荘の位置は、現在の字界などから復元が試みられているが［野口・山田2000］、「千音寺」と記された一帯は、条里や建物が描かれておらず、冨田荘の外にあたるとされている。

千音寺遺跡の周辺には周知の遺跡はないが、南に2kmほど離れた地点に戸田A遺跡、戸田B遺跡などが知られる。これらの遺跡についてはあまり多くはわかっていないが、戸田A遺跡では室町時代の遺物が採集されている。戸田B遺跡では、2001年度に実施した立会調査で山茶碗等の中世以降の遺物を含む包含層が確認された。この遺跡ではかつて平安時代の遺物も採集されており、千音寺遺跡より南の遺跡ではそれが現在のところ最古の遺物ということになる。

一方、千音寺遺跡の北4～5kmの地点には、阿弥陀寺遺跡、森南遺跡、土田遺跡などがあり、これらの遺跡では弥生時代の遺構、遺物が豊富に見つかっている。

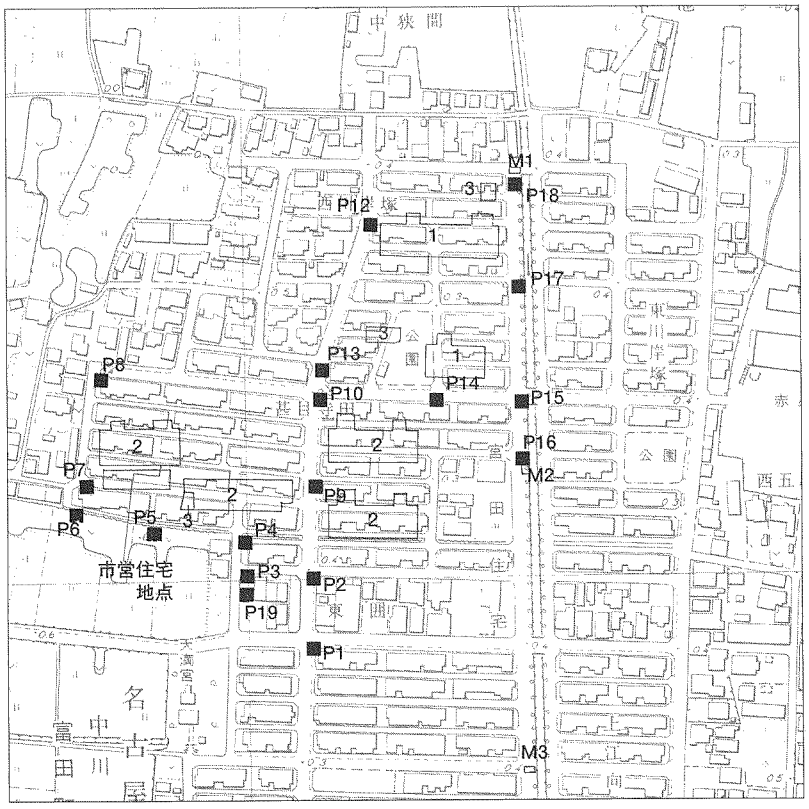


13－15　千音寺遺跡
13－12　伏屋遺跡
13－13　前田城跡
13－14　助光城跡
13－16　戸田城跡
13－17　戸田A遺跡
13－18　戸田B遺跡

第1図　千音寺遺跡と周辺の遺跡（★が今回の調査地点）

2、これまでの調査

千音寺遺跡では、これまで市営住宅の建て替えに伴って名古屋市教育委員会が３回の調査を行ったほか、同じ住宅建築工事に関連して１度、下水道築造に伴って１度、合計５回の調査が行われている。比較的広い面積で調査が行われた市教委１・２次調査地点では、12～13世紀頃の屋敷地（Ａ区及びＥ区）が検出されている。遺構としては、区画溝、建物址、井戸等が検出されている。また、14世紀代の土坑（Ｅ区）などの遺構も検出されている。これらの遺構の内、12世紀代の屋敷地については、条里地割に近い方向を示しているが、13世紀以降のものは、自然条件等の他の制約を受けたものとされている。また、2000年度に行われた下水道工事に伴う発掘調査は、今回の調査区の内の幾つかと近接しているものがあるが、遺構は全く検出されておらず、わずかに須恵器、山茶碗などが出土しているのみである。



Ｐ１～Ｐ19: 今回の調査地点（■の大きさは実際の大きさを表さない）
１～３: それぞれ第１～３次調査地点
Ｍ１～Ｍ３: 下水道工事調査地点

第２図　これまでの調査地点と今回の調査地点

今回の調査は、過去に調査が行われた市営住宅の周辺道路上で行われたものであり、これまでの調査と関連した遺構、遺物が検出されることが予想された。

3、 調査の成果

３－１　調査の経過

今回の発掘調査は、下水道の築造に伴って実施した。下水道築造工事は、遺跡範囲内ではマンホール18とそれをつなぐ管路が計画されていた。発掘調査は、まずマンホール部分について実施し、その結果によって管路部分の取り扱いを決めることとした。

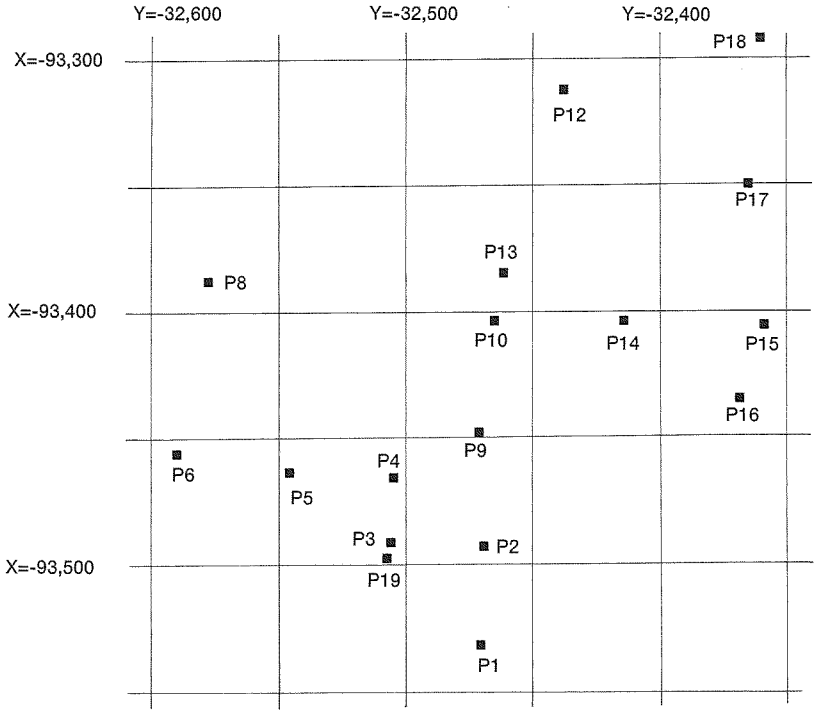
各調査地点（マンホール部分、第２・３図）では、上位の表土及び盛土を機械掘削し、それ以下は人力により掘削した。基本的には、遺物を含んでいないと判断した砂層まで掘削を行ったが、調査区が狭いためあまり深くまで掘削することができなかった上に、湧水にも悩まされ、確実に遺物の出土しなくなる層まで掘り下げられなかった地点や遺構の検出作業すらできなかった地点も多い。掘削が終了した時点で、写真撮影と平面、断面の実測図の作成を行った。

また、マンホール築造予定場所の内の一つ（Ｐ７）では、調査時点で使用中の水路があり、調査を実施することができなかった。また、Ｐ11は、過去に工事が行われた範囲内に位置し、かく乱を受けているこ

とが明らかであったので調査対象としなかった。調査は、1日にマンホール2個ずつのペースで進み、約2週間で終了した。

管路部分については、掘削する幅や深さ等の点やマンホール部分での状況などから考えて、立会調査を実施することとし、発掘調査の担当者である村木と野澤が立会調査を実施した。

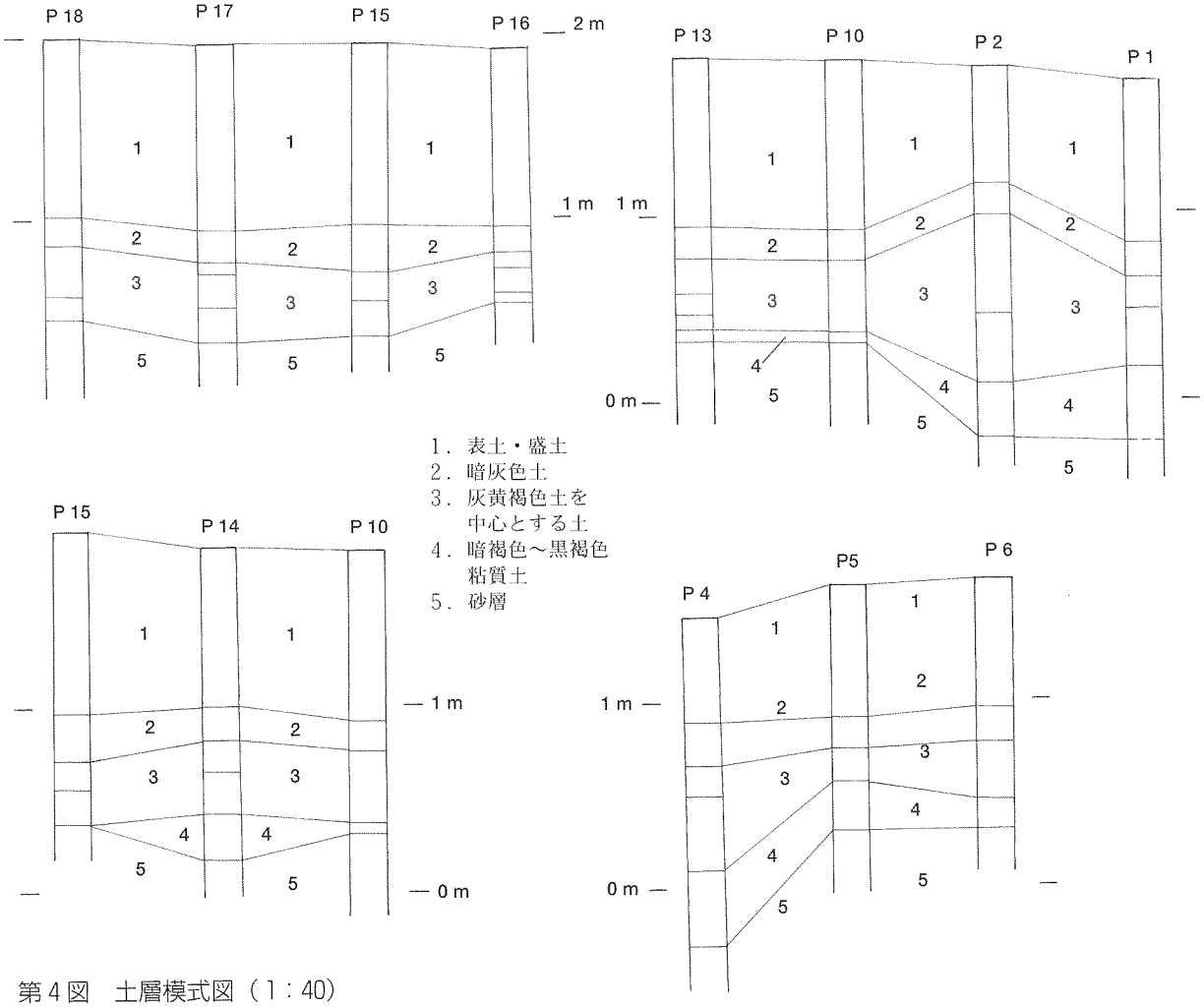
なお、各調査地点はマンホール築造工事に伴う名称をそのまま用い、P1からP19として報告する。この内、P11は、前述の通り調査を行わなかった。また、P7は、管路部分と同時に立会調査を実施することにした。



第3図　調査地点位置（1：3000　■の大きさは実際とは異なる）

3－2　基本層序（第4図）

調査区の層序は、壁面を観察することによって行った。基本的な層序は何れの地点でもほぼ同様で、1mほどの盛土（表土）の下位に、近現代の水田に伴うものと思われる暗灰色土が堆積している。その下位には、灰黄褐色の粘質土が堆積している。この灰黄褐色土は、黄色が強い部分のほか、灰色から淡青灰色を呈する部分が見られる。境界があいまいで、明確には区別しにくいが、この灰黄褐色土は分層が可能である。また、この層からはもっとも多くの遺物が出土した。第1次、2次調査では、この土の下面で遺構が検出されており、今回の調査でもこの面で遺構を探したが見出せなかった。今回の調査範囲の東端では、この下位はすぐに砂層となるが、西半では、砂層の上位に暗褐色ないしは黒褐色の粘質土が堆積している部分が多い。この砂層の上面でも遺構を探す作業を行ったが、湧水することもあって、ほとんど遺構を見つけることはできなかった。なお、表土、暗灰色土についてはすべての調査地点で共通であるため、各調査地点についての記述では省略する。



第４図　土層模式図（１：40）

３－３　遺構と遺物

各調査地点の平面図及び断面模式図を示した。土の堆積状況については、調査区の壁で検討したが、ほぼ同様な土が水平に堆積している状況であったため、任意の地点での模式図を作成するに留めた。

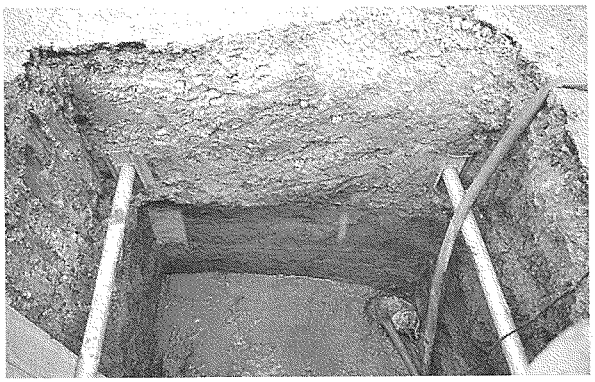
遺構については、調査区が狭い上に、前述の通り湧水のため、ほとんど確認できなかった。

なお、記述はマンホールの番号順ではなく、東方の調査区から西方の調査区へという順序で行う。

Ｐ18（第５図）

今回の調査区の北東端に位置する。2000年度下水道調査のＭ３地点に近接している。調査区の西側半分がかく乱を受けていた。この地点では、暗灰色土の下位に灰色の砂質土が堆積し、その下位に灰黄褐色土が堆積していた。遺構は検出されなかった。

遺物は、灰色砂質土とその下位の灰黄褐色土から山茶碗が２点出土した（第22図１・２）。２点と

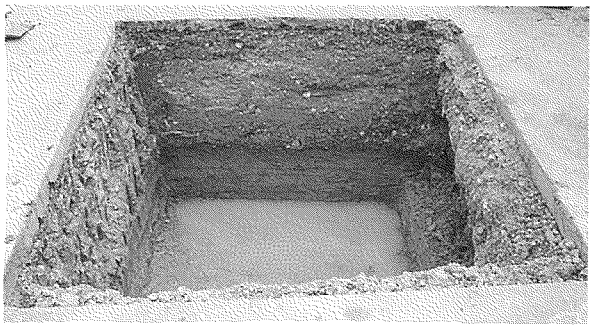


P18

も残存度は図の１／5程度であり、底径や傾きなどは誤差が大きい。１は比較的高い高台がつく。2の高台は低い。小片のため比定が難しいが、斎藤氏の編年では第Ⅶ期第３型式のものに近く、12世紀後葉から13世紀初頭の年代が与えられよう。

P17（第６図）

2000年度下水道調査のＭ２地点に近接している。この地点では、灰黄褐色土は薄く、その下位に灰色、灰黄褐色の砂質土が堆積していた。Ｍ２地点では遺構は検出されていないが、本調査地点でも遺構は検出されなかった。この調査区では図化できる遺物は出土しなかった。

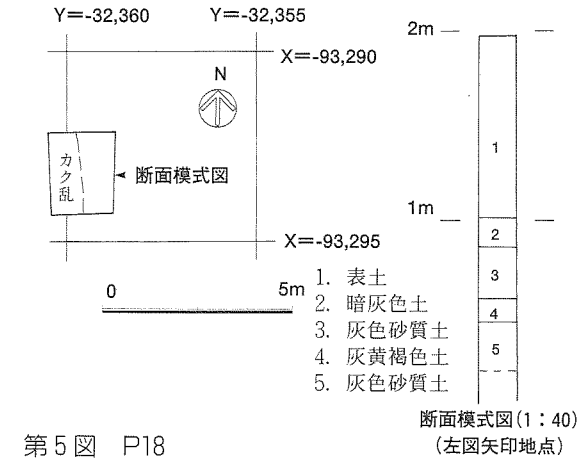


P17

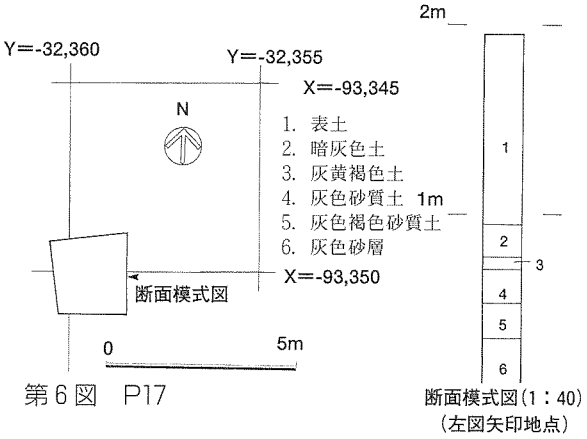
P15（第７図）

調査範囲の東端の道路の調査区の中央付近の調査区である。暗灰色土の下位にはやや暗い色調の灰黄褐色土が堆積し、その下位には灰色粘質土が堆積していた。その下位は地山である灰色の砂層であった。

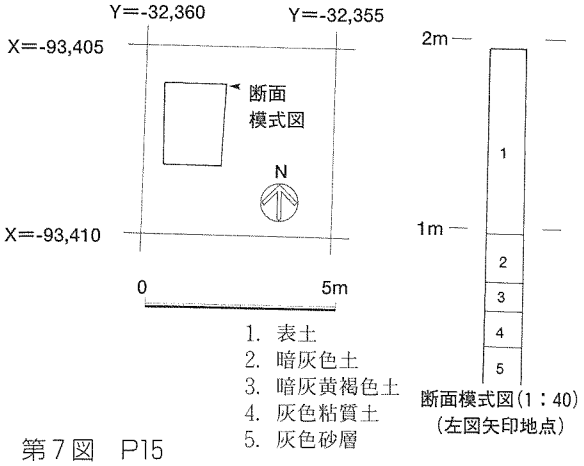
P15



第５図　P18



第６図　P17



第７図　P15

P16

P16（第８図）

調査を実施した東端の道路の調査区では最南端にあたる。暗灰色土の下位には、灰黄褐色土が堆積し、その下位には灰色砂質土、そして灰黄褐色土が堆積している。これらは、他の調査区では灰黄褐色土として一括しているケースもあるが、ここでは灰色砂質土が比較的厚く堆積していたので分層した。この調査区でも遺構は検出されなかった。

P14（第９図）

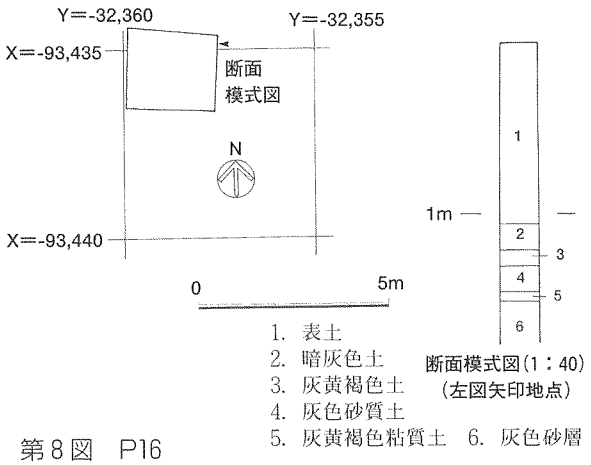
第１次調査のＢ区の南20mほどの地点である。暗灰色土と灰黄褐色土の間に灰色の粘質土が堆積している。また、地山である砂層と灰黄褐色土の間には灰褐色の粘質土が堆積していた。

第１次調査のＢ区では、西半を中心に、12世紀代の屋敷地と思われる遺構が検出され、遺物も比較的多く出土している。これらの遺構群は南へは続いていないと推測されているが、この調査区では遺構や図化できる遺物はみられず、その推測と矛盾しない。

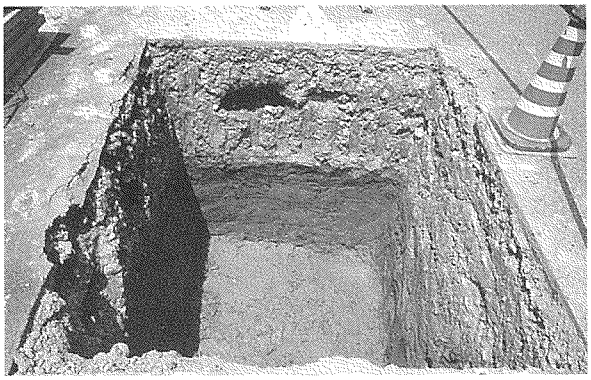
P12（第10図）

灰黄褐色土の下位には、灰褐色の砂質土が堆積していた。その面で、調査区の北東端でピットが検出された。直径30cmほどで、深さは40cm程度である。暗褐色粘質土を埋土としている。このピットからの遺物はなく時期は不明である。

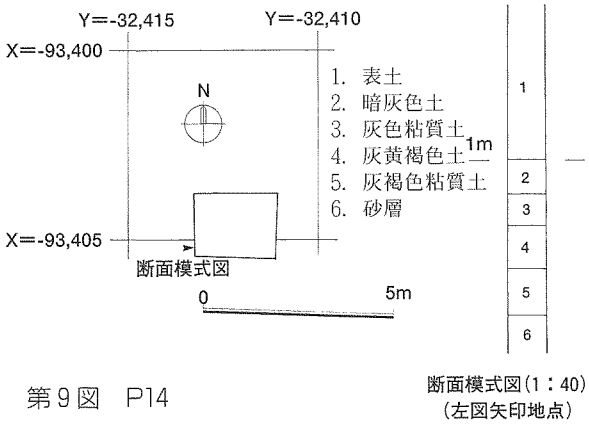
この調査地点は、今回の調査地点中では遺物の量がもっとも多く、図化できたものだけで山茶碗が４点（第22図３～６）出土している。いずれも灰黄褐色土からの出土である。第Ⅶ期第３型式に比定できよう。



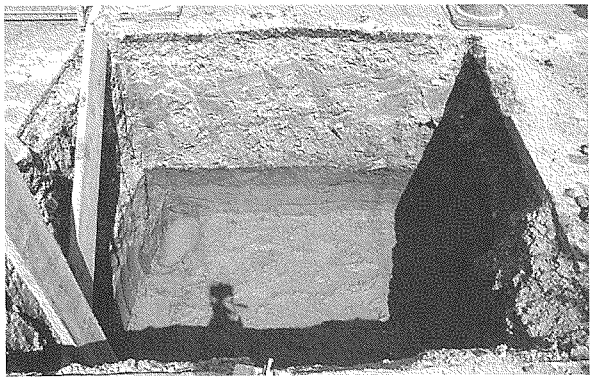
第８図　P16



P14



第９図　P14



P12

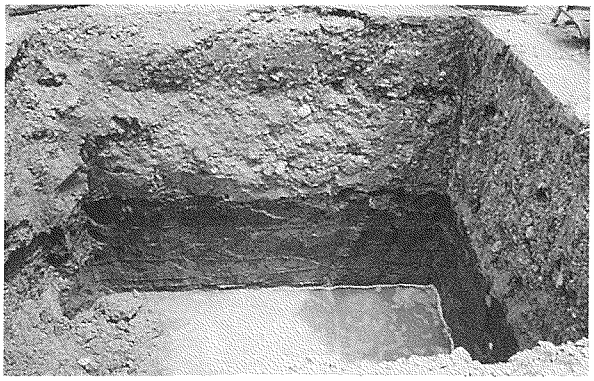
P 13（第11図）

P10の20mほど北にあたる。暗灰色土の下位には、淡青灰色土が堆積している。その下位には、灰黄褐色土が薄く堆積し、その下位には淡青灰色土が堆積している。更に、黒褐色の粘質土が薄く堆積し、その下位には地山である暗灰色の砂層が見られる。遺構は認められず、図化できるような遺物もない。

P13

P 10（第12図）

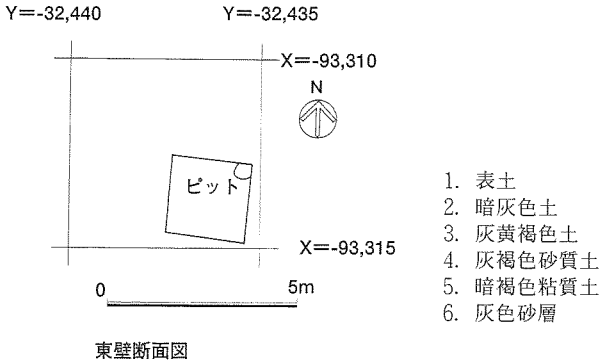
第２次調査のＣ区のすぐ北西にあたる。Ｃ区は、遺構、遺物とも少ないことが報告されているが、この調査区でも、遺構、遺物は検出されなかった。灰黄褐色土と暗灰褐色の砂層との間には薄く黒褐色の粘質土が堆積していた。

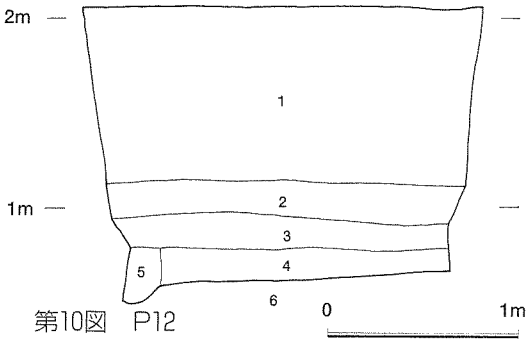


P10

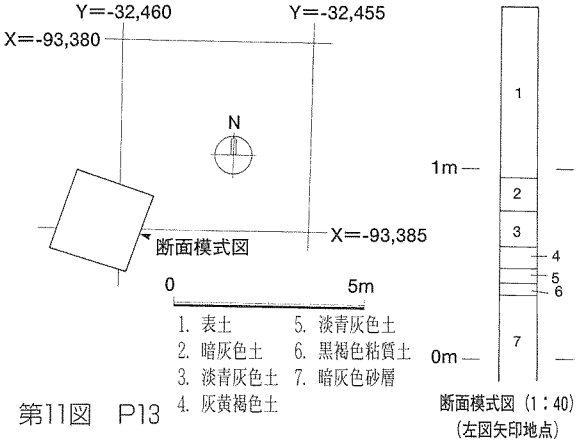
P 9（第13図）

P10およびＰ２の間の地点にあたるが、座標を測定する際に、データ入力に誤りがあったため、平面図を示すことができない。位置としては、Ｘ

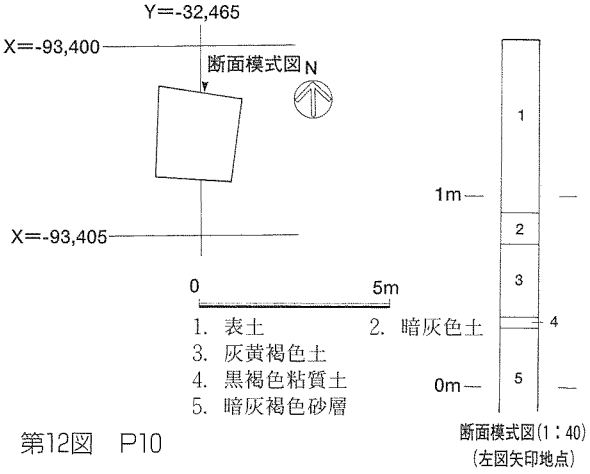




第10図　P12



第11図　P13

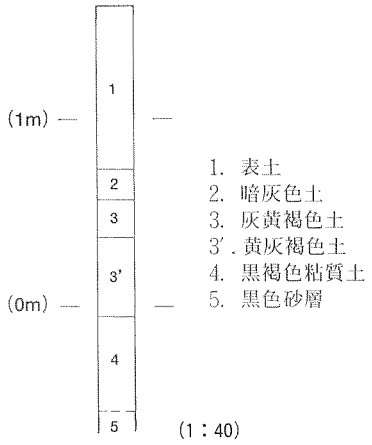


第12図　P10

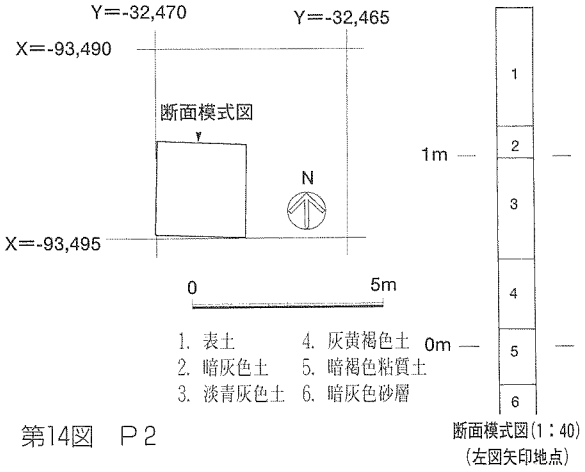
＝－93449.7679、Y＝－32467.0613という座標を持つ点を内部に含む一辺２mの方形の調査区である。高さについても、データの誤りの原因がわからないため、水準の値にはいくらかの誤差があるものと思われるが、地表からの堆積状況の目安として図を示した。

遺構および遺物は検出されなかった。

P９



第13図　Ｐ９



第14図　Ｐ２

Ｐ２（第14図）

中央の道路の南よりの地点である。暗灰色の下位には、灰黄褐色土の上に、淡青灰色土が極めて厚く堆積していた。灰黄褐色土と地山である砂層の間には暗褐色の粘質土が堆積していた。遺構は検出できなかった。遺物は、淡青灰色土から山茶碗が１点（第22図７）出土した。図化部の1／5程度の残存状況であり、底径などは不正確である。高台もほぼ剥離しており、図は推定である。時期の比定は困難である。

Ｐ２

Ｐ１（第15図）

今回の調査区の中では最南端にあたる。暗灰色土の下位には、灰黄褐色土が堆積し、その下位には灰褐色の砂質土が比較的厚く堆積していた。更にその下位には、黒褐色土の粘質土が厚く堆積していた。この層の掘削中に水が湧きだしたため、手掘りは断念し、砂層を確認するため、機械で深掘り、黒褐色の砂層を確認した。黒褐色の粘質土と砂質土の明確な境界は確認できず、おおよその位置を破線で示した。

Ｐ１

Ｐ４（第16図）

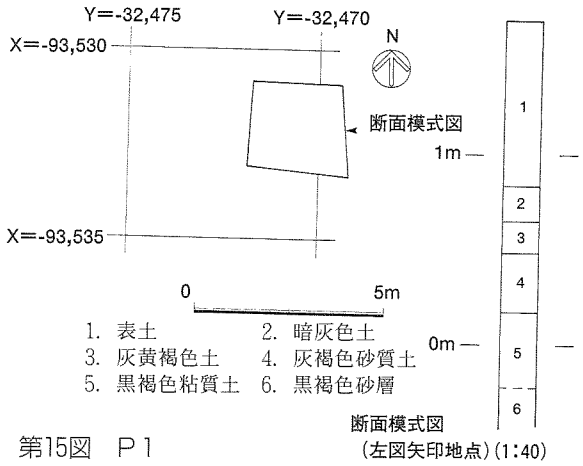
第２次調査Ｆ区の南20mの位置にあたる。Ｆ地点では、水田跡とされる方形状遺構が検出されているが、遺構の密度は低いとされている。この地点では、灰黄褐色土の下位には青灰色粘質土が堆積しているが、第２次調査ではこの層の上面で遺構が検出されている。この層では遺構が検出できなかった。その下位には黒灰色の粘質土が30cmほどの厚さで堆積していた。

この調査区でも遺構は検出できなかった。遺物も図化できるものはなかった。

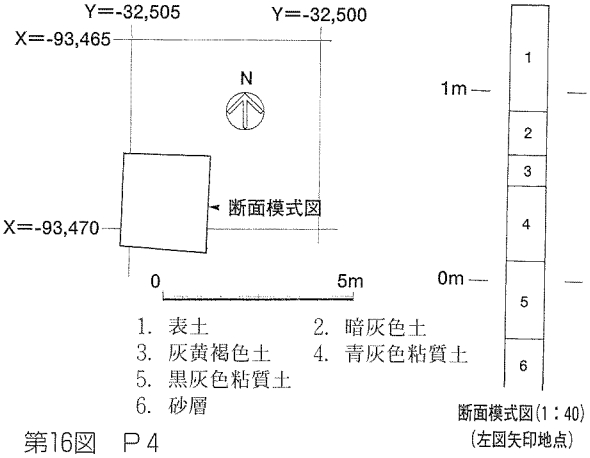
Ｐ４

Ｐ３（第17図）

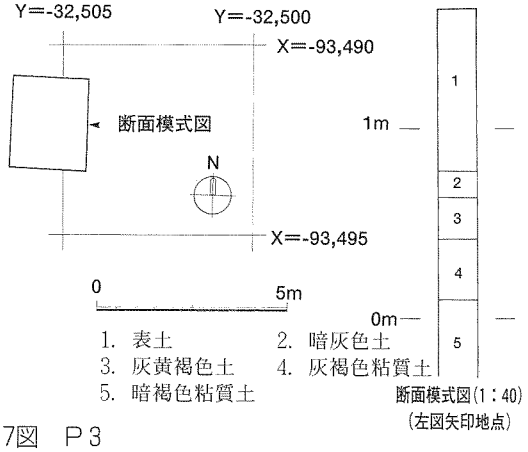
この地点では、灰黄褐色土の下位に灰褐色粘質土が堆積し、その下に暗褐色粘質土が厚く堆積していた。この層の掘削の途中で湧水があり、この層を掘り上げることはできず、砂層まで達しなかった。遺構は検出されなかった。



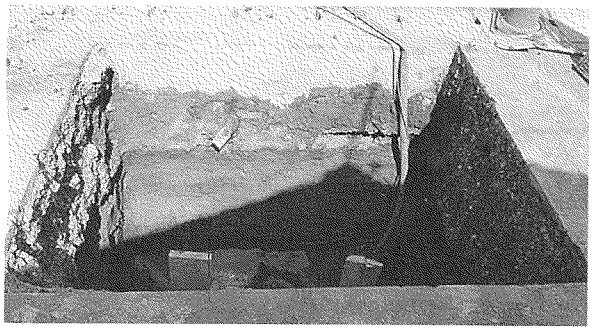
第15図　Ｐ１



第16図　Ｐ４



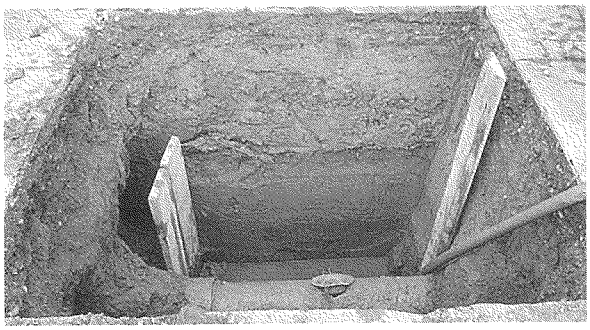
第17図　Ｐ３



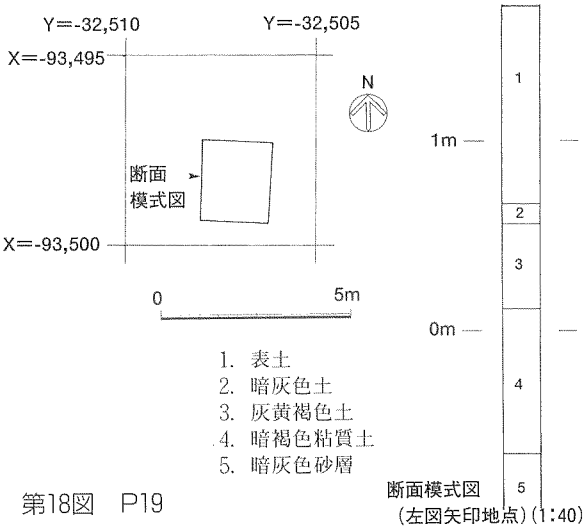
Ｐ３

P19（第18図）

Ｐ３地点のすぐ南にあたる。灰黄褐色土の下位には、すぐ暗褐色粘質土が厚く堆積しており、灰褐色粘質土は見られなかった。その下位の砂層は、暗灰褐色を呈していた。遺構は検出されなかった。



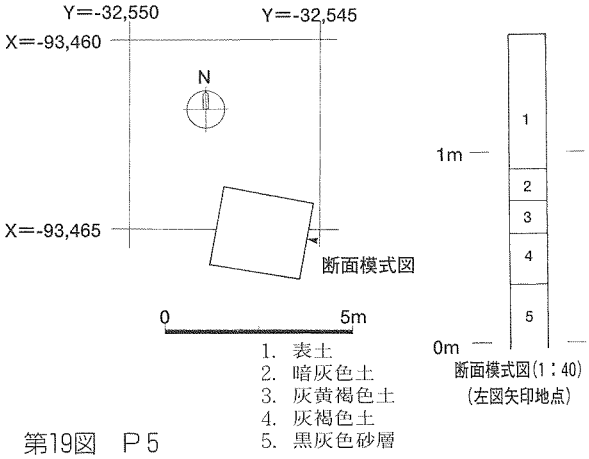
P19



第18図　P19

P５（第19図）

Ｐ４から40mほど西の地点である。この地点では、黄褐色土の下位に青灰色土はなく、灰褐色土が堆積し、その下位はすぐに黒灰色を呈する砂層であった。この調査区でも遺構は検出されなかった。遺物も図化できるものは出土しなかった。

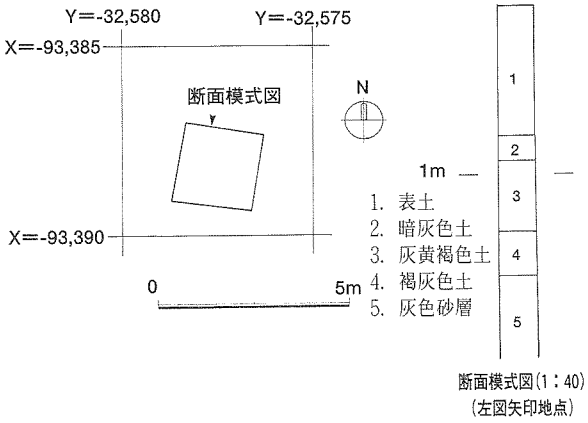


第19図　P５

P５

P８（第20図）

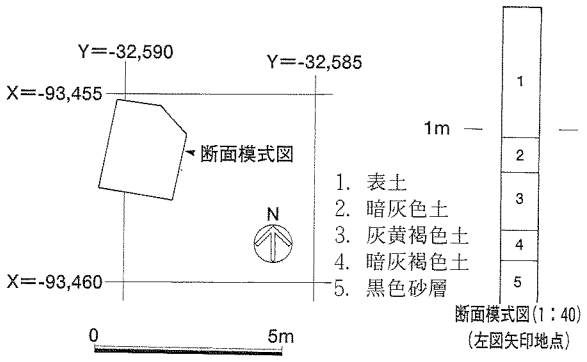
今回調査したうちでは北西端にあたる調査地点である。灰黄褐色土の下位には褐灰色土が堆積しており、その下位は灰色の砂層であった。遺構は検出できなかった。



第20図　P８

P８

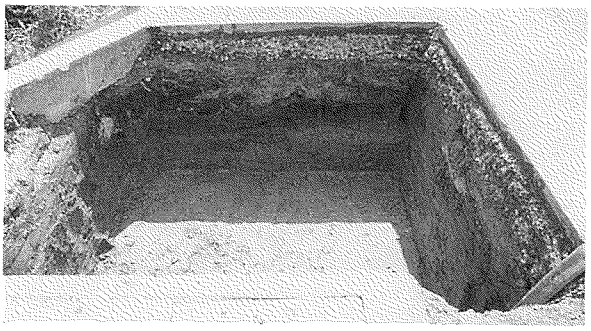
遺物は、灰黄褐色土を中心に、山茶碗、土師質の羽釜の小片が出土した（第22図８～10）。山茶碗は２点ある。８は、図化部の1／5程が残っている。やや高い高台にはモミガラ痕が残る。９は、1／3程が残存する。低い高台が貼りつけられている。羽釜は、つばの部分の小片である。山茶碗は、第Ⅶ期第３型式のものに類似している。



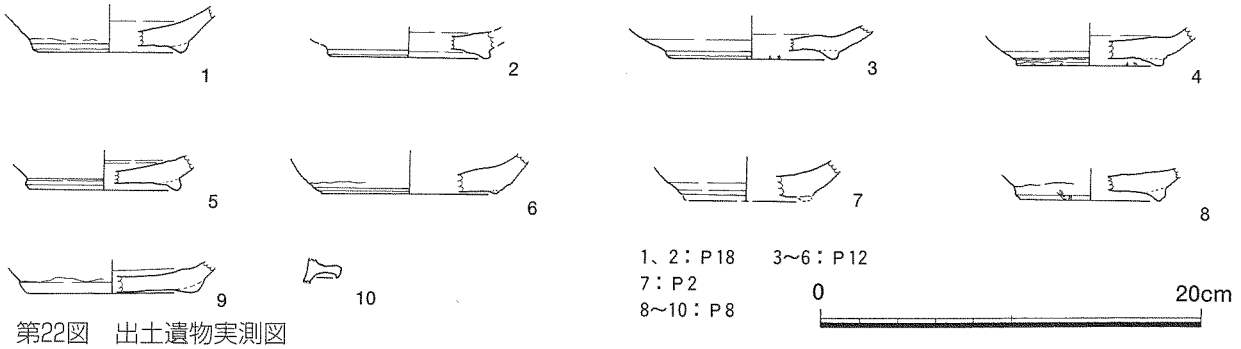
第21図　Ｐ６

Ｐ６（第21図）

今回の調査地点ではもっとも西側に位置する。灰黄褐色土の下には暗灰褐色土が堆積し、その下位の砂層は黒色を呈していた。遺構は検出されなかった。図化できるような遺物は出土しなかった。



Ｐ６



第22図　出土遺物実測図

立会調査の成果

立会調査においても、調査区が狭く、湧水もあったため遺構は確認することはできなかった。工事による掘削中に出土する遺物を採集し、必要に応じて断面の写真などの記録を作成した。

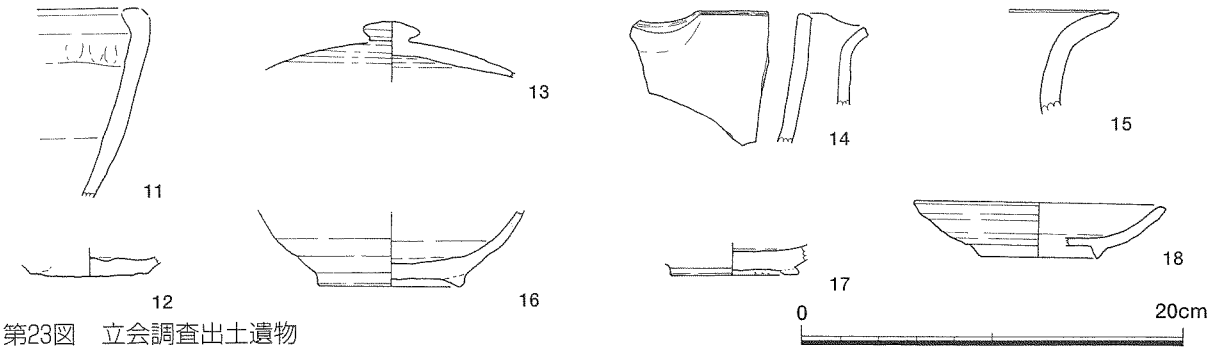
基本的な層序については立会調査による新たな知見はないため、ここでは立会調査の際に出土した遺物について報告する。特に、遺物が多く、機械掘削の際に遺物を採集することができた調査範囲東端の管路部分の遺物を示す。

11、12は、Ｐ17地点の北４ｍから８ｍの間で出土した。いずれも暗灰色土の下位の灰黄褐色ないしは灰色土からの出土である。11は、瀬戸美濃産の施釉陶器で、水差の口縁部片であると思われる。12は、須恵質の陶器の底部である。

13から17は、Ｐ15とＰ17の間の管路部分で出土した。13は、古代の須恵器の杯蓋である。Ｐ17に近い地点の灰黄褐色から灰色土から出土している。14、15は須恵質の陶器である。14は、片口の鉢の口縁部片である。小片のため、傾きは不明である。15は甕の口縁部である。Ｐ15の北10ｍ程の地点の灰黄褐色ないし

は灰色土から出土した。こちらも小片である。 16、17は山茶碗である。何れも、P17に近い地点で出土している。16は、暗灰黄褐色土からの出土で、図化部の半分以上が残っており、遺存度が高い。比較的高い高台を持ち、体部はやや丸みをおびており、第Ⅶ期第3型式頃に比定できる。17は低い高台が付いている。

18は、P16の北2mほどの地点で、灰黄褐色ないしは灰色砂質土から出土した。灰釉陶器の皿で、図化部の半分程度が残存し、今回出土した遺物の中ではもっとも残りのよい個体である。断面が三角形の高台がつく。体部は口縁にむかって緩やかに広がり、端部は丸い。黒笹90号窯式から折戸53号窯式［齋藤1994］の遺物に近いものと思われる。湧水や立会調査という制約もあって遺構はわからなかったが、遺存度からみて遺構があった可能性もあろう。



第23図　立会調査出土遺物

4、まとめ

千音寺遺跡は、これまでの調査でも明らかなように遺構の密度がそれほど高くない。更に、今回の調査では、各調査区が極めて狭く、かつ湧水があったため、遺構を確認することはできず、包含層掘削中に古代の須恵器、山茶碗等の遺物を採集するにとどまった。ただし、この事は遺構がまったく存在しなかったということではなく、あくまで確認できなかったと理解しなければならない。採集された遺物はこれまでの調査でも確認されているものであり、新たな知見を加えることはできなかった。

ただ、発掘調査および立会調査の結果から、今回の調査範囲東端の南北道路上や調査区北部のP12付近では遺物の出土量が他に比べると多いことが確かめられた。また、各調査地点の堆積状況などの記録を加えることができた。わずかではあるが、千音寺遺跡の内容を明らかにするためのデータを得たといってよいだろう。

参考文献

斎藤孝正 「中世山茶碗窯の研究－編年に関する一考察－」『名古屋大学文学部研究論集ＣＩ　史学34』 1988

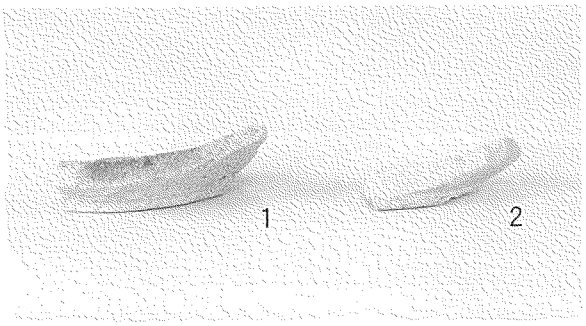
齋藤孝正 「東海地方の施釉陶器生産－猿投窯を中心に－」『古代の土器研究－律令的土器様式の西東３－』 古代の土器研究会　1994

山田鉱一・野口泰子『埋蔵文化財調査報告書35　千音寺遺跡（第１・２次）』名古屋市文化財調査報告47　名古屋市教育委員会　2000

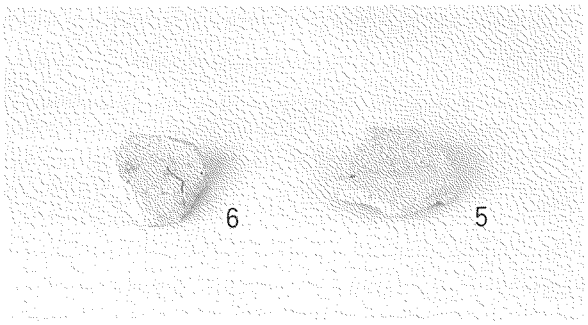
伊藤雅乃 『千音寺遺跡（北宮田団地）発掘報告書』 名古屋市住宅都市局　2000

野澤則幸「千音寺遺跡第３次発掘調査」『埋蔵文化財調査報告書36　朝日遺跡（第７～10次）　茶臼山古墳（第３次）　千音寺遺跡（第３次）　Ｈ－113号窯』名古屋市文化財調査報告49　名古屋市教育委員会　2001

東園千輝男 『下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　千音寺遺跡』 名古屋市上下水道局下水道本部　2001

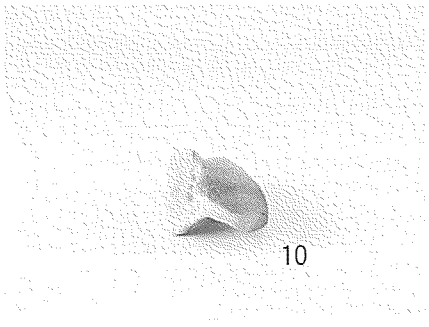


P18　出土遺物

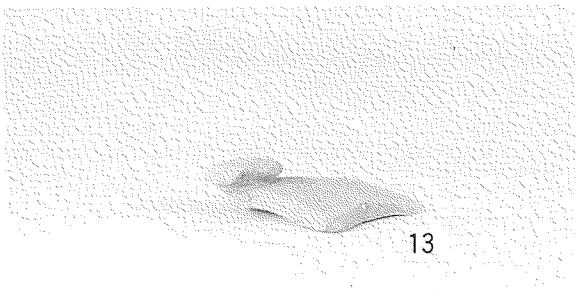


P12　出土遺物

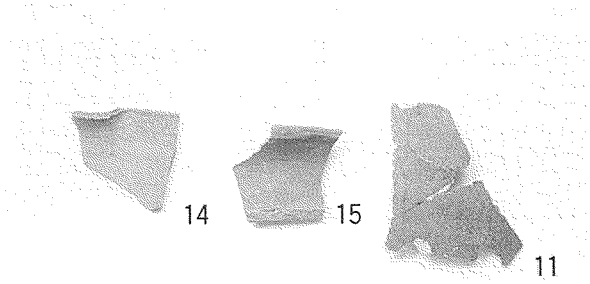
P 8　出土遺物



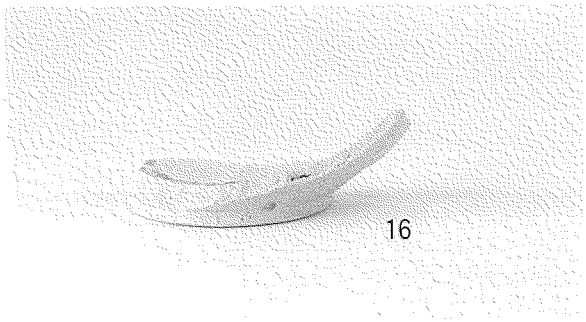
P 8　出土遺物



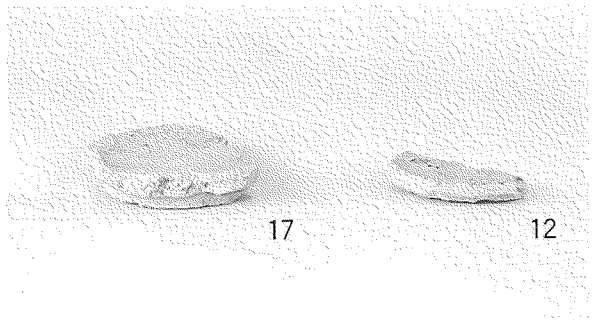
立会調査出土遺物



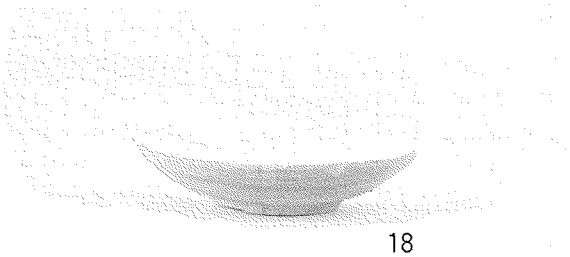
立会調査出土遺物



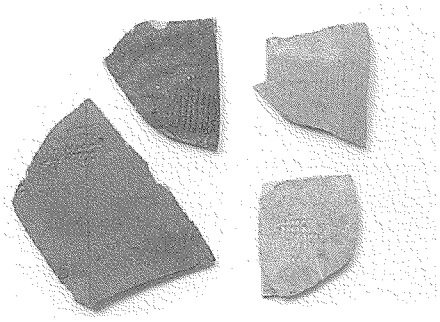
立会調査出土遺物



立会調査出土遺物



立会調査出土遺物



立会調査出土遺物

報告書抄録

ふりがな	まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	埋蔵文化財調査報告書
副書名	正木町遺跡（第14・15次）　伊勢山中学校遺跡（第９次）　竪三蔵通遺跡（第16次） 千音寺遺跡（第４次）
巻次	41
シリーズ名	名古屋市文化財調査報告
シリーズ番号	54
編著者名	伊藤正人　藤井康隆　村木誠
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所在地	〒457-0026　愛知県名古屋市南区見晴町47 TEL（052）823-3200　FAX（052）823-3223
発行機関	名古屋市教育委員会
所在地	〒460-8508　愛知県名古屋市中区三の丸三丁目1番1号 TEL（052）972-3268　FAX（052）972-4178
発行年	2002年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	面積 ㎡	調査原因
まさきちょういせき 正木町遺跡	なかくまさきにちょうめ 中区正木二丁目1108番-1	23100	7-19	35°08′42″	136°54′00″	2001.2.26 ～2001.3.23	70	個人住宅建設
まさきちょういせき 正木町遺跡	なかくまさきにちょうめ 中区正木二丁目1107番1・2	23100	7-19	35°08′47″	136°53′59″	2001.4.2 ～2001.4.27	110	個人住宅建設
いせやまちゅうがっこういせき 伊勢山中学校遺跡	なかくまさきさんちょうめ 中区正木三丁目２番	23100	7-20	35°08′39″	136°53′53″	2001.1.9 ～2001.2.9	80	中学校擁壁工事
たてみつくらどおりいせき 竪三蔵通遺跡	なかくさかえいっちょうめ 中区栄一丁目2219	23100	7-4	35°09′40″	136°53′56″	2001.7.23 ～2001.8.31	150	マンション建設
せんのんじいせき 千音寺遺跡	なかがわくとみたちょうせんのんじちない 中川区富田町千音寺地内	23100	13-15	35°09′26″ ～29″	136°48′34″ ～42″	2001.7.2 ～2001.7.31	72	下水道工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
正木町遺跡	集落跡	弥生時代～江戸	整地土	土師器・須恵器	第14次調査
正木町遺跡	集落跡	古代　中世	整地土	土師器・須恵器	第15次調査
伊勢山中学校遺跡	集落跡	弥生時代～古代	住居跡、ピット	土師器・須恵器	第９次調査
竪三蔵通遺跡	集落跡	古墳時代 近世	住居跡 井戸	土師器・須恵器 陶磁器・焼塩壷・土人形	第16次調査
千音寺遺跡	集落跡	中世	なし	山茶碗	第４次調査

名古屋市文化財調査報告54

埋蔵文化財調査報告書41

2002年３月29日　発行

編集　名古屋市見晴台考古資料館
発行　名古屋市教育委員会
印刷　菱源株式会社